

見えざる帝国の一員になっ  
たのでバンビちゃんを助  
けることにした

御米粒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

BLEACHの世界に転生したものの見えざる帝国の一員になってしまったオリ主が原作で悲惨な結末を迎えるバンビエッタを助けるついでにセフレになるお話

# 目次

---

バンビちゃんとセフレになりたい

1

バンビちゃんは束縛が激しい | 21

バンビちゃんは孕みたい | 36

バンビちゃんに黙って浮気 | 59

バンビちゃんは慰められたい | 77

バンビちゃんは浮気されている | 102

バンビちゃんは孕んでもやりたい | 前

編 | 131

バンビちゃんは孕んでもやりたい | 後

編 | 145

バンビちゃんはストレスが溜まっている | 145



# バンビちゃんとかセフレになりたい

神様のご好意で俺は『BLEACH』の世界に転生した。

交通事故故により17年の生涯を終えた俺だったが、生前に善行を重ねたことが評価されたようで、神様から第二の人生を与えられることとなった。

神様はともよくしてくれて、好きな作品に転生させてくれるだけでなく、転生先で生き抜けるよう複数の能力を転生特典として与えてくれた。

俺は神様に感謝の言葉を述べ、意気揚々と転生したが、予想外の出来事が発生した。

転生した俺は——『見えざる帝国』の一員になっていたのだ。

『見えざる帝国』は、「陛下」と呼ばれる指導者のユーハバツハが率いる滅却師の集団組織で、千年血戦篇で一護たちと敵対する存在だ。

周りを見渡すと白い隊服を着た滅却師が大勢いる。

隣りの奴に何の集まりか聞いてみると、これからユーハバツハの演説が始まるのとのことだった。

5分ほどの演説を聞き終え解散となったが転生したばかりで右も左もわからない俺は隣の奴についていくことにした。

どうやら先ほどの集まりは新人の歓迎式だったようで、これから配属先を決められるらしい。

配属先を告げられ早速業務開始かと思っただが、今日は帰宅していいとのことだった。思っただよりホワイトな組織でほっこりした。

こうして俺の第二の人生が始まったのだった。

☆☆☆

転生してから一年が経過した。

俺は目立たぬよう下っ端としてそれなりに真面目に働いていた。

なので当然『シュテールンリッター星十字騎士団』や『ヤークトアルメイ狩猟部隊』には属していない。

「今日も呼び出されなかったな……」

死神として一護の仲間になる機会を失った俺は新たな目標を立てた。

それは——バンビエッタ・バスターバインを助けることだ。

バンビちゃんの愛称で慕われているバンビエッタは星十字騎士団の一人にして、ユーハバツハから『E』の聖文字シユリフトを授かった滅却師だ。

黒髪ロングの美少女で、性格は勝ち気で好戦的。

また、かわいい見た目とは裏腹に、ストレスを解消するために好みのイケメンをセックスした後には殺すという残忍な一面を持っている。

つまりクソビッチである。

バンビエツタは、同じ女性滅却師であるリルトット・ランパード、ミニーニャ・マカロン、キャンデイス・キャットニップ、ジゼル・ジュエルの4人を率いて「バンビーズ」というチーム名を名乗っていたが、バンビエツタが勝手にリーダーを気取っていただけで、他の4人からは軽んじられており、一人だけハブらている描写も多かった。

そんな可哀そうな子のバンビエツタだが、粕村左陣との戦いで瀕死の重傷を負っていた所に、ジゼルによって絞殺され、ゾンビに改造されてしまい、ジゼルの玩具になるという悲惨な結末を迎えてしまう。

中身はクソビッチだが、外見は好みだったので、バンビエツタとよろしくやりつつ、ジゼルから助けることにした。

なので彼女からの呼び出しを一年以上待っているんだが、いまだにお誘いが来ない。「うーん、そこそこイケメンだと思っただけだな」

このままでは、先にキャンデイスに呼ばれるかもしれない。

彼女も好みの外見をしているが、実はマゾっぽいバンビエツタの方が好きだ。

「おーいー」

「ん？」

トイレでフェイスチェックをしていると、同僚が駆け込んできた。

「こんなところにいたのか……。探したぞ！」

「悪い悪い。どうしたんだ？」

「バンビエツタ様がお前をお呼びだ」

「マジで!？」

噂をすれば影とやら。

ようやくバンビちゃんからお呼びがかかったぜ。

「ああ。すぐに部屋に来てよ」

「りょーかい！」

俺は駆け足でバンビエツタの部屋に向かった。

途中でバンビエツタの面々とすれ違い、すぐに俺が呼び出された理由がわかった。

バンビエツタの誰かになにか言われて、イライラしたのだろう。

そのストレス解消をするために俺が生贄になったのだ。

「失礼しまーす！」

彼女から「入っていいわよ」と返事を聞き、慎重にドアを開ける。

すると明らかに不機嫌な表情のバンビエツタが俺を見据えていた。



「遅いわよ」

「すみません!」

「それでも駆け足で来たのだが言い訳はしない。

彼女をより不機嫌にさせて、エッチする前に殺されるのは勘弁。

まあ、俺が死ぬことはないんだけど。

「なんで呼ばれたかわかる?」

「はい。ストレス解消のためにセックスがしたいんですよね?」

「はつきり言うんじゃないわよ……」

「すみません!」

「もういいわ。あんた経験は?」

「ありますよ」

嘘ですありません。

せいぜい兄貴のエロゲをプレイしたり、エロ同人を読み漁ったくらいです。

「ならさっさとするわよ。ついてきて」

「はい!」

言われるがまま付いていくと、寝室に案内された。

部屋そのものはシンプルで、ベッドとクローゼットしかなかった。

「座っていいわよ」

「お、お邪魔します……」

靴を脱いで部屋の中央にどんと置かれた巨大ベッドの上で向き合う。

「さっそくするわよ」

「んっ!？」

いきなりキスをされた。

「んっ、んんむ、んんっ」

バンビエツタは俺の背中に腕を回し、唇を繰り返し重ねていく。

「どう? 気持ちいい?」

「そうですね」

回答すると、バンビエツタがまた唇を重ねてきた。

甘くて、とろりととろけそうな柔らかい唇が押しつけられ、わずかに差し出された舌が俺の唇を舐めてくる。

キスってこんな甘くて気持ちいいものだったのか……。

「ん、ふあ……もうスイッチ入っちゃったかも♡」

バンビエツタは唇を離すと、ベッドの上でころんと横になった。

「こっから先はあんたがリードしなさい。経験者なんでしょ?」

ベッドに横になったバンビエッタは、隊服の上が少しめくれておへそが見えて、スカート裾も乱れ、ほっそりとした太ももがあらわになっている。

俺は、思わずごくりと唾を飲み込んでしまう。

「早くしてよ」

待ちきれないのか、バンビエッタは隊服の前ボタンをぶちぶりと外して、前をだけさせた。

わずかに開いた隊服の間隙から、赤色のブラジャーが覗いている。

大きく盛り上がった二つのふくらみ。

こんなものを見たら触らずにはいられない。

「んっ……んむっ……あっ……」

俺はバンビエッタにキスをしながら、ブラ越しに胸をふわっと触れて揉み始める。

「……あんた、光栄に思いなさいよ。あたしとエッチできるんだから」

「もちろん思ってますよ」

「ひやつ!?! んっ、んあっ!」

円を描くように胸を揉むと、バンビエッタはビクンと身体を震わせた。

「けっこう胸大きいですね」

「んくっ、あたし、着やせするタイプだから……はあんっ!」

初めて生で聞く美少女の嬌声に、俺の興奮は増していく。

「あんっ、ちよつと……脱がすな……!」

俺はバンビエツタのブラを上にはずらし、その乳房をあらわにする。

形がよくて大きなおっぱいが、ぷるんと揺れながら俺の目の前に現れた。

乳首はピンク色で、中身とは反対に綺麗だった。

「んっ、あつ……いきなり吸って……!」

俺はこらえきれず、すぐにその乳首にむしやぶりついた。

舌先で乳首をペろペろ嘗めまわし、ちゅうちゅうと音を立てて吸い上げる。

「あつ、あんっ……赤ちゃんじゃないんだから、もつと優しく吸いなさいよ……!」

「……すみません」

「まあ、いいけど……ふあっ!」

バンビエツタはおっぱいに夢中の俺の頭を抱え、身体をよじっている。

俺は無我夢中で乳首を吸ったり、舐めたり、噛んだりを繰り返した。

「ちよ、ちよつと待ちなさい……。下着脱ぐから……」

「……あ、はい」

いつの間にか顔を蕩けさせていたバンビエツタの一声で中断させられる。

「隊服も脱がなくていいんですか?」

「この後に星十字騎士団の集まりがあるのよ。だから汚さないでちょうだい」

「おいおい。精鋭部隊の集まりの前にセックスしてるのかよ。」

「善処します」

「汚したら殺すわよ」

「……了解しました」

汚さなくても殺すつもりだろうに。

バンビエツタが下着を脱いだのを確認し、乱れていたスカートをめくり上げ、性器に指先で触れてみる。

「んあっ♡」

バンビエツタのおまんこは、びっくりするくらい濡れていた。

「めっちゃ濡れてますね」

「……うるさい！ あれだけ責められたら濡れるに決まってるでしょ！」

「そうなんですか？」

「そうよ！ だからあんたが悪いのよ！」

「えー……」

逆切れされてしまった。

「いいから続けて。……あたしをもっと気持ちよくさせなさいよ」

「わかりました」

恐る恐る熟したおまんこに人差し指を入れてみる。

「んふうっ」

第一関節まで入れると、膣内に溜まっていた愛液が溢れてきた。

「すげえっ!」

「あっ、あんっ♡ ひいあっ♡ うあっ♡」

膣内を掻き回すたびに、バンビエツタは淫らな声を上げ、愛液がシーツに垂らし続ける。

しばらく指で責めていると、クンニするよう指示を受けた。

俺はバンビエツタの両足を広げ、トロトロになつているあそこに口を思いつき押し付けて舌で責め始めた。

「あっ、これっ♡ いいっ♡ あああんっ♡」

どうかにかこの女を本番前に絶頂させたい。

そう思った俺は最初から全力でバンビエツタのあそこを舐めまくる。

「あひっ♡ んんっ、あふあっ♡」

クンニされるのが好きなのか、バンビエツタの喘ぎが大きくなっていく。

俺は卑猥な音を立てながら、長い舌を膣に入れたり、愛液を吸ったり、クリトリスを

舐めたりして激しく責め立てた。

「はあんっ♡ んっ、んんっ♡ ああっ♡」

頭を振り、俺の頭を両手で押しつけながらバンビエツタが絶頂に抗っている。

「ああんっ♡ あっ、あっ、あんっ♡ だめえっ♡ んあああっ♡」

俺は止めを刺すべく、勃起したクリトリスを強く吸った。

「い、いくっ♡ いっちゃ……ああああんっ♡」

刹那。バンビエツタのあそこから透明な液体が噴射された。

隊服を汚さないため我慢したのか、少量ではあったがクンニしていた俺の顔面にかかってしまった。

「んはあ……あっ……んう……」

「気持ちよかったですか？」

「……見ればわかるでしょ」

俺のドヤ顔が気に食わなかったのか、バンビエツタがジト目で睨む。

「少し休みます？」

「馬鹿にしないで。これくらいで休憩なんて必要ないわよ」

息を切らしながらバンビエツタは、うつ伏せになり、枕に顔を埋めるようにする。

「後ろからするんですか？」

「悪い?」

「いえ!」

てつきり騎乗位で責められると思っていた。

バックが好きということは、バンビエツタは本当にマゾ体質なのかもしれない。

「早く入れっ……ひいつ!」

ズボンとパンツを脱いでると、バンビエツタが悲鳴をあげる。

「な、何よ! 何なのよ! その大きさはっ!」

「え……?」

振り向いたバンビエツタは俺の逸物を見て驚愕した。

そんなに俺の息子は大きいのだろうか。

確かに修学旅行の風呂場で同級生たちに驚かれたが、クソビツチなバンビエツタなら黒人並みの逸物を経験していると思っただけが……。

「そんな大きいですか?」

「……問題ないわ。早く入れなさいよ!」

バンビエツタの顔に恐怖の色が若干浮かび上がる。

だが彼女の性格からして素直に怖いとは言えないだろう。

なので俺は遠慮なく入れさせていただくことにした。



「入れますね」

俺はバンビエッタの可愛いお尻を掴み、ゆつくりと逸物を挿入させていく。

「あがつ！ お、大きいっ……！」

「大丈夫ですか？」

「あ、当たり前じゃない！ さっさと全部入れなさいよ！」

「わかりました」

バンビエッタは経験豊富なのであそこが緩くなっていると思っただが、そんなことはなく、俺の逸物をギュツと締め付けてくる。

「ああっ、んっ……奥まできたあっ……！」

ずぶずぶと一番奥まで入れて、腰の動きを止める。

「動かしませよ」

「……いいわよ」

バンビエッタは枕をギュツと抱きしめ、後ろをちらりと見てから返事をした。  
「んっ、ああっ、あああああっ！ んくう……うあっ！」

俺はバンビエッタの尻を掴みながら腰を振る。

バンビエッタは可愛い声を上げながら、膣内でしつかりと絞めつけてくる。

「あんっ♡ んあっ♡ あひいいんっ♡」

何度も突かれて、ぎしぎしと軋むベッドの上で腰を少し浮かして、俺にお尻を押しつけてくるバンビエツタ。

「はひっ、んぐあっ♡ 膣内が抉れて……んおおっ♡」

「やばい、止まらない！」

「やんっ、あっ、ああんっ♡ ちよっ、激しくずぼずぼしたらっ……♡」

俺は高まった興奮を抑えきれず、夢中になって腰を振り続ける。

バンビエツタの膣内も締め付けが強くなり、精液を搾り出そうとする。

「ああああっ♡ あひいっ♡ 壊れるっ♡ 壊されちゃうっ♡」

容赦なくピストンをされるバンビエツタが時折振り向いてくる。

その顔は、白目を剥き、だらしなく開いた口から舌が垂れており、とても他人に見せられるような顔ではなかった。

「あひやあんっ♡ あああああっ♡ イクウウ！ オマンコイクうう♡」

「俺もイキそうですっ！」

バンビエツタの膣内の気持ちよさ、下品なアへ顔のおかげで、射精感が一気に高まつてしまった。

「もう限界っ♡ イグっ♡ イグウウウッ♡」

「出しますよ！」

欲望を吐き出すべく、俺はとどめにひときわ強く腰を打ちつけた。

「あひやあああああああああつ♡」

バンビエツタは絶頂に達し、甲高い声を響かせた。

同時に俺も絶頂を迎え、膣穴に挿入している肉棒から怒涛の勢いで精液を放出した。

「あああんつ、凄いつ♡ 大量に中出しされてるうつ♡」

「うわ、全然おさまらない！」

「いいからっ♡ 全部あたしの膣内に出しなさいっ♡」

「わかりました！」

生まれて初めてのセックスに喜んでいたのか、射精は何度も続き、出し終えた頃には結合部から精液が溢れていた。

「あはああ……あああん……すごすぎい……♡」

バンビエツタが嬉しそうな表情で溜息をつく。

肉棒をゆつくり抜くと、ごぼおと汚い音を出しながら精液が大量にシートに零れだした。

「あはっ、すごっ♡ あんた、どんだけ出してんのよ」

「すみません」

「謝らなくていいわよ。それよりティッシュ取って」

「はい」

隊服は汚していないが、あれだけ中出ししたらシャワーを浴びたほうがいいと思うのだが、時間がないのだろう。

バンビエツタは丁寧にそこをティッシュで拭きとり、ブラや上着の乱れを直している。

「ふう、スッキリした」

これで彼女のストレスは解消された。

なので俺はもう用済みだ。

「思ったより気持ちよかったわ」

「俺もです」

「そう。それじゃ——サヨナラ」

刹那。俺の上半身と下半身が真っ二つに分かれた。

性欲を満たしてストレスが解消されたバンビエツタに俺は必要なくなったのだ。

「あ、やばっ。いつもの癖で殺しちゃった」

無惨な肉塊となった俺を見下ろしながらバンビエツタが言う。

「セフレにしようと思ったのに……。やっちゃったじゃない……」

どうやら俺の身体を気に入ってくれてたようだ。

「またキャンデイスに怒られるかも」

「そうですね。あの人も部下をつまむの好きですからね」

「そうなのよ——え？」

キャンデイスとも可能なら一度くらいやっておきたい。

「どうしたんです？」

「な、なんで……」

「はい？」

「なんで生きてるのよおおおおおおお!!？」

バンビエッタの絶叫が部屋に鳴り響く。

「なんでって俺が不死身だからですよ」

「はあっ!!？」

「よいしょ。上半身と下半身を同時に動かすの大変なんですよ」

身体を接続するべく分断した二つの肉体を動かす。

なんとか身体をくつつけると、一瞬で二つから一つの肉体に戻った。

「よし。これでオツケー……じゃない。隊服を新しく貰わないと」

身体は元に戻ったが、隊服までは戻せなかった。

「あ、あんた……何者なの？」

「ただの滅却師ですけど」

「ただの滅却師が不死身なわけないでしょ！」

俺の回答に納得がいかないバンビエツタが声を荒げる。

「もしかしてあんたも、陛下から聖文字シユリフトを与えられているの……？」

「いえ。俺はただの下っ端ですよ」

「で、でもっ……！」

徐々にバンビエツタが怯えていくのがわかる。

「このままだと俺の性癖が歪みそうなので、俺の能力について実践を交えて説明する  
ことにした。」

「……そう。あんたの能力はわかったけど、陛下は知っているわけ？」

「知らないと思いますよ。知ってたら下っ端になんかしないでしょ」

「そうよね。……なんで力を隠してるわけ？」

「目立ちたくないから」

「はあっ!？」

「俺は平和に暮らしたいんです。仕事をそれなりにこなしつつ、バンビエツタ様とセツクスしたり」

「あ、あたしとって……。それよりそんな強かったら敵なんていないじゃない」

「そうですね」

「……もしかして陛下にも勝てたりするわけ？」

「恐らく」

俺の回答にバンビエッタが絶句する。

「ただ陛下と戦うつもりはないので、このことは二人だけの秘密にしてくれと助かります」

「もしあたしがほかの人に喋ったら？」

「そうですね。……少しだけ痛い目見てもらうかもしれないです」

「っ……」

「試しに今やってみます？」

「や、やだ……やめてよ……」

怯えるバンビちゃんかわええ。

「冗談ですよ。バンビエッタ様には酷いことはしませんから」

「……信用していいわけ？」

「はい。俺はバンビエッタ様とセックスができればいいので」

「わかった。このことは誰にも言わないであげる」

「ありがとうございます！」

こうして俺はバンビエッタとセフレになることができた。

死神たちとの戦いまでは、バンビエッタとのセックスライフを楽しもう。

「それじゃさっそく二回戦目やりませんか？」

「無理よ」

「なんで!？」

「この後に集まりがあるって言ったでしょ」

「あ、そうだった……」

「どれだけ元気なのよあんたは……」

セックスのすばらしさを知ったばかりなので仕方ないじゃないか。

「帰ったらしてあげるから部屋で大人しく待ってて」

「……いいんですか?」

「いいわよ。……あたしも気持ちよかったし」

獣になった俺は一晩中バンビエッタを貪った。

彼女がいくら悲鳴を上げてても、懇願しても、俺は欲望を吐き続けた。

翌朝。バンビエッタ一人じゃ俺の性欲を受け止められないので、キャンデイスを紹介するようお願いしたら却下された。

どうやらバンビちゃんは独占欲も強かったようだ。



# バンビちゃんは束縛が激しい

バンビエツタとセフレになってから数ヶ月が経過した。

いまだに虚<sup>ウエユシンド</sup>圏を占領したり、尸<sup>ソウルソサエティ</sup>魂界に攻め込んだりしていない。

つまり平和である。

俺は誰でもできるような簡単な仕事をこなしつつ、バンビエツタとのセックスライフを謳歌してる。

「ふああ……もうこんなに、硬くなってる……♡」

場所はバンビエツタの個室。

昼休みに呼び出された俺はバンビエツタにパイズリをされていた。

「熱くて大きい……れろっ、ぢゆるっ♡」

バンビエツタは椅子に座る俺の前に跪き、衣服をはだけさせて、豊満な乳房で勃起した肉棒を愛おしそうに挟み込み、舌を這わせた。

「ああ、チンポ♡ 今日もたくましいチンポしてるじゃない♡」

俺たちは都合が合えば、時間帯を問わずに淫らな行為を行っている。

「竿は胸でしごいて、亀頭はたっぷり舐め回してあげる……んちゅっ、れろお♡」

「うっ……いっ」

竿部分は乳房の温かい柔らかさに包まれて、上下に優しく揉みしごかれ、快感が肉棒から腰へと熱を持たせていく。

亀頭は唾液を乗せた舌に表面を舐め回されており、尿道口から快感が駆け抜けている。

「あいかわらず上手ですね」

「んじゅっ、ぢゅぷっ♡ 当たり前じゃない♡ んぷっ、れりゅっ♡ あたしを誰だと思ってるのよ♡」

クソビッチで実はビビりなバンビエツタ様です。

「もつと気持ちよくしてあげるんだから♡ んっ、ちゅっ、ちゅるっ♡」

バンビエツタは認めないだろうけど、尽くすことへの悦びに浸っている。

肉棒を乳房にさらに深く挟み込み、左右から力を加えて圧迫感を高めてきた。

亀頭もただ舐めるだけでなく、裏筋やエラにも舌を滑りこませて、敏感な部分を執拗に責めてくる。

「じゅるるっ、れろおっ、ペろっ♡ んちゅっ、ぢゅるるっ……んぷっ、美味しい♡」

妖しく微笑みながらバンビエツタは乳房を揺する上下幅を大きくさせて、竿をより丹念に揉み込み始めた。

「そんなに美味しいですか？」

「美味しいわよお♡ れろべろっ♡ ちゅっ、ぢゅぷぷっ♡」

目を蕩けさせ、より熱心に肉棒に奉仕し、精液を搾取しようとする。

「すごく気持ちよくしてくれてるので、お礼にこれをプレゼントしてあげますね」

「……なによ？」

俺はニヤリと笑みを向けながら、食後に飲む予定だった液状のヨーグルトを乳房の谷間に向けて垂らしていく。

「んひゃっ、ちよっと！ なにするのよ!？」

「これ使えばパイズリしやすくなると思って」

「もう……冷たいじゃない」

「いいから続けてくださいよ」

「わかってるわよ。……ちゆるっ、べろっ、れろお♡」

「どうです？」

「色とヌルヌルした感じ……精液みたいで、気持ちいいかも……♡」

「それはよかった」

「それにチンポの生臭い味がヨーグルトの甘味で引き立って美味しいかも♡ん

ぢゅっ、れぢゅるっ♡」

バンビエツタはヨーグルトを舌先ですくい、れろれろと亀頭を舐り回した後、二つの味を堪能していく。

その様子は卑猥極まりなく、白い粘液まみれになった乳房や肉棒と合わせて、見ていられるだけで高揚してしまう。

「れぢゅっ、じゅるるっ♡ んんっ、んはあ、美味しい♡」

「そんなに美味しいんですか？」

「美味しいわよ♡ れろお♡ いくらでもいけちやうかも♡」

ヨーグルトが肉棒と乳房に擦れてグチュグチュ下品な音が鳴り続ける。

「んぢゅっ、ちゅぶっ♡ んふう、美味しいっ♡ れろっ、じゅるるっ♡」

ヨーグルトと引き立った肉棒の味わいに、バンビエツタの舌もますますよく動くようになり、敏感な部分を熱心に舐め回す。

「だんだん先っぽからしよっぱい味が出てきたわね♡ もっとチンポ絞って、濃いの出させてあげる♡ んぶっ、れぢゅっ♡」

俺の興奮を感じ、白く汚れた乳房を必死で上下させ、にちやにちやと卑猥な音を何度も鳴らして、絶え間なく肉棒をしごきにかかる。

「ほら、早く出しなさいよ♡ あたし専用のザーメンを♡」

「もうすぐ出ますよ」

「んっ、ぶああっ♡ チンポ、ビクビクしてきたわね♡」

快感で跳ねる肉棒を押さえるため、バンビエツタは乳房を両腕で寄せ、乳圧をあげてしごき立ててきた。

それにより圧搾感が強まり、射精感が徐々に高まっていく。

「んひやつ、やんっ♡ チンポ跳ねすぎよお♡ オッパイにチンポが食い込んで、気持ちいいっ♡」

自分も絶頂したいのか、バンビエツタがヨーグルトのぬめりを最大限利用し、摩擦を高めながら激しく乳房を振るう。

「んあっ、気持ちいいっ♡ あひっ、ああんっ♡ チンポ食い込んでっ、跳ねてっ、挟られてっ♡ ひいつ、あひいつ♡」

「フェラもしっかりしてくださいよ」

「わかつてるわよお♡ れろっ、ちゅぷっ♡ べろっ、ぴちゅっ♡ ザーメン早くう♡」  
俺に促され、細めた舌先で鈴口をほじるように動かし、精液を求める。

「くっ、射精る……!」

「ああんっ、んぶう、出してえっ♡ 口の中にたっぷり出なさいよお♡」  
「いよいよ解放の瞬間を迎えた。」

「んぶあああああああああっ♡」

肉棒の先端から、いやらしく待ち構える口内へ勢いよく精液が撃ちだされ、バンビエツタは精飲の悦びに、蕩けきった嬌声をあげた。

「はぷっ、んぶうっ♡ ぢゆるるっ、んぐうっ♡」

「まだ出ますよ」

次々にバンビエツタに目がけて精液が噴射される。

「んぱっ、はつぶっ♡ んぢゆっ、ごくっ、んぼおっ♡」

「美味しそうに飲んでくれますね」

「だって美味しいものっ♡ んぶっ、ぷはあっ♡」

「協力してあげますよ」

顔面にかかった精液を集めて口内に移動させる。

バンビエツタは蠱惑的な笑みを浮かべたまま、美味しそうに飲み続ける。

「ぷはあっ……ふう、はあ……美味しかったわあ♡」

バンビエツタはだらしなく蕩けたその顔で荒い呼吸を繰り返す。

「ねえ、次は下の口に出しなさいよ♡」

開脚して、いつの間にか染みだらけになった下着を見せつけてくる。

「すみません。もう昼休みが終わるんで行きます」

「はあっ!?!」

時計を確認すると12時55分を過ぎており、午後の業務開始まで5分を切つていた。

「ちよつと！ あんただけ気持ちよくなつてずるいじゃない！」

「バンビエツタ様も気持ちよくなつてたでしょ？」

「そうだけど……あそこが疼いてしょうがないのよ！」

「我慢してくださいよ。仕事上がったらすぐに来ますから」

「無理っ！ あんた、仕事サボりなさい！」

バンビエツタは性欲が理性に負けて、時たま無茶な命令をしてくる。

「上司に怒られますよ！ それにバンビエツタ様も仕事あるでしょ？」

「あたしは午後から休みよ。だからあんたがサボれば問題ないのよ」

「問題ありますから！」

「いいからあたしの言うことを聞きなさいよ！」

なんて我儘でしつこい女だ。

こころなつたら脅すしかない。

「あんま我儘言うようだと、またアレをお見舞いしますよ？」

「ひいつ……!?!」

利那。バンビエツタの顔が恐怖一色に染まり、全身がガクガクと震えだした。

「や、やだ……やめてよ……」

「どうしようかな」

「お、お願いっ！ もう我儘言わないから……。アレされたら、あたし壊れちゃうわよお……」

しまいには涙目になり、懇願し始めた。

アレの効果は抜群だ。

「なら大人しく待っててくださいませ？」

俺の問いに、可哀そうなくらい必死に首を縦に振るバンビエツタ。

「それじゃ俺は仕事戻りますね」

「……わかったわよ」

俺は恐怖で怯えるバンビエツタを置いて、職場に戻っていった。

☆☆☆

俺が<sup>ヴァンデンライヒ</sup>見えざる帝国で暮らしていくうえで気をつけていることがいくつもある。

それはユーハバツハやバンビエツタ以外の<sup>シュテルンリッター</sup>星十字騎士団となるべく接触しないこと

だ。



バンビエツタもそうだが、基本的に頭がいかれていゝる奴ばかりだ。俺のような下つ端が気まぐれで殺されたりすることもある。なのでセックス以外であいつらとはなるべく関わりたくないのだ。

「しかしバンビエツタがあそこまで束縛が激しいとは」

バンビエツタにキャンデイスを紹介するようお願いしたら、ものすごい形相で断られたことがある。

時間をおいて改めてお願いしたが、再度断られてしまった。

セフレだけど完全に彼氏と同じ扱いをされている。

「溜息なんてついてどうしたんだ？」

休憩から戻ってきた同僚が声をかけてきた。

「いや、仕事がだるいと思つて」

「毎日同じこと言つてるな」

「お前もそう思わないか？」

「確かにそうだが」

「女の子少ないし」

「お前、バンビエツタ様に聞かれたら怒られるぞ？」

「今日は午後休だから大丈夫だよ」

「休みまで把握しているのか。さすがセフレだな」

俺がバンビエッタと関係をもっていることは、隊員のほとんどが知っている。だからこうしてからかわれたりすることもしよっちゆうだ。ただ、バンビーズ以外のシユテルンリツター星十字騎士団の奴らは興味がないようで、すれ違っても声をかけられることはない。

「そういえば俺もやったぞ」

「キャンデイス様と？」

「正解。よくわかったな」

「部下に手を出す人は限られてるからな」

「確かに。これで俺もイケメンの仲間入りだな」

キャンデイスの趣味はイケメンの部下をつまみ食いすることだ。バンビエッタと違うのは最後に殺さないこと。だから下っ端にはバンビエッタよりキャンデイスの方が人気がある。

「気持ちよかった？」

「ああ。おっぱいも大きかったぞ」

「見ればわかるよ。いつも谷間全開の隊服着てるじゃん」

「そりゃそうだ」

そうなる俺がキャンデイスとセックスしたら、こいつと穴兄妹になるのか……。そ

れは嫌だな。

「だからさ、記念に今日飯いかないか？」

「なんの記念だよ？」

「俺のイケメン認定記念！」

「祝つてやりたい気持ちは一切ないけど、バンビエツタ様と会う予定だから無理だ」

「またかよ……。お前から週に何回やってんだよ？」

「五回くらいじゃないか」

「やりすぎだろ」

「俺に言わないでくれ」

ちなみにやる場所はバンビエツタの部屋と決まっている。俺のような下っ端隊員の部屋は狭くて壁も薄い。もし俺の部屋でやれば隣の部屋の住人に聞かれるのは間違いない。

「性欲と強さつて比例してんのかな？」

「比例してたら俺もお前も屋シユテルンリツタ十字騎士団の一員になってるよ」

「確かに。あー、ミニーニヤ様ともやりてえな……」

「それは同意。多分あの人が一番胸が大きいだろ」

「だよな。ほかの二人はどうよ？」

「ガキと男には興味ねえわ」

「だよな。……こんな話聞かれたら俺たち殺されるな」

「だな。そろそろ仕事再開しようぜ」

「おう」

☆☆☆

「あんっ♡ んあっ♡ あふあっ♡」

仕事を上がってから三時間後。

バンビエツタは俺に跨り、淫らに腰を上下させ、快楽を貪るように腰を振っていた。

「おっぱい揺れすぎでしょ」

部屋に入っすぐバンビエツタに押し倒され、休憩もなしにずっとセックスをしている。

「あああん♡ あんたも動きなさいよ、はあんっ♡」

「わかりましたよ」

バンビエツタのくびれた腰を掴み、下から勢いよく突き上げる。

「あひいいいいっ!?!」

「これでいいですか？」

「いいっ♡ もつと強くしてえっ♡」

「本当我儘だな」

下から快樂を与えるたびに、バンビエツタは淫らに声を上げる。

淫らなのは声だけではない。

端正な顔は見るも無残なアへ顔になっており、シュテルンリッター星十字騎士団の威厳は完全になくなっていた。

「んひやつ♡ んおおっ♡ おほおおっ♡」

「バンビエツタ様、下品すぎますよ」

「う、うるひゃいっ♡ こんな気持ちよくされたら、こうなっひゃうわよおっ♡」

「だったらもつと下品にしてあげますよ」

両手を腰からふるんふるん揺れている乳房に移動させる。

愛撫とは程遠い手つきで、力強く鷲掴みすると、バンビエツタの身体がビクンと反応した。

「あひやつ♡ おっぱいっ、握り潰されりゅっ♡」

「ほら気持ちいいでしょ？」

「気持ひいいっ♡ ひいあっ、んひいっ♡ これやばいっ♡」

体位を騎乗位に変えてから主導権を握っていたバンビエツタだが、自分で動かすのも忘れて、快楽を与えられるだけの雌になっている。

「あ、俺もそろそろやばいっ！」

「いいわよ、出しなさいよっ♡ んふああっ♡ あたしの子宮にたんまりと精液出しなさいっ♡」

「わかりました！」

「あああっ♡ もうだめえ♡ イク♡ もうイツひやうっ♡」

抽送を一気に早くしてラストスパートをかける。

「んはああっ♡ イクっ♡ イクイクイクッ♡」

「射精だしますよっ！」

「あひやあああああああっ♡」

精液を放出すると同時に、バンビエツタが大きな嬌声を響かせた。

「あはあっ♡ きたあ♡ 子宮にザーメンきたあああっ♡」

「ちゃんと受け取ってくださいよ」

「当たり前じゃないっ♡ あんたも出し尽くしなさいよ♡」

やがて射精を終えると、バンビエツタが息を切らしながら覆いかぶさってきた。

「もう限界ですか？」

「う、うるさいわね……少しだけ休憩よ。はあはあ……」

「なら晩飯食べたいんで、どいてくれませんか？」

「……だめよ。あたしと繋がってなさい」

結局、俺が夕食にありつけたのは、それから二時間後のことだった。

お昼からお預けをくらっていたバンビエッタの性欲はすさまじく、風呂場に移動してからも求められてしまった。

## バンビちゃんは孕みたい

真夜中。俺はバンビエツタを連れて、俺たち以外誰もいない職場に足を運んでいた。

「あんたの職場に連れてって」

事後に二人で浴槽でイチヤイチャしてたら、バンビエツタが急にそんなことを言ってきた。

理由を聞くと、自室でのエツチに飽きたようで、普段俺が働いてる場所で抱かれたいなつたとのことだった。

そんなわけで、夜勤でもないのに俺は日中過ごしている場所に來ているわけだ。

「んあつ、はあ、はあ、くうっ……んう……」

デスクに上げさせると、バンビエツタは自ら隊服のボタンとブラを外し胸を露出させた。

「足も広げてくださいね」

「わ、わかつてるわよ……」

少しだけ恥ずかしながらも、言われたままにゆつくりと足を広げていく。

スカートから覗き見えるシヨーツには、発情していることを示すように、染みができ



ていた。

染みができた部分が盛り上がり、小さな機械音が聞こえてくる。

これは先ほど69をした際に、どちらが先に絶頂するかの対決で俺が勝ち、罰ゲームでクリトリスにローターをつけてもらっていたのだ。

「くひゅっ……んあっ、はあんっ♡」

後ろに手をつき腕を震わせたまま、ローターの振動に喘ぐバンビエッタ。

「すごい感じてますね」

「んひっ、ひいんっ♡ だって、これ、ずっと震えっぱなしで……はふうっ♡」

クリトリスから与えられる快感が全身を侵食し、バンビエッタの理性を蕩けさせていく。

移動中もずっとローターはクリトリスを刺激し続けていた。

職場で大股を広げ、ローターで感じて作った染みを見られる恥ずかしさも、快樂には抗えないように、腰を突き出したバンビエッタが、俺を誘うようにくねくねと下腹部をくねらせる。

「ふうっ、ああ、んっ♡ そんなに……見られると……ひゃうっ♡」

視姦される興奮に、乳首が勃起していく。

「バンビエッタ様、エロすぎでしょ」

「そ、そんなの知ってる……それより早くチンポがっ、欲しい！」

俺を興奮させたのか、バンビエツタが卑猥な言葉を口にする。

「俺も挿入したくなってきたけどもう少し我慢してくださいね。まずは……」

「ひやあっ!? そ、そんなものいつ手に入れたのよっ!? ああ、ふあ、あひいつ♡」

俺が手にしたアナルパールを見て、バンビエツタが息を飲む。

「言つてませんでしたっけ? ローターと一緒に作ったんですよ」

俺は能力を使って複数のアダルトグッズを作っていた。

ウァンデンライヒ見えざる帝国に大人の玩具専門店がなかったので、自分で作ることにしたのだ。

「これでいっばい気持ちよくしてあげますからね」

「くひゅっ!? ふっ、ひいつ、んっ……はふううんっ♡」

下着を脱がせて、ヒクつくピンク色の肉筋から溢れでる愛液をアナルパールに塗りたくる。

「ひいつ!? はひっ、んにいつ♡ふう、ひっ、あひいんっ♡」

窄んだアナルへと、先端を押し込んでいく。

肛門をグリグリと圧迫される刺激に、バンビエツタが堪らず嬌声を上げる。

「力抜いて。奥まで入れたいでしょ?」

少しずつ手に力を込めると、先端が埋め込まれていく。

「ふうっ、ひうっ、はあっ、くうっ……んひっ、んひいんっ♡」

ブルブルと太ももを震わせながら、愛液を溢れださせ、尻穴を穿られていく刺激に耐えるバンビエツタ。

「全部入れますよ!」

バンビエツタにそう告げると、残りを一気に押し込むことにする。

「くふううううう!! はっ、かはっ! んっ、んん——っ!」

連なった珠が腸肉を擦りながら、すべて中へと埋め込まれる。

尻穴を貫かれる衝撃に、堪らず声を放ちそうになったバンビエツタだが、ここが職場だということを出すと、飛び出しそうになった声を抑えきった。

「くうっ、ふうっ、ふひっ、ひいっ……んっ、んっ! んふううっ!」

唇を噛んで声を押し殺す分、形よい鼻穴から荒々しい息が溢れ出てくる。

ハリのある乳房が息づくたびに上下に動き、勃起した乳首をプルプルと震わせる。

「まだ慣れません?」

バンビエツタのアナルは開発してから一週間が経ったが、いまだに初心な反応をする。

「な、慣れるわけじゃないでしょ……あぐっ、んうっ!? お尻の中……ミッチミチになつてるのよ……んあっ、くひいんっ!」

尻穴から伝わる圧迫感を押し出そうとするように腸肉がうねりだす。

「苦しそうだから出した方がいいですかね？」

「くひいつ!? あがつ、くうっ! や、やめ……ふあああっ!」

波打つように連なった珠を吐き出そうとする動きにあわせて、ズルズルツと半ばまでパールを引き抜く。

「うあ……ああ、声……出ちやう……! 肛門めくられて……声があ……出るうっ!」

「まあ、今日は夜勤いなので出してもいいと思いますけどね。とりあえず戻しますね」

「はひゅっ!? くひっ! んっ、ふひっ! くひいんっ!」

めくれ出た腸肉を中に埋め込むようにして、また根元までズツポリと突き込んでいく。

お尻を伝う強烈な圧迫感に、バンビエツタが眼を見開いたまま身体を硬直させる。

ブルブルと腕が震え、愛液がぼたぼたと机の上に垂れ落ちていった。

「ふうっ、くっ、はあはあ、こんなの続けると……おかしくなるうっ!」

バンビエツタの頭の中が痺れ、思考する力を快楽が奪っていく。

荒々しい息遣いと共に、喜悦に染まった甘い喘ぎ声が溢れ出てくる。

「また声が大きくなってますよ」

「んぎっ!?! あ、あんたが、卑猥な道具でっ、気持ちよくするからでしょうがっ!」

擦られ刺激された腸壁が、尻を滲みださせ尻穴の中を満たしていく。

ブチュツ、ブチュツと飛沫を立てながら、珠と共に腸汁がかき出されてくる。

「でもだいたいケツマンコもトロトロになつてきましたよ。こんなにスムーズに出し入れできますし」

「あぐつ!? ふう、はうつ♡ んくつ……ひつ、ひいんつ♡」

突き込んでは、グリグリツと腸壁を抉りながら抜き出していく。

「うっ、ひいんつ、くひいんつ!? ああ、ケツマンコオ……十分にトロトロになつたら、もう擦らないでっ♡」

「まだまだ。もっと気持ちよくしてあげますよ」

「んおおお!! もう感じまくってるからあ……ダメえええっ♡」

声を抑えきれなくなり、獣のようになつて快楽を貪つてしまう。

職場で雌と化してしてしまうことに躊躇しているのか、バンビエツタが髪を揺らしながら頭を振る。

「くほおつ!? ふっ、ひうっ……あああ……んひいいつ♡」

熱を発し熱くなつた尻穴の奥を、先端でグリツと穿る。

激しい衝撃と共に、顔を仰げ反らせ宙の一点を見つめるバンビエツタ。

「かはっ、あう……奥う、擦ってるっ♡ はうっ、くひいんつ♡」

「そろそろケツマンコの方は大丈夫ですかね」

「大丈夫って言ってるでしょ！ け、ケツマンコっ……もういいからあ♡」

「本当に？」

「本当だからあ！ も、もう抜いてえ！ 十分だからあっ……！」

ズルツ、ズルツと珠を抜き出していくと、バンビエツタがいきみ始めた。

「んん——っ！ んふうううううっ！ はああっ、あうっ！ んおおっ！」

最後の先端を、鼻息荒いききみながらひり出そうとするバンビエツタ。

「バンビエツタ様」

「ふえ……？」

息んでいたバンビエツタが、名前を呼ばれた拍子に、一瞬力を抜いて俺を見る。

「はへええっ!? くっ、はあっ、ど、どうしてえ……戻しゆのよおおっ!」

尻穴が緩んだ一瞬のすきを突いて、全てを奥へとねじ込んだ。

驚きと喜悦の入り混じった声を上げ、バンビエツタが見開いた瞳で俺を見つめてく

る。

「まだ啜えたがってたみたいなんで」

「はあ、はあ、くひっ♡ 抜いてって、言ったでしょっ……！」

「こうして奥まで突っ込んでる方が、バンビエツタ様も落ち着くでしょ？」

「ひあつ!! くひいんっ……おお、おほお♡ お、落ち着くわけないでしょうがっ……！」

フルフルと頭を振り、尻穴をいきませながら、バンビエツタが必死に異物を押し出そうとする。

「駄目ですよ。このまま入れときますから」

「で、でもっ……でもっ……！」

「次はこつちを気持ちよくしてあげますからね」

「ふえっ!!? へあつ、えっ、な、何をっ……!!?」

俺の視線がヒクついているピンク色の肉ヒダに向けられている。

そのことに気づいたバンビエツタが、期待をするように身を震わせた。

「はうっ!!? はあつ、はあんっ♡ ひっ、ひいんっ♡」

愛液たっぷりの膣穴へと、指を突き込むと、そのまま容赦なく抽送を始める。

尻穴を穿られる快感に溺れている間、疼きっぱなしだった膣穴をようやく気持ちよくしてもらえる。

その喜びに媚肉を震わせ指に喰いつきながら、奥へと引き込もうとうねりだす。

「んあつ、んひいっ♡ くひいんっ!!? へあつ、はへえええっ♡」

「ほらほら、声が大きくなってますよ」

「り、両方気持ちよくされてっ……声、抑えるなんて無理に決まってるでしょっ……!」  
バンビエツタは、声を抑えることを放棄したかのように、嬌声を放ちっぱなしになる。  
「ついでにクリも気持ちよくしてあげますね」

「くひっ!? ローター、触っちゃっ……うああっ♡ 気持ち、いいいつ♡」

腰を持ち上げたまま、バンビエツタがビクンツと下半身を跳ねさせる。

「はあっ、はひっ、いひい♡ イツたあっ♡ ふへえええっ、イツたああっ♡」

愛液を掻き乱す指の動きに耐えられなくなったバンビエツタが、絶頂したことを途切れ途切れに告白する。

「どこでイツたんです?」

「わ、分からないわよおっ! 全部気持ちいいからあ♡」

「そうですか。……それじゃもつとイキましようか」

「へうっ!? くひいんっ♡ はあっ、はうっ♡ あひいっ♡」

蜜壺から止めどなく溢れ出てくる汁で指がぐしょぐしょに濡れ、強烈な雌臭を放ち始める。

「イクツ……イグうっ♡ ま、また……イツちやうっ♡」

「イきましたね」

「さ、さつきから言ってるでしょっ……♡ イキまぐってるのよおっ……♡」



「それじゃ今度は確実にマンコでイカせてあげますね。バンビエツタ様が大好きな場所  
で」

抽送していた指の動きを止め、入口付近の天井部分に指の平を押し当てる。

「ふえっ!? くっ、ひいっ♡ そ、そこっ……撫でられるとっ♡」

「噴いちゃうんですよね。知ってますよ」

「あっ、あっ、あんっ♡ くひいっ♡ あひいっ♡」

バンビエツタに最上級の絶頂を味わわせるため、膣穴の天井を指先で擦っていく。

「で、出るっ♡ ああ、イキまくってるのに……そんなグリグリされたらあ……ふ、噴  
いちゃうっ♡」

「いいですよ、噴いて!」

「くるっ♡ くるっ♡ きちやうううううっ♡」

何度も絶頂を迎え敏感になったバンビエツタの身体は、弱点への責めに耐える力を残  
していないかった。

「イッぐううううううううううっ♡」

歓喜の叫びと共に、飛び出してくる透明な液体。

最高の快感を貪っていることをアピールするかのように、豪快に潮を噴き上げるバン  
ビエツタ。

「ひっ、ひいっ♡ イッてりゅっ♡ イッてりゅうううっ♡」  
「まだまだこれからですよ」

指の動きを止めないまま、ローターの振動を一番強くする。

「ひぎゅっ?! うっ、うひいっ♡ クリでもイグっ♡ イぎゅううううううっ♡」

息つく暇も与えない、押し寄せてくる快感に、バンビエッタの顔がだらしく崩れ、机の上は大量の潮と愛液で水たまりが出来てしまっていた。

イキまくるバンビエッタの痴態を見ることに、満足感を覚えると、少しずつ指の動きを緩やかにする。

「くひっ、んう……あふっ……我慢出来ない……」

「なにが我慢できないんです？」

「んふう……チンポお、チンポ欲しいのおっ……♡ チンポちようらいっ♡」

「こんなオイッたのに、突っ込んでほしいんですか？」

「ほしいっ！ チンポでイキたいのよおっ♡」

媚びた声で俺を求めてくるバンビエッタ。

「わかりましたよ」

机の上でぐったりとなっているバンビエッタの身体を下ろすと、そのまま尻を突き出させる。

「くひゆううっ?! はうっ、んっ! んふうううっ!」

バンビエッタの両手を掴み、尻穴をパールで塞いだまま、濡れそぼる肉筋に亀頭を押し当てる。

「入れますよ」

囁きかけると、少しずつ肉傘を膣口へと埋め込んでいく。

「ふあっ!? はっ、ひいんっ♡ くひっ、あはあっ♡」

何度も絶頂した身体は、思うように力が入らないのか、机に上半身を押しつけたまま、動けなくなっている。

ムニユツと歪に形を変える乳房を見ながら、腰の突き出しを激しくする。

「あひいつ♡ ま、マンコの奥う、届いてるうっ♡」

肉傘がコツンツと最深部に突き当たった。

その衝撃に顔を仰け反らせると、バンビエッタはガクガクと膝を震わせ始める。

「ふうっ、ふっ、んふう♡ コツコツ……したあっ♡」

「こーやっつてコツコツされるの好きですもんね?」

「す、好き♡ チンポノック好きいつ♡ んひいいいんっ♡」

肉棒で貫かれてノックをされる快感に、バンビエッタが溺れ始めている。

軽く小突いた後、膣穴に肉棒を馴染ませるべく動きを止めると、我慢できなくなっ

ように、バンビエッタの方からお尻を俺に押し当ててきた。

「奥、いっぱい突いて欲しいんですか？」

「ほ、欲しい……はあ、はあ、突いてえ♡ 奥う、ムズムズするのっ♡」

「わかりましたよ！」

引き込む動きに合わせて、軽く子宮口をノックする。

「くひいっ♡ あへっ!? んっ、はふううう♡」

ビクビクツツと尻肉を跳ねさせると、バンビエッタが室内に歓喜の声を響かせた。

「うわ、マンコの締め付け強くなりましたよ」

「い、今っ……イッたからあ♡ またイッちやたのよおっ♡」

蕩けた声で、絶頂したことを認めると、バンビエッタはもつとイカせてほしいとおねだりするように腰を振り動かし始める。

「はあっ、はあっ、ふうう……ひっ、くひいんっ♡ はあ、はうっ、ふあああっ♡」

「そんながつつかなくても、まだ時間はたっぷりありますよ」

尻肉をぎゅむつと掴むと、バンビエッタを焦らすように動きを封じる。

「んひっ、くひいん……い、意地悪するんじゃないわよお……。くひっ、ふひいんっ♡」

「だってバンビエッタ様見てると、意地悪しちゃうんですよね」

「なによそれえ……。あたしはいっぱい突いて欲しいの！ 入れられただけだと……我

慢、出来ないっ！」

切なく声を震わせながら、バンビエツタが激しく犯されることを望んでくる。

「やっぱバンビエツタ様エロすぎですよ」

「あ、あんたがしたんでしよう……！ こんなチンポ好きの身体にい……！」

俺に抱かれる前からビッチだったと思うが、黙っておこう。

「あ、あたしをこんな風にした責任……取りなさいよ！」

潤んで瞳で睨むように見つめながら、バンビエツタが俺を求めてくる。

欲情を煽る艶めかしい顔に、膣穴の中で肉棒が跳ねた。

「ひゃひいつ!? ち、チンポが、動きたがってるっ♡ 我慢出来ないってドクドクして

るっ♡」

「そりやバンビエツタ様に求められたらこうなりますよ」

「だったら動いてっ！ 突いてえ！ あたしを激しく犯してっ！」

期待を声に滲ませながら、バンビエツタがもどかしそうに尻をくねらせる。

「わかりました。責任は取らせていただきます……よっ！」

「はひゅうううっ!? くひっ、くひいいいいっ♡」

大きく腰をグラインドさせ、ガツンツと尻奥を貫く。

その衝撃に、バンビエツタが悦びの声を放つ。

「せ、責任取ってイカせてっ♡ はあ、はあ、マンコもっ……いっばい突いてえっ♡」  
「もちろん」

膣肉に貼りつかれ、締めあげられていた肉竿も、そろそろ疼きが大きくなってきた。中に溜まった愛液を掻き出すように、肉棒を出し入れして、膣穴を擦っていく。

「いひひっ!?! いい……いいっ♡ チンポっ……あたし専用のチンポ気持ちいいっ♡」

腰の律動と共に、激しくなっていくバンビエツタの声。

その声に煽り立てられ、俺も昂ぶっていく。

「こんなエロくて可愛い姿、みんなにも見せたいですね!」

「や、やあっ……こんなもの、あんなだけしか……見せられないっ♡」

「俺だけなんですか?」

「そ、そうよお♡ あたしは……ふあ、はあんっ♡ あ、あんなだけのモノだからあっ♡」

あのバンビエツタが男のモノに成り下がるのを認めた。

完全に快楽堕ちした雌の言葉に、悦びが全身を駆け巡る。

「でもこんな大声出したら、いくら夜中でも誰かに聞こえますよ!」

「で、でも……気持ちよすぎて、声っ、おへえ、抑えられないっ♡」

「バンビエツタ様のアへ顔、みんなに見られちゃいますよ?」

「はひい、ふうっ♡ それでも……今はあ、あんたのチンポに犯されることしか考えられないっ♡」

バンビエツタを脅しているが、他人に俺たちの声が聞こえることはない。

職場に入る前に俺の能力で、他人に俺たちを感知できないようにしたのだ。

「チンポはめられるとっ、んへえっ♡ 気持ちよくなることしか……頭にないっ♡」

勃起した乳首を、自ら机に押し付け擦るようにして喜びを食っていく。

その淫らではしたくない今の姿を見られることに、バンビエツタはさらに興奮してしまっている。

「ああっ♡ く、くるっ♡ 気持ちいいのお……くるう♡ んひいんっ♡」

蜜壺をひっくり返したかのように、大量の汁を溢れださせながら、媚肉で肉竿にまぶしていく。

膣穴が挟まり小刻みに震えながら、軽い絶頂を何度も食っている。

「またここ突きますよ」

「んおおお!!? き、きたっ♡ 子宮ノックきたあああああっ♡」

子宮口が亀頭に吸い付いてくると、バンビエツタの言う通り先端がノックをする。

「んふい——っ?!? ふっ、ふひいっ♡ あへっ、えひいっ♡ ああ、ああっ♡」

俺の手を掴むバンビエツタの手に強い力がこもってくる。

突き出したお尻を、グイグイとバンビエツタが自ら押しつけてくる。

子宮の中へと迎え入れようとするように、亀頭をめり込ませようとするバンビエツタ。

そのバンビエツタの動きにあわせ、掴んだ手をグイツと引つ張る。

「かああああっ♡ はひいつ……刺さるう……ち、チンポお……マンコの奥に刺さるうううっ♡」

メリツと亀頭が軽く子宮口にめり込んだ。

その衝撃に、バンビエツタが激しく声を上げ、全身を強張らせた。

「いつもは中だした後に精液を能力で外に出してますけど……もう孕んじやいますか？」

俺は快樂墮ちしたバンビエツタがどこまで言うことを聞くか試すため、妊娠をちらつかせた。

バンビエツタは星十字騎士団シユテルンリツターの隊員だ。妊娠しても除隊はさせてもらえない。むしろユーハバツハに殺される可能性が高い。

通常なら妊娠は拒むはずだ。

「ふうっ、んにいいっ♡ ほ、欲しい……孕みたい♡ あんたのザーメンで孕みたいっ♡」



「いいんですか？ 星十字騎士団を辞めることになりそうですよ？」

「いいっ♡ そんなのどうでもいいっ♡」

「陛下に殺されるかもしれないですよ？」

「あんたがあたしを守ってくれればいいっ♡ あたしも赤ちゃんも守ってえっ♡」

今の言葉で確信した。

もうバンビエツタは俺なしでは生きれない身体になっている。

「わかりました。孕ませてあげますよ！」

ヌルヌルの肉壁を擦りまくりながら、膣穴にしつかりと肉棒を馴染ませていく。

「いひいっ!? ふっ、ひいっ、んひいんっ♡ はぐっ!? あひやあっ♡」

「気持ちいいのきました？」

「き、きひやつ……あふう、くふううっ♡ アクメきひやうううっ♡」

押し寄せてくる絶頂の波に耐えるように、バンビエツタが汗の玉を浮かんだ丸い尻を

震わせる。

「好きな時にイッていいですよ」

「んあっ、はひいっ♡ あんたと一緒にイクっ♡」

「俺とですか？」

「一緒にイクのがいいのっ♡ それが一番気持ちいいからあっ♡」

俺と一緒に絶頂することを望むバンビエツタが、イキそうになるのを必死に耐えながら腰をくねらせる。

「尻穴がキュツ締まり、貼りついた媚肉が肉胴をしごき上げてくる。」

「俺もイキそうになつてきました」

絡みつく肉壁を引き剥がすように、肉棒を抜き出していくと、ラストスパートをかけるように腰の動きを激しくする。

「はっ、はひっ♡ きてっ♡ イツてえっ♡」

「ちゃんと孕んでくださいよ！」

「孕むうっ♡ あんたの赤ちゃん、孕むからあっ♡ だから出してえっ♡」

甘く蕩けた声で、バンビエツタが孕まされたいと、自ら口にする。

興奮が最高潮に達していくと、子宮口に龟头を密着させる。

「あっがああっ♡ そ、そのままあ……出してっ♡ 子宮にザーメン飲ませてえっ♡」

小突かれまくった子宮口が緩み、精液を欲するように口を開けている。

「イキますよ、バンビエツタ様！」

「ふあっ、はひいっ、イクからあっ♡ イツちやうからああああっ♡」

バンビエツタの手が俺の手を再度強く握りしめ、絶頂を迎えようとすることを伝えてくる。

その手を握り返すと、俺も止めを刺すように子宮の中を犯していく。

「はひいいつ♡ くひっ♡ んああああっ♡ クルクルクルクルううっ♡」

「射精でますよ！」

「ん、あ、あ、あああああああああ♡」

「こっちもイカせてあげますね！」

「へああああっ!? はへえっ! お、お尻いいいつ!?」

精液をぶちまけると同時に、絶頂するバンビエツタにさらに快樂を与えるべく、尻穴に栓をしていたアナルパールを一気に引き抜いた。

「け、ケツマンコもイツぢやうっ♡ おおっ!? おひひいひいひいひいっ♡」

種付けされる喜びと同時に、腸肉がめくれ出すような強烈な快感に襲われるバンビエツタ。

悶絶しながらはしたない獣のような叫びを放ち、突き上げたお尻を跳ねさせまくる。

「へううっ♡ ふへええっ♡ んおっ……イグイグイグう♡ イツグううううっ♡」

「まだまだ射精でますよ！」

「しゅごっ、しゅごいいいつ♡ 子種汁う♡ 流れ込んれくりゆううっ♡」

「くっ、今種付けされてるんですよ、バンビエツタ様！」

「出しへえええっ♡ もっとおアクメ子宮に種付けしへええええっ♡」

種付けされる快感に支配されたバンビエツタは呂律が回らなくなっていた。

振り向いて無様なアへ顔を晒しながら、確実に孕むことを求め、尻をさらに押しつけてくる。

そのたびに、肉棒は射精をし続けながら、子宮口にめり込んでいく。

「子宮の中、ザーメンまみれにしてあげますからね」

「あひいっ♡ 妊娠しゆるう……こないっひやい出さひやらあ……絶対孕むうっ♡」  
「嬉しいですか？」

「嬉ひいっ♡ 孕まされりゆの、嬉ひいのおおお♡」

お腹の中でタプタプと精液が波打ち、それでもなお子種汁は注ぎ込まれ続ける。

「おっひいい♡ へああっ……はへええっ……し、幸せえ……♡」  
「え……？」

「あなたの赤ちゃん孕むのっ、幸せなお♡ いっひっ、くひいんっ♡」

クソビッチの珍しい純情な言葉を受けて動揺したのか、強烈な快感が身体を駆け巡った。

膣穴の中で、プクツと亀頭が膨らむと、ありつたけの精液を注ぎ込む勢いで、射精が勢いを取り戻す。

「んぎいっ♡ しゅいお、しよいっ♡」

怒涛の勢いで噴き出す大量の精液は、子宮を満杯にしてもなお、吐き出され続ける。

「お、お腹、パンパンっ♡ 子種汁でパンパンだからあつ♡ おひいっ♡」

「本当に孕んだみたいになつてますね」

妊婦のように膨らんだ腹を見ながらバンビエツタに囁きかける。

「ほ、ほんとに妊娠しひゃい♡ 大好きな人の赤ちゃんの種でえっ♡ あひゅっ♡ あ

へええっ♡」

種付けされる雌の悦びを剥き出しにして、バンビエツタは何度もイキまくる。

「俺もバンビエツタ様好きですよ」

俺も自分の気持ち吐き出し、ありったけの精液をバンビエツタに流し込む。

「…………ふう、やつと終わりましたね」

「あ、あひゃあ…………♡ これえ…………お腹あ、破裂しひゃう…………♡」

バンビエツタは種付けされた余韻に浸っている。

これだけ射精したのだ。

もうこれ以上は出ないと思い、肉棒を抜こうとしたが、バンビエツタに好きを連呼さ

れ、元気を取り戻してしまった。

「しようがないよな」

子宮の中に溜まった精液を波打たせながら、肉竿を動かしていく。

「あふえ……？ まだしゆるう？ セックスしゆるのお？」

疑問に思いながらも、俺の動きに合わせて身をくねらせるバンビエツタ。

「もう一回だけいいですか？ 俺の息子がもつと種付けしたいみたいなんで」

「いいっ♡ 続けへえっ♡ あ、あたひも……もつとセックスしたひい♡ 赤ちゃん欲

ひい……んああ♡」

「それじゃ続けますね！」

すでに膣穴は精液がなみなみと蓄えられている。

それでもなお、肉棒から力が抜けることはなかった。

そして、俺専用になった膣穴もまたうねりながら、肉棒を絞めつけてくる。

赤ちゃんを作りたい。

その想いを共有したまま、俺とバンビエツタは再びお互いを貪りあっていった。

# バンビちゃんに黙って浮気

とうとう虚<sup>ウエコウソド</sup>圈<sup>ソウルソサエテイ</sup>と尸<sup>ソウルソサエテイ</sup>魂界に攻め込むことになった。

千年血戦篇の始まりである。

シュテルンリッター  
星十字騎士団の一員であるバンビエツタは尸<sup>ソウルソサエテイ</sup>魂界に出張中だ。今ごろは多くの死神たちを殺しているだろう。

下つ端の俺には招集がかかることもなく、通常業務をこなしている。

「みんな忙しそうだな」

黙々とデスクワークをしていると、仲良しの同僚が話しかけてきた。

「俺たち以外はな」

「それな。バンビエツタ様がいなくて寂しいだろう？」

「そうだな。今日の性処理どうしようか考えてる」

「寂しいのは下半身だけかよ」

バンビエツタと子作りを始めてから一ヶ月が経った。

もし妊娠したら予定を早めて、二人で現世に逃げようとしたが、妊娠の報告は受けていないので、バンビエツタが狛村左陣に敗北するまではアクションを起こさないことに

した。

「あのさ、もし見えざる帝国ヴァンデンライヒが負けたらどうする?」

「おいおい、俺たちが負けるわけないだろ」

「もしもの話だよ」

「……そうだな、死にたくはないから命乞いでもするかな」

「やつぱり死にたくないか?」

「当たり前だろ。俺はもつと女の子とよろしくやりたいんだ!」

性欲に素直な同僚に呆れを通り越して感心してしまう。

「だよな。死にたくないよな」

ユーハバツハが一護に敗北して、見えざる帝国ヴァンデンライヒは滅びることになるので、予想以上に親しくなった同僚こいつをどうしようかずっと考えていた。

「お前、現世って興味ある?」

「あるに決まってるだろ!」

「そっか。なら近い将来連れてってやるよ」

「おう。期待しないで待ってるわ」

「こうして現世ヴァンカルに連れていくやつが一人増えました。

「そういえば破面の捕虜を知ってるか?」



「トレス・エスパーダ」  
 「第3十刃のティア・ハリベルだろ。知ってるよ」

ハリベルは昨日から見えざる帝国の捕虜になっっているらしい。

「そいつ以外にも捕虜がいるんだよ」

「そうなのか？」

「けっこう可愛かったぜ」

「見たのか？」

「ああ。たまたま運ばれているところを目撃してな」

「ふうん」

原作ではハリベルしか捕虜にしてなかったはずだが、描写がなかっただけで、ほかの破面も虚圏から連れてこられたのかもしれない。

「確かロリ・アイヴァーンって名前だったかな」

「っ……!?!」

同僚から捕虜の名前を聞いて驚愕した。

本来なら虚圏ウエコムンドで、狩猟部隊ヤマトアルスの統括狩猟隊長であるキルゲ・オピーに楯突いて返り討ち

にあうはずだ。

「……ちなみにどこの牢屋にいるんだ？」

「ここの棟だよ。なんかハリベルと違って雑魚だから、ここのセキュリティで十分らし

「い」

原作でも扱いが酷かったが、ヴァンデンライヒ見えざる帝国でも扱いが酷いロリちゃんかわいそう。

「ふうん」

原作と違う展開に多少は驚いたが、これは好都合だ。

夜中に忍び込んで、ロリ・アイヴァーンを抱きにいこう。

たまには違う女の子とエッチがしたい。

幸いバンビエツタは不在なので、ばれることはないだろう。

「ククク」

「どうした？ 気持ち悪い笑み浮かべて」

☆☆☆

「悪いけど少しの間眠っててくれよ」

深夜。俺はロリ・アイヴァーンに会うため、牢屋に来ていた。セキユリティは甘いよ  
うで、看守を眠らせたらすんなりと潜入に成功した。

牢獄されているのは一人だけのようで、すぐにロリを発見することができた。

「うわ、酷い状態……」

ロリは生きているのが不思議なほど負傷していた。恐らく連行される際に激しく抵抗したのだろう。全身が痣や切り傷だらけで、端正な顔も酷い有様になっている。

思えばロリは原作でも同じような目にあっていた。

ロリ・アイヴアーンはツインテールとミニスカートが特徴な破面アランカルで、「藍染の側近」を自称しており、格上である十刃エスパルダにも高圧的な態度を取る愚かな女だった。

藍染に特別扱いされていた井上織姫に激しく嫉妬し、メノリと共に暴行を加えていたところを、グリムジョーに見咎められて胃液が逆流するほど腹を蹴られ、拳の果てに片足をもぎ取られてしまう。

その後、用済みとなった織姫を再び暴行するが、ヤミーと交戦してボコボコにされてしまう始末。

リヨナラーを歓喜させる美少女だった。

「とりあえず治すか」

俺がロリに手をかざすと、瞬時に彼女の傷が癒されていく。

「あとは念のため手枷もしておこう」

ロリが全回復したのを確認し、彼女が暴れないよう手枷を生み出して拘束する。

「……………うっ……………」

「お、もう目覚めたか」

「……………え？」

きよとんとした顔で俺を見つめるロリ。

「……………あんた、誰？」

「俺は滅却師だよ。早速で悪いんだけど俺と取引しない？」

「取引って…………？」

「ここから出させてあげるから、俺とセックスしてくれない？」

「なに言ってるの？」

「何って取引条件だけど」

「なんであたしが、あんたとやらないといけないのよ！」

予想通り声を荒げてきた。

ロリは陰湿な性格をしているが、直情的でもあるので、バンビエツタと似ているところがある。

「でも虚<sup>ウエコムント</sup>圏に帰りたいでしょ？」

「くっ…………」

「もしかして処女だったりする？」

「そんなわけないでしょ！」

「じゃあいいじゃん」

「つ……………」

眉をしかめ、俺を睨んでくるロリ。

弱いのに強気な姿勢を崩さないのは好きだ。

「……………いいわよ。そのかわり手枷を外してよ」

「それは出来ない。抵抗されたら面倒だからね」

「ちっ……………」

「ちなみに手枷してると、レスレクシオン 帰 刃は使えないから」

「なっ……………!?!」

帰 刃とは、斬魄刀の形に封じ込めた虚としての本来の力を開放することだ。

つまり今のロリは両脚で蹴ることくらいしか、抵抗することができない。

「……………わかったわよ。さっさと抱きなさいよ」

「交渉成立だな」

ロリが取引に応じることは予想出来ていた。グリムジョーに片足をもぎ取られる際に、身体を差し出そうとしていた女だ。脱出できるならセックスの一回くらい安いものだろう。

「それじゃいただきます」

胸を覆っている上着をずらすと、いきなり乳房があらわになった。

「ブラしてないんだ」

「文句あんの？」

「いや、ないけど」

「ひゃんっ」

両手で胸を覆うと、ロリが可愛らしい声を上げた。

「もう感じたのか？」

「そ、そんなわけないでしょ！ あんたの手が冷たかっただけよ！」

「……ふうん」

ロリの乳房はバンビエッタより小さいが、バランスのいい大ききで、乳首も鮮やかな濃いピンク色をしており、劣情を誘うには十分な代物だった。

「あうっ、んっ」

蠱惑的な膨らみを手のひらいっぱい感じながら、じつくりとほぐすように揉み上げる。

ほのかに熱い乳肉の感触は、瑞々しい弾力に溢れ、指を押し返してくる感覚が実にいい具合だ。

「思ったより大きいんだな」

「う、うるさいっ……。はひっ！ 黙って揉んでなさいよっ……！」

喘ぎながらも気丈に振る舞い、俺を睨みつけてくる。

「黙ってたらつまらないだろ」

さらにロリに淫猥な刺激を与えるべく、乳肉に埋め込んでいた指の一つでヒクヒクと震える突起物を突いてみる。

「ひあっ!？」

「ここ感じやすいんだ？」

「ち、ちがつ……あうっ、はひうっ!」

ぷっくりとした乳輪に埋没させるように乳首へ愛撫を加えていくと、敏感に反応したロリがビクンと身体を跳ね上げて甲高い声を発する。

「ひいんっ! さ、さっさと挿入すればいいでしょ……あひんっ!」

「本番だけでもつまらないでしょ」

「あ、あんたなんかとしても、楽しくなるわけ……んひいっ……ないでしょうっ……!」  
「そんな顔で言われても説得力ないんだよな」

ロリは胸だけで十分快感を得ているようで、いつの間にか顔が蕩けている。

「ま、あんまりゆっくりしていると人が来ちゃうかもしれないから、こつちも弄らせてもらうか」

投げ出されていたロリの足を掴み、力任せに開く。

大股開きにされた上、スカートの中までもがあらわになったことに、ロリが抗議してきた。

「こ、こんなに足広げなくていいでしょう!」

「いちいちうるさいな」

強気な女は好きだけど、強気すぎるのも考え物だ。

俺はため息を吐きながら、現れたパンツを素早くずらして、性器に指を乱暴にねじ込んだ。

「んきやあつ?!」

「うお、きついな」

指先に生々しい粘膜の感触が伝わるとともに、ねっとりするような熱さが指に絡みついてくる。

ロリのはバンビエッタに比べると締め付けがきつく、まさに啞えるといった調子で指を圧迫してきていた。

「ひやああつ!?! あうつ、指動かすなっ!」

指が入っていることを教えるように、軽く柔壁を撫でると、華奢な身体が引きつり、高い悲鳴があがる。

その反応が愉快で、俺は指を中の粘膜に押しつけながら、ねっとり熱い膣肉の感触



を楽しんでいく。

「やだっ、やめなさいよっ！　そこはだめだつてばあ！」

ロリのか弱い反応に気分を高ぶらせ、突き立てた指で穴の中をほじりまくる。

「ひあつ！　やめっ、はひっ！　ひいあつ!？」

じつくりと肉胴を広げるように指で刺激を与えると、ロリが喚きながら背筋を震わせる。

それにともない、もともときつい膣口がますます強烈に締まり、肉壁の卑猥な起伏が指の表面でひしやげていく。

「んああつ、やめてっ……やめてえっ！　掻き回さないでえ！」

「やだ」

「やっ、んっ?!　んあああつ♡　は、激しくっ……やあああつ♡」

媚肉をさらに荒々しく掻き回す指の動きに、ロリが甘い声を発する。

小ぶりの尻をくねらせて、感じながらも刺激を嫌がる様は、戦士としてはあまりにも弱弱しく、その姿がますます俺を楽しませてくれる。

「んひっ……やっ♡　ふあああつ、あひいっ♡」

何度も指先で肉壁を引つ掻き、愛撫を加えていくうち、膣奥から次第に粘り気を帯びた体液が溢れてきた。

「うあつ……あう、はうつ……」

潤ってきた牝穴から指を抜くと、ロリは少し安堵した声を漏らし、ヒクヒクと背中を震わせる。

「一気に濡れてきたな。ほら」

「そ、そんなの、見せないでよお……!」

快感の証拠を見せつけられたロリは、恥ずかしさのあまりそっぽを向いてしまう。

「あ、ごめん。それじゃそろそろ挿入しようか」

「そうよ。さつさと——ひいひいっ!」

突き出された肉棒を対面した瞬間、ロリの全身が跳ねるように震え、恐怖に引きつりきった声が飛び出した。

「ちよつと……何なのよ、その大きさはっ……!」

「いや、普通より大きいくらいだと思っただけど」

「そんな大きいアランカルの破面にはいなかった!」

「そうなんだ」

アランカル破面の方が大きい奴がいそうな気がするが。たまたまロリの相手が俺より小さかっただけだろう。

「とりあえず挿入するぞ?」

「ちよ、ちよつと！ やめて！」

「なんで？」

「そんな大きいのも無理だから！」

「大丈夫だつて。すぐに慣れるから」

バンビエツタも最初は怖がっていたが、すぐに気持ちよくなっていた。

「やだ！ やめてよ！」

悲鳴をあげるロリに身体を寄せ、愛液でしつとりと濡れた秘所へ膨れきった亀頭を押しつけていく。

「やめてつてば！ やめてよやだ！ やめて！」

「大丈夫だから」

「ねえ！ 口でするから！ 口で気持ちよくしてあげるから！ ねえつてば！」

「うるさいな……。ほら！」

「いつ、ぎひいいいいいつ！」

引いた腰を勢いよく打ち付け、一気に膣奥へねじ込んだ瞬間、ロリの身体がひときわ大きく跳ね上がった。

腹の底を潰されたような呻き声が響くと同時に、異物で埋まった肉胴が一気に引き締めまり、たぎる肉棒を引き千切らなばかりに絞り上げてくる。

「あつ、がつ……うっ……」

刹那。ロリは白目を剥いて気絶してしまった。

「うそーん……」

結合部から血は溢れていないので、処女ではなかったようだが、あまりの激痛に意識が保てなくなつたようだ。

破面<sup>ブレンカル</sup>として雑魚だったロリだが、あそこも雑魚だった。

☆☆☆

「あひいいいいっ♡ おほおおっ♡ オマンコイクううう♡」

ロリは俺に片足を上げられた体勢で、精液塗れの牝穴に肉棒を突かれまくっている。

「あはああああつ♡ イクっ♡ イグううううっ♡」

挿入だけで気絶してしまつたがロリだったが、俺の能力で痛覚を遮断されると、すぐに狂いだした。

もともとロリのおそこは軽い手マンだけで絶頂してしまうほど刺激に弱く、何度か抽送をただけで、肉棒に屈服してしまつたのだ。

「んお、おおっ♡ ああああんっ♡ あひやつ♡」

「そんな気持ちいいんだ？」

「気持ちいいいい♡ オチンポいい、いいっ♡ くひいいいいっ♡」

アクメに突き抜けたロリが、涙と涎を垂らしながら、獣のように喘ぐ。

さらに何度も中出しをされた結果、お腹が妊婦のように膨らんでおり、アへ顔と相まって下品下品極まりない状態になっている。

「汚い顔してるぞ、ロリ」

「ごめんによひやいいっ♡ でもチンポ凄すぎでえっ♡ アクメとまらなにやい  
♡♡♡」

「俺のせい?」

完全に勃起した乳首を思いつきり抓り、能力で軽く電気ショックを与える。

「ち、違いまひゅうううっ♡ すぐにイツぢやう、あたしのオマンコのせいでずうううっ♡」

「そうだよな」

まるで性奴隷のように成り下がったロリはどんどん呼吸を荒くさせ、さらなる欲情に瞳を妖しく煌めかせだす。

「だがらあつ♡ この雑魚オマンコにい♡ もっとオチンポしてくださいっ♡」

「わかった。またイカせてやる!」

「おっほおおお♡ 奥にきたあああつ♡ あひいひいひい♡」

容赦のないピストンに見舞われたロリは大きくよがり声を走らせ、発情した動物のよ  
うに喘ぎだす。

「あんっ、ふあああああつ♡ ひぬううううっ♡ 気持ちよすぎて、ひぬううううっ♡」

「おいおい、簡単に死ぬとか言うなよ。それでも藍染の側近か？」

「もう側近じゃないれずううっ♡ 雑魚まんこの破面アラシカでずううううっ♡」

自分でも雑魚であることを認めたロリは、恥も外聞もなく、ひたすら快楽を求める。

「ならその雑魚まんこに射精してやる！」

「はひいひいひいっ♡ いっぱい出してくだひやひいひいっ♡ おひいひいひいっ♡」

「出すぞー！」

「きゃひいひいひいひいひいんっ♡」

豪快な射精を子宮に受けて、再び快楽を与えられたロリは、理性を飛ばして狂ったよ  
うな嬌声をほとばしらせた。

「おいおい、失禁するなよ」

ひとときわ大きな絶頂に悶え狂いながら、射精に負けぬほど勢いよく尿を噴き散らし、  
恥もかなぐり捨てて猛烈なアクメ姿をさらしていく。

「あっひひいひいひいッ♡ 飛んじやつてるううッ♡ 頭もっ、おしっこもおおっ♡

んお、お、おおっ♡」

子種汁が子宮の奥に勢いよく叩きつけられるたび、尿の放出が勢いを増し、はしたなく排泄音を響かせる。

「まだイクううう♡ ひいいいんっ、ひゃひいいい♡ きひいつ、ふひいいつ♡ んひい  
い、い、い——っ♡」

あまりに連続で絶頂しすぎたせいで、ロリは引き付けを起こしたような状態になっている。

「ひぎゆううう♡ いひっ、ひいいい——っ♡ イグうっ、う、あ、あ——っ♡  
「ロリ、これで終わりだ！」

「おっひい、い、い、い、い——♡」

精液を出し尽くすと、ロリは女があげてはいけないような声を放った。

射精後もしばらく痙攣したロリはもはや精魂尽き果て、意識が飛んだ状態でぐったりとした。

「す、しゆぎたあ……♡ ひいいい♡ オマンコ……はひっ♡ たくさんイツたあ  
……♡」

視点すら定まらない虚ろな調子になりながら、ただただ力なく快感の言葉を呟く。

ヒクつく花卉には小便の残滓が滴り、濃密なアンモニア臭が牢屋に立ち込めていた。

「さて、精液も出し尽くしたし、ウエコメント 虚圏に帰る？」

「か、帰らなひい……。ここに残つてえ……。あんたに、抱かれるう……。♡」

「捕虜のままでもいいのか？」

「いい……。ウエコメント 虚圏に帰つたらあ……。あんたのちんぽが、なくなつひやう……。」

「いや、俺のチンポはなくならないけど」

ロリの頭はまだ蕩けているようで、思考も言動も正常ではない。

ここに残つたら処刑される可能性もあるのに、それでもロリは俺のチンポを欲しがっている。

「あ、あたし……。あんたの、肉便器になりゆ♡ いつでもお♡ どこでもお♡ ハメてい

い肉便器になるう……。♡」

「おいおい、肉便器って恥ずかしくないのか？」

「恥ずかしいとか、どうでもいい……。あんたのチンポ、もらえるならなんでもいい……。♡」

肉便器志願してきたロリだったが、バンビエツタにばれるとまずいので、戦いが終わったらウエコメント 虚圏に帰つてもらふことにした。

ロリの性格だと、バンビエツタに戦いを申し込んで瞬殺されるのがオチだろう。

戦いが終わったら現世とウエコメント 虚圏を行ったり来たりする生活が続きそうだ。



# バンビちゃんは慰められたい

「思ったより死人が凄いな」

ロリを抱いてから数日後。俺は尸魂界ソウルソサエティに来ていた。

ヴァンデンライヒ

見えざる帝国が、第二次侵攻中であり、戦場には死神や滅却師の死体があちこちに転がっている。

俺は雛森桃や涅ネムなど護廷十三隊の美女たちを観察しながら、戦況を見守っていた。

「ちくしょう……あたしが死神に負けるなんて……」

数キロ先で瀕死の重傷を負ったバンビエッタが嘆いている。

原作と同じく狛村左陣と再戦したバンビエッタだったが、自らの心臓と引き換えに不死身の肉体をゲットした七番隊隊長の前にあっけなく敗れてしまった。

「5人の中で……あたしが最初にやられるなんて……」

彼女が言う5人とは、もちろんバンビーズの面々である。

リーダーである自分が真っ先に負けるとは思いもしなかったバンビエッタだが、他の4人からは下に見られている。実際に今回の戦いでも敗北するバンビエッタを嘲笑う

様子が見受けられた。

「やっぱりわざと孤立させてたんだな」

最初は5人で戦っていたが、途中からバンビエッタ一人だけとなり、他の4人は俺と同じく高みの見物をしていた。

男の娘であるジジはバンビエッタに対して歪んだ感情を抱いていたようで、彼女が敗北した瞬間に、残虐な笑みを浮かべていたのが印象的だった。

「かわいそうなバンビちゃん。助けてあげる」

いつの間にかジジたちがバンビエッタを囲んでいた。

「ボクたち、バンビちゃんがないと寂しいもんね」

「やだ……やめて……やめてよジジ……」

ジジの言葉に酷く怯えるバンビエッタ。

このままだと、バンビエッタはジジに絞殺され、ゾンビ化してしまう。

俺はバンビエッタを助けるために来たので、当然見過ごすわけにはいかない。

「殺さないでっ……!」

「殺さないですよ」

「……………えっ?」

ジジが首を絞めようとした瞬間、俺はバンビエッタを手元に移動させた。

「あ、あんた……なんで……?」

お姫様抱っこされているバンビエッタが、呆けた様子で俺を見上げる。

「なんでってバンビエッタ様を助けに来たに決まってるじゃないですか」

「っ……」

「もう大丈夫ですよ」

「お、遅いわよ……。 もっと早く助けに来なさいよ……!」

「すみません」

安堵したバンビエッタが泣き出してしまった。

「バンビエッタ様」

「なによ……?」

「おしっこ漏らしてますよ」

「っ……!?!」

先ほどは瓦礫に埋もれていた気づかなかったが、バンビエッタは恐怖のあまり失禁していた。

「こ、これは違つ……」

「そんなにジジが怖かったんですね」

「うるさいっ……!」

「とりあえずここは危ないんで、現世に行きましようか」

一刻も早くジジから離れたいバンビエツタは素直に頷く。

名残惜しいが尸魂界ソウルソサエティとはしばらくの間お別れだ。

「平和になったらまたここに来ましようか」

「二度と来ないわよ！」

☆☆☆

現世に移動してから一時間後。

俺とバンビエツタは豪華な空き家でくつろいでいた。

全身が焼け爛れていたバンビエツタだったが、俺の能力で回復しており、綺麗な白い肌に戻っている。

「ほんと、あんたの能力って卑怯よね」

隣りに座るバンビエツタが呟いた。

「そうですね」

俺は神様からの転生特典で、俺が知る創作物の能力や必殺技をすべて使用することができる。

生前アニメオタクだった俺は、マイナーなラノベや漫画も愛読していたので、知識は非常に豊富である。

なのでユーハバツハに勝てる能力も、今後現世で生きていくために必要な能力も知っている。

「陛下——ユーハバツハは本当に負けるの？」

「負けますよ」

俺が殺してもいいんだが、原作の主人公である一護の邪魔をするわけにはいかない。

「そう」

先ほどからバンビエッタの元気がないが、仕方ないだろう。仲間だと思っていたジジたちから見下されていることを知り、拳句の果てに殺されそうになったのだ。

「あたしって惨めよね……」

「そうですね」

「少しはフォローしなさいよ」

「フォローのしようがないので」

「うぐっ……」

死神には楽勝って言ったのに惨敗。ジジに殺されそうになって失禁。フォローのしようがない。

「だ、だったら慰めなさいよ……!」

「十分に慰めていると思うのですが」

肩に頭を乗せてあげたり、頭を撫でてあげたりしている。

「か、身体で慰めてっ……!」

「こんな状況でムラムラしたんですか?」

「仕方ないでしょう!」

人は生存を脅かされると子種を残そうと必死になる、と本で読んだことがある。

もしかしたら先ほどの戦いで、バンビエッタの生存本能が働いたのかもしれない。

「わかりましたよ。慰めてあげます」

「きゃっ!」

俺はバンビエッタを押し倒すと、腰を持ち上げ、下腹部が丸見えになる恥ずかしい体

勢にさせた。

「ちよつと、何よこの体勢は!」

顔を赤らめながら、バンビエッタが恥ずかしそうに睨んでくる。

「まんぐり返しですよ」

「それは知ってるわよ! 恥ずかしいじゃない!」

「この体勢の方が妊娠しやすいって本に書いてあったので」

「そ、そうなの……。なら仕方ないわね」

もちろん嘘である。傷心中のバンビエツタを辱めたいだけだ。

スカートを捲つて下着を脱がすと綺麗な性器があらわになる。

「自分で足を抱えて、もつとよく見えるようにしてください」

「わ、わかつたわよ」

バンビエツタは言われるままに、膝の裏を両手で抱え、下腹部を突き出してくる。

「マンコ丸見えですね」

「っ……」

羞恥に震えながらも、バンビエツタのあそこは充血し肉筋は腫れぼったくなっている。

「もう濡れてる。いつから濡らしてたんですか？」

軽く肉ヒダを指でなぞると、愛液が指に絡みついてくる。

「くひっ!? し、知らないっ……んあっ！」

「もう喘いでるし」

既に敏感になつてきているようで、ピクンと腰を跳ねさせバンビエツタが嬌声を放つ。

「それじゃ今日は俺が奉仕してあげますね」

「ふえ……。? くひいいんっ!」

ピンク色の媚肉に、舌を押しつけながら舐め上げる。

ザラリとした舌の感触を感じた瞬間、肉壺が蜜汁をトプトプと溢れださせる。バンビエッタの悦びの声を聞きながら、肉ヒダへ唾液をまぶしていく。

「あふつ、ふあつ、ひいんっ♡ あふう、あひいっ♡」

ゆつくりとした舌の動きを、お腹をくねらせながら受け入れるバンビエッタ。

トロリトロリと源泉から湧き上がる蜜汁を舌で吸い取ると、喉を鳴らして飲み下す。

「ああ……あたしの……マン汁う……飲まれてるう♡」

俺が蜜汁を飲んだのを見たバンビエッタが、悦びに身を震わせる。

「いつも飲んでもらってるので、たまにはいいかと」

「……美味しい？」

「美味しくないです」

「そこは美味しいって言いなさいよ！」

バンビエッタはいつも俺の精液を美味しそうに飲んでいるが、快樂補正がかかっているからだろう。

補正がかかかってない俺には蜜汁は無味だった。

「うるさいですよ」

叫ぶバンビエッタを黙らすため、自己主張するように勃起したクリトリスを、軽く唇



でつえばみ、歯を立てる。

「へあああつ!? 歯は立ててちゃ……あひゅうっ♡」

一際大きな声を上げると同時に、突き上げた下腹部をブルブルと震わせるバンビエツタ。

軽くイッてしまったようで、半開きの唇からはタラタラと涎が垂れ流れていた。

「もうイッたんですか?」

「くうっ、んっ、んひいっ♡ そ、それは……はっ、はひいっ♡」

蕩けた顔で絶頂したことを誤魔化すバンビエツタ。

「こっちにも奉仕してあげますね」

「ひゃうっ!? い、いきなりにやにを? んひいあつ!」

膣口から流れ落ちる蜜汁が、窄んだアナルを濡らしていた。

ねっとりとした汁を指に絡みつけ、ほぐすように指を突き入れる。

尻穴を軽く圧迫される衝撃に、バンビエツタの全身が強張り痙攣する。

「締め付け凄いですね」

「む、ムズムズするからあ……入れないでっ! ひいっ、お尻は……抜いてえっ!」

異物の侵入に、腸壁がうねりながら活発に蠢く。

押し出そうとするような動きに抗い、奥へ奥へ指を突き込んでいく。

「何度もアナルで絶頂してるくせに、何を言ってるんですか？」

「はあつ、はひつ!! お、お尻っ……ひいっ! らめえっ!」

腸肉に指の腹を擦り付けながら、一気に半ばまで指を引き抜く。

絡みつく腸肉ごと引き出すような抜き出しに、バンビエツタが尻穴をギュツと窄めてくる。

「そんなに抜いて欲しいんですか？」

入口付近の秘肉を指でほじりながら、バンビエツタへと視線を向ける。

「ぬ、抜いてえ……ゆっくりい……お願いっ!」

喘ぎながら言葉を紡ぐバンビエツタだが、尻穴の疼きが強くなっているのか、声が弱弱い。

「それじゃ抜いてあげますね。力を抜いてください」

「はうっ、ふう、はあ、んうっ」

言われるままに、バンビエツタが身体から力を抜く。

「よいしょ」

「かはおあつ!! な、なんでえ……奥っ……あああああつ♡」

尻穴が緩んだ隙をつき、また指を埋め込む。

完全に不意打ちを食らったバンビエツタが、顔を蕩けさせながら嬌声を放った。

「マン汁凄いですね。そんな気持ちいいですか？」

尻穴を犯されることを悦ぶかのように、止めどなく蜜汁が溢れ出ている。

「ああ、ひっ、んああああっ♡ お、奥っ……らめなのにい♡」

腸肉の粘膜が熱を発し、とろりとした汁を滲ませてくる。

腸汁が潤滑油となり指に絡みつき、肉壁を収縮させる。

強く指が締め付けられているのを感じながら、俺は再び肉壁を引き出すように指を抜いていく。

「あ、あっ!? はうっ、くひいんっ♡ んひゃああっ♡」

抽送されることによる快感に、バンビエツタは何度も絶頂してしまっている。

ピンク色の肉ヒダをうねらせ、もの欲しそうに蜜汁を垂らす膣口。

クリトリスも弄ってほしいとプルプルと、震えっぱなしになっていた。

むせかえるような雌の匂いを充満させる膣穴を舐め回しながら、尻穴に指を抽送する。

「ああ、ゴリゴリいっ……だめえっ♡ 肛門、外まで出すの……ダメえええっ♡」

指の抜き出しと共に、排泄感が込み上げてくるのか、ガス音が聞こえてくる。

「き、聞くなあ……♡ ふひいっ、くひっ、んおおっ♡」

「だったら音が鳴らないようにしてあげますね」

「きひいいっ!? うっ、へうっ♡ はへええっ♡ へひいいんっ♡」

勢いのいい指の突き入れに、バンビエツタが大きく喘いだ。

「このままイカせてあげますね」

滲み出た腸汁でヌルヌルになった尻穴は、スムーズに指の抽送を受け入れるようになっていた。

「いひいっ♡ あんっ♡ あはあああんっ♡」

「ほらほら」

「おふうっ♡ んああっ♡ んお おおっ♡」

抽送に抗えず、バンビエツタの声はどんどん大きくなっていく。

「あふあっ!? も、もう駄目え……♡ 頭の中が……真っ白になりゆっ……おひいっ♡」

「もうイきそうですか?」

「くほおおっ♡ ま、まだよ……お ほおおおおっ♡」

顔を蕩げさせながらも、まだ絶頂を認めないバンビエツタ。

「ならもつと責めますよ」

「んひいいっ!? くひっ♡ ああっ♡ うああああああっ♡」

十分過ぎるほどに敏感になっているクリトリスを、下腹でグツと押しつける。

その強い快感に歓喜の叫びを上げ、尻穴を絞めるバンビエツタ。

そんな尻穴を絞めつけることによって、指がさらに腸壁を刺激していく。

「んふ——っ!? クリ舐めとお尻……あたひいっ、はへええっ♡」

「まだイッてないですか?」

「イッてる! イッてるの認めるからあつ! もう許しへえええ……!」

せつかくご奉仕してあげているのに、拒否しようとするパンピエツタ。

そんな彼女の懇願を俺が聞くわけもなく、さらに絶頂へと突き抜けさせる。

「それじゃもつとイカせてあげますね!」

「しよ、しよんなっ……はひいんっ!? い、イキすぎておかしくなりゆ!」

「おかしくなつていいですよ!」

「ちゅらいのおっ! 戦った後で、イッてばかりでえ……くるひいっ!」

辛い苦しいと言つてる顔は、悦びにだらしなく蕩けていた。

「俺を求めた時点で、こうなるのわかってましたよね?」

舌責めをやめて、指の腹でクリトリスを潰していく。

「くひいっ!?! ひいっ、無理い……! 無理っへ……言っへりゆのにいいっ!」

「何が無理なんです?」

「ちよつ待つへえ! ら、らめつ……来ちゃう! クルクルクルう!」

オーガズムの波に身を委ねさせるべく、力強くクリトリスを捻り上げる。

「うひいっ♡ ああ——っ♡ あひひいいいいいいいっ♡」

絶叫と共に、透明の汁が噴水のように噴き上がる。

「で、出ひやったあ♡ しゅごいのきひやあああああっ♡」

最上級の絶頂を味わうバンビエツタが腰を跳ねらせながらイキまくる。

もつとバンビエツタを狂わせたい。

そんな衝動に駆られた俺は完全に勃起しているクリトリスに歯を立てた。

「クリ噛みらめええええっ♡ イギしゅぎひやうううううっ♡」

敏感なクリトリスを容赦なく攻め立てられ、息も耐え堪えにバンビエツタが声を上げ続ける。

尻穴をギュツと締め、膣肉をヒクつかせながら、快楽を貪るバンビエツタの瞳が俺を見つめ返してくる。

「き、気持ちよしゆへ……蕩けひやううっ♡」

素直に快感を認め、絶頂していることを告げてくる。

「これだけイったならもういいですかね？」

「ま、まだあ……チンポ、もらつてにやい……」

子宮が疼きだしたようで、バンビエツタが肉棒を求めてくる。

「戦いの後で疲れてるんじゃないんですか？」

「つ、疲れてりゆけどお……チンポは別だからやあ……」

「一回じやおさまらないですけど、いいんですか？」

「いい……。イッパイ……。してえっ……。♡」

理性が完全に崩壊し、子宮でモノを考えるようになったバンビエツタが、甘い声でおねだりをしてきた。

「わかりましたよ」

バンビエツタの身体に覆いかぶさるようにして乗りかかる。

俺専用の穴と化した膣口に亀頭を押し当てる。

「あはあっ♡ はあ、はあ、おひいっ♡」

腰を突き出しながら、熱くぬめった膣穴へとめり込ませていく。

バンビエツタがアナルでの絶頂に抗っていたのは、早く肉棒が欲しかったからだろう。

その証拠に、バンビエツタは俺にしがみつきながら嬌声を放っている。

「もっつつ、奥うっ……。入れて……。イカせてっ♡ チンポでイカせてっ♡」

早く膣奥を満たされたい。

その欲求のままに、バンビエツタが腰を足を絡めてくる。

そのまま、絡めた足に力を込めると、自ら膣奥へと引き込んでいく。

「あんっ、あふううんっ♡ ああ、気持ちイイイツ♡」

「奥まで入りましたよバンビエツタ様」

「んっ♡ 奥までチンポきたあっ♡」

「子宮、いっぱい突いてあげますから」

両手を首に回し、蕩けた顔に俺に見せつけながら、バンビエツタが嬉しそうにコクコクと頷く。

「はうっ?!? んひっ、いいっ♡ はああっ、あひっ♡ ひいあっ♡」

子宮口を圧迫されたバンビエツタが、しがみついた身体をビクツと跳ねさせる。

「ああ……これ好き♡ 子宮にチンポでキスされるの好きいつ♡」

「知ってますよ」

「もつと子宮にキスしてええっ♡」

子宮口を突かれることを望むバンビエツタが、両手両足に力を込める。

その動きに促され、膣奥までねじ込んだ肉傘が、何度も何度も子宮口へと押し当てられた。

「はあっ、ひっ、コツコツっ………されてるっ♡ んおっ♡ はひイインっ♡」

「すごい締め付けですね」

「イキツ………そうだから♡ もう、イキそうっ♡」



「好きナだけイッていいですよ」

バンビエツタを抱きしめたまま、腰だけを振り動かし子宮口を突きまくる。

「ひいあつ!!? はひつ♡ あひいんんんっ♡ イクイクイクうっ♡」

尻穴を穿られ、肉ヒダを舐め回されて、何度も絶頂していた身体は待ち望んでいた肉棒に貫かれ、すぐに雌の悦びを露わにする。

バンビエツタのしがみついてくる力が強くなり、膣肉が激しくうねり、肉幹を擦り上げる。

その強い圧迫に耐えながら、ひたすら子宮口を突きまくる。

「ふひいんっ♡ はへっ、えっ、えひいんっ♡ イックうううっ♡」

本能のままに快楽を貪ったバンビエツタの身体が、少しずつ弛緩し始めた。

「ふあっ、はあ、はあ、あふううう……♡」

肉棒に屈服させられた悦びを顔一杯に浮かべ、バンビエツタが乱れた息を吐き出す。

「イキましたね、バンビエツタ様」

「んふう……イッたあ♡ チンポ子宮にキスされてイッたあ……♡」

トロンとなったままのバンビエツタが、絶頂したことを認める。

「でも、チンポお……まだイッてない……♡ ああ、チンポもイキたがつてるう……♡」

「そうですね。イカせてくれますか?」

「んう、イカせるっ♡ あたし、イカせてもらったからあ……次はあたしがあ……♡」  
「それじゃお願いしますね」

「でも、その前にい……んちゅっ、れるお……れる……んちゅっ」

ゆつくりと口を開けたバンビエツタが、舌を突き出し俺の唇を舐めてくる。

「唇であたしを慰めてえ……♡ ちゅっ、ちゅっ、れるおっ♡」

「んっ」

バンビエツタの求めに応じるべく、俺も舌を突き出す。

「むうっ、ふううっ、ちゅぶっ♡ むっ、んちゅうっ♡」

バンビエツタは積極的に舌を絡めてくる。

ぬめぬめとした赤い舌をうねらせるバンビエツタが、少しずつ膣肉に力を込み始める。

バンビエツタと繋がったまま、濃厚な口づけを交わす。

「ちゅぶっ、ぢゆるっ……んくっ、んふう、んちゅっ♡」

絡み合う舌と舌を通して、唾液がバンビエツタの口内に垂れ落ちていく。

喉を鳴らしながら唾液を飲み込んだかと思うと、もつと飲ませるとばかりに、俺の舌を吸いたててくる。

「んっ、んむっ♡ ずじゆるっ、じゆるるうううっ♡」

舌を根こそぎ引き抜かれるような強い吸引力に、痺れるような快感が広がっていく。俺は舌での愛撫をバンビエツタに委ね、ゴツンツと軽く腰を突き出した。

「くひゅうっ!!? あひっ、ひいんっ♡ はふうっ、んひインッ♡」

油断しきっていた子宮口を小突かれる快感に、絡みつかせていた舌を離して、バンビエツタが淫らな声を上げる。

それでも、すぐにまた舌を絡め取ると、唾液をまぶすように擦りつけてくる。

舌を貪り唾液を啜る音と、膣穴を抽送する音が混じり合いながら大きくなっていく。

「いひっ!!? ふひいい……キシユラけれえ……イキひよ♡ イっひやうう♡」

「何度でもイっつていいですからね」

「はうっ!!? ま、まひや……あたひらけえ、んんっ、イカされひやう♡」

「ん??」

「んちゅ、ちゅぷっ……あたひい……あんたを気持ちよふ出来へりゅう……?」

「気持ちいいですよ。これでわかるでしょ?」

滾っている肉棒の存在を示すように、膣肉に肉胴を擦り付ける。

「あひやっ!!? ふひっ♡ ちゆるるっ、ずっ、んじゅずうう♡」

肉棒に貫かれる悦びを、身体中で示しながら、バンビエツタが俺の口内へと舌を突き入れてきた。

れろれろと歯の裏を舐め回し、縦横無尽に動かしたかと思うと、軽く唇で舌をついばんでくる。

「キスしながらセックスするの気持ちひいいっ♡ ちゅぷうっ♡ ちゆるるっ♡」

美味しそうに俺の唾液を飲み下すバンビエツタに、新たな唾液を流し込む。

口内から抜け出た舌を絡ませ、唾液を垂れ流していくと、バンビエツタの瞳が喜びに蕩けていく。

「そろそろバンビエツタ様の大好きな場所、思いつきり突いてあげますね」

「ふひいんっ!? くひゅっ、へあっ♡ へひイインッ♡」

緩やかな動きから一転、力強い動きで子宮口をこじ開けにかかる。

「し、子宮がっ!? んひいっ♡ 潰れひやうっ♡ あひいんっ♡」

一瞬、苦しうにバンビエツタの顔が歪み、絡めていた舌を離してしまふ。

「強すぎました?」

「はあ、はあ、だ、大丈夫だからっ! 子宮、ジンジンして……気持ちいい♡」

「それじゃ続けてもいいですか?」

「んっ♡ んふううっ、はふウウウウっ♡」

自分だけガツついているように見られるのが恥ずかしいのか、バンビエツタは返事をする代わりに、絡めている足に力を込め、俺の強く身体を押しつけてくる。

「いいってことですね」

「い、言わせるんじゃないわよお！ ふあつ!? ひいつ♡ ふひイインツ♡」

まだツな部分を残しているバンビエツタに興奮を覚えると、俺はグリグリと子宮口をこじ開けにかかる。

肉傘が入口を擦り、無理矢理入り込もうとする強い圧力に、子宮を犯されているというのを強く意識してしまっているバンビエツタ。

「はあつ、はひいつ♡ んちゅつ♡ ぢゆるつ♡」

膣肉を締め肉棒に快楽を与えながら、バンビエツタが舌を吸い上げ唾液を啜り飲む。

「あ、あたひ……気持ちよすぎへえつ、イツひやう♡ イキまくつひやうつ♡」

絶え間なく押し寄せてくる快楽に、バンビエツタの身体は震えっぱなしになっている。

「イキなひやい、あんたも！ ちゅばつ、れるお……イキなひやいよお♡」

唾液まみれになった舌をくねらせ、バンビエツタが俺に絶頂を求めてくる。

「激しくしますよー！」

膣内に締め付けられ続けている肉竿は、脈動を激しくし肉傘を広げ始めている。

先端に集まっている熱い塊をぶちまけたい。

肉棒はウズウズと疼きっぱなしになっていた。

「あひゆうっ?! 激しくしてえっ♡ んちゅっ、あたしを壊してえっ♡」

これでもかというくらいに強い力でしがみつき、舌を吸ったままバンビエツタが頷く。

熱くぬめった膣穴に肉棒を出し入れし、俺も欲情のままにラストスパートをかける。

「ん、ひっ♡ くっ、ひいいんっ♡ ちゅぷっ、んちゅっ♡ んあああっ♡」

ガツン、ガツンと突かれる度にバンビエツタが身体を跳ねさせる。

意識を飛ばしそうになる強烈な快感を貪りながらも、俺を気持ちよくしようとして絡めた舌を離そうとしない。

「くっ! バンビエツタ様っ!」

みんなが戦ってるのに、俺たちは恋人セックスをしている。

そんな罪悪感と快楽が混ざり合い、俺もバンビエツタも淫乱さが増していく。

「中でっ……出しへえ♡ あたしに、種付けしへええええ♡」

イクまくっと思おうように身体に力が入らないにもかかわらず、バンビエツタが腰に絡めた足に力をさらに込めてくる。

「今日こそ孕んでくれますか!?!」

「は、孕むっ♡ ぜったい孕むから、出しへええええっ♡」

「孕まなかったらアレしますからね!」

「わかつひやあつ♡ あああああ、もう……イキユツ♡ イギユウうつ♡」  
 「射精だしますよー！」

「むぐううつ!!? めつ、んぐつ♡ ぢゆるるつ♡ ふぐつ、イグううううううつ♡」

子宮口に押し当てたまま亀頭を跳ねさせると同時に、バンビエツタの口を塞ぐように唇を押しつける。

口の中で舌を絡ませ、お互いの唾液を交換しながら、子宮内へと精液を注ぎ込んでいく。

「んむううう♡ ふぐつ!!? じゅぶつ、んぶうううう♡」

怒涛の勢いで噴き出す精液が子宮壁を打っていく。

その衝撃に、しがみついたままバンビエツタの身体が激しく痙攣してしまう。

その動きを封じるように、さらに強く唇を押しつけキスを貪っていく。

「んぶうつ! ♡ ぶはあつ! ♡ イグイグイグうう♡ んむうつ♡ んぢゆううつ♡」

塞がれた唇の隙間から、荒々しく息を漏らしながら、バンビエツタが恍惚の表情で俺を見上げる。

濡れた瞳は、もつと膣穴に子種汁を求めているように見えた。

「まだ射精でますよー！」

子宮口をさらにこじ開けるようにして、腰を突き出し、肉壁を刺激する。

擦り付けられる精液が、媚肉を発情させ、締め付けをどんどん強めていく。

バンビエツタは必死に俺にしがみついたまま、本能のままに身をくねらせる。

「むううっ!? んくっ……イキユツ♡ ま、まひやイツひやうううっ♡」

「俺もイツてますよ!」

止まることを知らない勢いで、精液が噴出しバンビエツタの膈内を満たしていく。

あまりの快感に頭が痺れ、思わず顔を離すと、唾液の橋が俺とバンビエツタの口の間にかかる。

「あひいんっ♡ イギユツ♡ イギユううっ♡ イツぢやううううっ♡」

種付けされる悦びに、バンビエツタはアへ顔でイキまくっていることを告げてくる。

「またアへ顔になってますよ!」

「ら、らっつて、気持ち良しゆぎるううっ♡ 種付けされるの気持ちよしゆぎりゆうっ♡」

「俺もバンビエツタ様に種付けするの気持ちいいですよ!」

ろうそくの火が消える前に一瞬大きくなるように、精液の噴射が増していく。

「あ、あ、————っ♡ しゅごっ♡ しゅごいいっ♡ 出てる出てる出てりゆうううううっ♡」

確実に孕ませようとするよに、新しい精液がぶちまけられ、バンビエツタのお腹を膨らませていく。



「くひイイツ♡ 出ひすぎいい♡ 精液れえ……子宮が破裂しゆりゆううつ♡」  
「これで打ち止めですよ！」

「あひやあああああああ♡」

狂人のように喘ぐバンビエッタを抱きしめまま、精液を注ぎ込む。

「あゝあ……♡ いひい、ふひい……あへえ……♡」

イキ疲れてへロへロになっているバンビエッタの膈内を、たつぷり精液で満たすと、力尽きたようにバンビエッタの上に倒れ込む。

「ふひい、はあ……ら、らいじようぶ……？」

「大丈夫ですよ。少しだけ疲れただけです」

今日はいつてもより能力を使ったので、その反動がきたのかもしれない。

しばらく俺たちは抱き合ったまま、交尾の余韻に浸った。

## バンビちゃんは浮気されている

俺とバンビエツタが現世に降り立ってから数ヶ月が経った。

一護は死闘の末にユーハバツハを打ち倒し世界に平和をもたらした。

俺たちは空座町から離れたとある市街に住居をかまえ、石田雨竜と同じく高校に通いながら滅却師として暮らしている。

もちろん勝手に虚を退治すると問題が発生するため、浦原喜助に協力してもらい、護廷十三隊と取引をした。

取引内容は以下の通りだ。

・俺たちに危害をくわえないこと

・滅却師の活動に目を瞑ってもらうこと

・尸魂界ソウルソサエティや虚圏ウエコムンドに好きだけ行き来できること

もちろん最初は却下されたが、今まで消滅した死神たちを蘇生させたところ、無事に取引が成立した。

ここで俺はあるミスを犯してしまった。

それは——消滅した死神たちを全員復活させてしまったのだ。

ヴァンデンライヒ  
見えざる帝国との戦いで消滅した死神たちだけ蘇生するつもりが、能力をコントロールしきれず全員復活させてしまった。

志波夫妻、ルキアの姉である朽木緋真、市丸ギン、地味などところだと尸魂界篇で涅マユリに人間爆弾にされてしまった新人の死神たちなど全員蘇生させたのだ。

開き直った俺は一護の母親や、石田の祖父など、俺が覚えている善良キャラ全員を生き返らせることにした。

復活した山本元柳斎重國にありえないくらい説教されてしまったが、大勢の死神や人間に感謝されたので、結果オーライだ。

特に奥さんと再び暮らせることになった朽木白哉、姉と恩人が蘇った朽木ルキア、一護の妹たちは泣きながら感謝の言葉を述べていた。

「そういえば買い物中にあんたと仲良かった奴に会ったわよ」

夕食を調理中にバンビエツタが言ってきた。

「元気にしてました?」

「ええ。今度お店に来てくださって言われた」

「あの野郎」

俺と仲良かった同僚はホストで生計を立てていた。滅却師としては雑魚すぎるので、お酒と女好きのあいつにはびつたりな職業だろう。

「それより夕食まだ？」

「あと10分くらい待ってください」

よほどお腹が空いているのか、バンビエツタがテーブルを叩きながら急かしてきた。

同棲して初めて知ったことだったが、バンビエツタは家事スキルが0に等しかった。

料理はもちろん、掃除や洗濯もしたことがないようで、家事を覚えさせるのに苦労したものだ。

「早くしなさいよね。こっちは課題で忙しいんだから」

「それは俺もなんですが……」

料理だけは一向に上達しなかったので、俺が担当することになっている。

「それにあたしは二人分食べないといけないのよ」

「わかってますよ」

バンビエツタのお腹には新しい命が宿っている。

どうやら現世に降り立ってのセックスで受精に成功したようで、今のバンビエツタは妊娠三ヶ月の妊婦さんだ。

「ていうかあたしが学校に通う意味ってあるわけ？」

俺たちは17歳なので、高校に通っていてもおかしくない年齢だ。

「だって制服姿可愛いですし」

「そんなのあんたの趣味なだけじゃない」

「でもバンビエツタ様だつて制服エツチにはまつてるじゃないですか」

「そ、それは、あんたがいつもより攻め立てるからでしょっ!？」

「興奮するから仕方ないじゃないですか!」

「逆ギレするんじゃないわよ!」

隊服もいいけど、制服姿のバンビエツタはとにかく可愛いのだ。

我慢できずに学校のトイレや屋上で何回犯したことだか……。

「胎教に悪いから怒らないでください」

「くっ……。それを言われると怒れないじゃないっ……!」

これも意外だったが、バンビエツタは子供が好きなようで、まだ性別もわかっていないのに、生まれる赤ちゃんの名前を考えている。

「だから怒らなくていいんですよ」

「……わかつたわよ」

「代わりに夜になつたら可愛がつてあげますから」

「そんなの当たり前じゃない」

バンビエツタの妊娠が判明してからも、俺たちは性に溺れた日々を過ごしていた。

こんな淫乱な両親で子供には申し訳ないが、美男美女のどちらかになるのは間違いな

いので、許して欲しい。

☆☆☆

「ふーん。これがロリの男ねえ」

翌日。ロリを抱くため、ウェブコムド虚圏に来ていた俺はメモリ・マリアに見定められていた。

「そうよ。こいつがあたしにはまっちゃってさ」

ロリが自慢げに説明する。

「それより来るの遅かったじゃない。一時間の遅刻よ」

「悪い。トラブルがあつて遅れたんだ」

「遅れるなら連絡くらい入れなさいよね！」

頬を膨らませて可愛らしく咎めるロリ。

「遅刻するなら連絡くらい入れるのが常識だろ」

「メモリもそう思うでしょ？ 本当にかいつはダメなのよ」

アランカル破面が常識を語つてるよ。シニールだな。

「悪かったよ」

「ふん、分かればいいのよ」

「男を紹介してもらったことだし、あたしは部屋に戻るよ」

「うん、またあとでねメノリ」

俺を一目見たかっただけのようで、メノリは部屋を後にした。

「……ごめんなさい、ご主人様！」

直後にロリが土下座をし始めた。

「口調がいつもと違うからびっくりしたぞ」

「本当にごめんなさい。メノリの前で雌犬のあたしを見せたくなかったの！」

チンポに屈服したロリは自ら肉便器になることを望み、俺のことをご主人様と呼ぶようになった。

どうやらロリは強い男に仕えたり、媚びたりするのが好きなようで、俺は藍染に代わる新たな主となっている。

強い男ならグリムジョーに仕えたらどうかと質問をしたが、片足を千切られたことを思い出し、トラウマで失禁をしていた。

陰で悪口を言ってるが、なるべくグリムジョーに遭遇しないように気をつけてるらしい。

哀れすぎだろロリ……。

「別にいいよ。それより望みの玩具を持ってきたぞ」

「ありがとうございます」

「早速使うか？」

「はい！」

「それじゃその椅子に乗って。そして、しゃがんで股を開いてくれ」

「かしこまりましたあ♡」

俺の命令にロリは嬉々として従い、椅子に乗ると指示通りの体勢を取る。

「ああん……♡」

ロリのスカートを捲ると性器があらわになった。

俺の命令でロリはノーパンで過ごすようになっていたのだ。

「偉いぞロリ」

「は、はい♡ ご主人様の命令だから当然ですよ♡」

ロリの男に媚びまくりの言葉遣いに、たまに笑いそうになってしまう。

「入れるぞ」

「んふうわああああああん♡」

用意したデイルドを膣穴へ埋めると、ロリは背筋をゾクリと震わせ、はしたない声を上げた。

「やああああん、入っちゃったあ……♡ はあ、はああん♡ いやらしい♡」



妖しい痴情に火照り切った顔をして、根元までずっぽりと刺さるデイルドの眺めにうっとりで見入るロリ。

容赦なく挿入された大きなデイルドのせいで、肉の花弁は限界まで広がり、玩具を啜える膣口は息苦しげにヒクついていた。

「ご主人様あ♡ これでどう虐めてくれるんですかあ？」

「そうだな、このデイルドを手を使わないで、膣圧だけで抜いてみてくれ」

「えっ………！ 手を……使わないで？」

「そうだ」

「はい、わかりました♡ ご主人様の命令に従います♡」

ロリは表情に恥じらいを滲ませつつも、俺の命令に素直に従い、強く頷いた。

「くっ………！ はううう………んんっ………！」

さっそく下腹部に力を入れ始め、デイルドを膣穴から押し出そうとする。

「はうううんっ、お腹に力を入れてえ………！ んくう、むううううッ………！」

精一杯膣穴を窄まらせているようだが、肝心の力の入れ方がわからないようで、牝穴に埋まるデイルドはピクリとも動かない。

「こ、これ全然出てこない………！ うううううっ………！ んむうううう………！」

「頑張れ」

「はううううっ！ ふううううううんっ！ んんんっ、 んむううううー！」

腹の底から搾するように唸り声をあげ、懸命に力を入れて踏ん張っているが、残念ながらその頑張りはなかなか反映されない。

額に汗をじつとりと滲ませ、手足にまで力が入っている様子から、相当真剣にやっているのはわかるのだが、ロリは情けない声を漏らし、呼吸を荒くする。

「す、すみません……はあ、はあ……頑張って、締め付けてるのに……」

乱れた息を整えながら、ロリは不服そうに自分の股間を覗き込み、悲しげに目を細めて嘆きを漏らす。

「ご主人様あ、どうしたらいいんですかあ……？」

「うーん、中に入っているモノを押し出す動きをすればいいんじゃないか？」

「は、はいっ……！ やってみます……！」

俺のアドバイスを受けたロリは唸りながら息み、深々と呑み込んだデイルドを捻り出しにかかると。

整った美貌がますます紅潮していき、形のいい小鼻がヒクヒクとせわしなく動く。

「ほら頑張れ！」

「うううっ、はあっ……！ ふうふう……だ、だめですう……出てきません……」

しかし成果は著しくなく、相変わらずデイルドが膣穴から抜ける様子はない。

「早くしないと帰っちゃうぞ」

「そんなあつ!? が、頑張つて出しますからお待ちくださいっ……!」

ロリが泣きながら懇願してきた。

「よかつたら手伝つてやろうか?」

「いいんですか? お願ひします……!」

「よし」

「ひいひいひい……? あつ……ああ、ご主人様ああ!」

俺の指が尿道口に触れ、摩擦を始めると、ロリはその刺激に声を上ずらせ、ビクツと身体を引きつらせた。

「ああん、そ、そこ……そこはオシッコの穴です! そんなところ……触っちゃダメですう……ああ!」

「そうか? ここを刺激されると悦ぶ女もけっこういるぞ」

バンビエツタしか知らないけど。

驚いて声をあげるロリにニヤつきながら、俺はプニプニと柔らかい感触を返してくれる尿道口を、指の腹で愛撫していく。

「ひいひい! そんな……ああ、ご主人様あ、やだ……ああつ……!」

「肉便器のくせに逆らうの?」

「あうううう……そ、そんなことないですっ！ ふあああつ、オシッコの穴あ……いっばい、触ってください……んううううっ……！」

ロリは慌てて身体から力を抜いて身を任せてくるが、まだ不安そうに俺の愛撫をじつと見てくる。

未知の刺激に困惑しつつも、どこか魅入られたような妖しい気配を漂わせるロリの様子を楽しみながら、出口の周辺を円を描くように動きで擦っていく。

「ひああああんっ、あううううっ……はひいひんっ……！ オシッコの穴、ムズムズしちゃうっ！」

ロリは落ち着かない様子で腰をもじもじと動かし始めた。

「感じ始めたか？」

「あうんっつ、だつて……ご主人様の指使いが……すぐく……あひい、エッチ、だからあ……」

ロリは単純に弄られてるだけだと思ってるが、実は能力で尿を促している。

このままデイルドを抜こうとすれば、間違いなく失禁するだろう。

「それじゃ再度自分の力で抜いてみてくれ。尿道をしつかり締めてたぞ」

俺は尿道口から指を離し、ロリの観察に戻る。

「は、はいっ……教えてもらったとおりにやってみます！ んむうううううっ、うううう

うんっ……………」

ロリは俺の言葉に従順に頷き、腰をプルプルと震わせて下腹部に力を入れる。すると、ディルドに動きが見えてきた。

先ほどまではわずかに揺れるだけだったが、少しずつ手前へと押し出されてきたのだ。

「その調子だ」

「は、はいいいっ！ んううううんっ、はうんっ……………」

顔を真っ赤にし、さらに力強く息み続けていく。

ズツポリと膣穴に締められていたディルドが奥から窄まっていく媚肉に押し出され、少しずつ抜けてくる。

「す、すごい……………♡ さつきまで全然ダメだったのに……………♡ これならちゃんと出せ

そう……………」

確実に成果が見られるとロリは驚いたように声を上げ、嬉しそうに顔を綻ばせる。

「んむううう……………ひぐううううっ、んんう……………♡ ああっ、だめえ、オシツコ……………オシツ

コがあ……………」

能力の効果で膨らむ尿意に苦しみながらも、ロリは懸命に力を入れて、膣洞を奥の方からきつく窄めていく。

「あああん、オマンコ……中、強く、擦れてえ……ひいいん♡ 何だか……あはあ……ゾクゾクしますう……♡」

牝穴が強く締まることで膣壁と玩具の摩擦が強くなり、それによつて柔肉の快感も煽られているようで、ロリの唇からは甘い吐息が漏れてきた。

「はあつ、はあ……あああん♡ 擦れるう……♡ 気持ちいい♡」  
「顔が下品になつてきたぞ」

「す、すみません♡ 気持ちよくてえ♡ んはあつ、はああつ、あつ……」

デイルドが3分の1ほど出てきたところで、ロリは辛そうに呼吸を荒げ、肩を震わせた。

「どうした?」

「はあ、はあ……あふううん……♡ オマンコ……気持ちよくなつて……余計に……おしっこ、漏れちやいそうですう♡」

結合部からは蜂蜜さながらのねっとりとした愛液が漏れだして、玩具に擦られて生じた甘美な刺激に心地よさを覚えているのが見て取れた。

「気持ちいいおしっこが漏れそうになるのか?」

「は、はひいつ♡ あたしはすぐに失禁しちゃう肉便器ですからあ♡」

「そんなに気持ちいいのか?」

「そうれすう♡ オマンコのお肉でしつかりと絞めつけてるから……ひああああんっ♡ いつも以上に入ってるモノを感じちやってますう……♡」

ロリは色っぽく息を吐き、くねくねと腰をくねらせる。

「あ、あのご主人様あ♡」

「なんだ？」

「このデイルドを……ご主人様の赤ん坊だと思っついていいですかあ？」

「……………へ？」

「ご……ご主人様の……赤ん坊だと、思えば……出来そうなんですう♡」

このビッチは何を言ってるんだらう。

一瞬呆けてしまったが、俺はすぐに了承した。

「いこぞっ」

「ありがとうございますっ♡ 頑張りますっ♡」

俺の許可をもらったロリは再び下腹部に力を入れ始め、牝穴に刺さるデイルドをギリと押し出していく。

「くううう……あ、赤ちゃん……ご主人様の……赤ちゃんうう……♡ んむう、ひむううう……♡」

思い込みの力は強いようで、デイルドがなかなかのペースで抜けていく。

「あつ、はうう、んんんっ♡ あはあ、ご主人様あ……♡ ふは、ひふううん、んはああっ♡」

「いいぞロリ」

「くっ……！ はうううん……！ ああん、雑魚まんこ頑張りますううう……！ んふうああああああ……♡」

俺の声援を受けたロリは、紅潮した額に汗を浮かべながらなおも息み、膣肉の力だけでデイルドをさらに押し出した。

玩具が半分を過ぎたぐらいまで抜けると、膣内に溜まった愛液が湧き水のようにこぼれ、椅子を淫らな液体で濡らしていく。

「あふうん、はふううんあ……もう少しなのに……ああああん、このままだと……漏らしちゃううう……」

いよいよロリは尿意がギリギリのところまできたらしく、先ほどよりさらに息を荒くし、切迫した様子で身体を細かく震わせていく。

「ここまで来たんだから漏らさずに踏ん張れ！」

「ふはああ、ご主人様あ……でも……無理です……おしっこ出るう……！ もう無理ですうう……あひいいい……」

俺の叱咤にロリは切なげにかぶりを振り、切実な声で限界を訴えてくる。



「このまま漏らささないでデイルドを出したら、ご褒美にロリを孕ませてやるぞ」  
「…………えっ！ は、孕ませてもらえる…………？」

今までも中出しをしていたが、念のため精液をテレポートで体外に放出させていたのだ。

牝の官能をくすぐる言葉に、ロリはハツとした顔つきになった。

「上手くいったらオチンポ………… ♡ それも、種付けしてもらえるう………… ♡ 本物の赤ちゃんが産めるう………… ♡」

つい孕ませると言ってしまったが、人間と破アランカル面じゃ子供は出来ないだろう。

「わかりましたあ…………！ 頑張つてオシッコ我慢します ♡ そして、ご褒美の種付けしてもらいますううううっ ♡」

ロリは俄然やる気を出し、身体を奮い立たせて最後の力を振り絞ってきた。

「んむううううんっ！ ふむううううううっ！ ご褒美い、種付けしてもらうううううっ…………！」

「あ、一気にデイルドが出てきたぞ」

「あうううっ、はううっ…………もう、出るけどお…………ふはあああ…………出そうなのおおお  
おおお………… ♡」

「頑張れロリ」

「ひううううっ、もう膀胱がいっぱいれずう……パンパンでっ、はちきれそうっ……んはあああああ！」

能力の影響で尿がいつもより多く溜まってきたようで、下腹部を苛む圧迫感に、ロリの声に悲鳴が混ざってくる。

「あひいいいん……！ デイルド、抜けてきてるう！ あぐううっ……！ 膀胱が破れそうっ……！ んぐううううっ、むううううんっ……！」

力を入れて膣洞を収縮させていくものの、それに連れて尿意も限界寸前まで膨れ上がってきて、ブルブルと腰を震わせ、苦しそうな呻きを漏らし続ける。

しかしながら懸命の頑張りが効いてきたのか、デイルドが膣穴からにゆるにゆると出てきて、今にも抜け落ちそうになってきた。

「ああん、出る！ んはあああああっ！ ご主人様、抜けます！ やつと抜けますううう！」

「ああ、いいぞ」

「でも……でもおっ！ オシッコももう限界いつ！ はひいいいつ……！ 出ちやダメえっ！ 出ないでええええっ！」

寸前まで抜けた玩具が重力に負けて傾いてきたが、膨れきった膀胱は無情にも決壊のときを迎えていた。

「いやあああああ——っ！」

ごとり、と音を立ててディルドが椅子に落ちた瞬間、尿道口から黄金色の恥水が放物線を描いてほとぼしった。

失禁と同時に絶頂したのか、腰の辺りがビクビクと痙攣している。

「ひいひいっ！ ダメえっ！ オシッコだめえええ！ 出ちやう……いっばい出ちやううううう！」

「すごい勢いだな」

「いやああんっ！ ああああつ、止まってえっ！ オシッコ止まってええ！ あああああつ！」

ロリは悲痛な顔で願うものの、絶頂に達したために身体に力が入らないようで、尿を止めることができずにいる。

「あああああつ……オシッコ漏らしちゃったあ……！ ご主人様との約束があ……！」

ロリは放尿を我慢できなかつたことを嘆きながら派手に小便を漏らし続け、床に大きく恥ずかしい水たまりを作っていた。

ようやく尿の放出が止まった頃には、床は黄色い液体が大きく広がって酷い有様になり、鼻にツンとくるアンモニア臭が漂ってきた。

「ご主人様の……命令、守れなかつたあ……これじゃ……孕ませてもらえない……」

アクメの余韻から抜け出したロリは、しでかしてしまった不始末に哀れなほどしょげかえる。

「しょうがないな。ロリ、こっちに來い」

「ああうっ……はい……」

俺はベッドに移動すると、ズボンのファスナーを下げて勃起ペニスを露出させる。

「ロリが上に乗って動いてくれ。俺をイカせられたら、中だしたままにしてやる」

「あああ……♡ ラストチャンスですねえ……♡ わ、わかりましたあ……♡」

ロリは愛らしい顔をたちまち蕩けさせて素直に返事をする。

「そ、それじゃあ……♡ はあ、はあ、はあ……♡ オチンポ、入れさせていただきますう

♡」

そうしてロリは、はしたなく息を荒げながら、勃起したペニスを膣口に宛がい、そのままゆっくりと腰を沈めていった。

「んふうわああああああ♡」

たっぷり沸かせた愛液によって受け入れ準備万端の牝穴に、肉棒が根元までズツポリと埋まると、ロリははしたなく歓喜の声をあげた。

「はひいひい……♡ オチンポきたあ♡ や、やっぱりご主人様のオチンポが一番気持ちいいれすううう♡」

「そりやどうも。しつかり動いてくれよ」

「は、はい……♡ あたしから動きますっ……♡ オマンコでいっぱいオチンポをしごいてご主人様を気持ちよくさせていたくださいませ♡」

俺に促され、ロリは白桃さながらのお尻を上下へと跳ね躍らせて、肉棒へ奉仕を開始した。

こちらに尻を突き出す体勢になっているため、ロリのヒップは実物以上に大きく感じられ、淫猥な眺めがより強調されている。

「ひはああああっ♡ オマンコ喜んでますう♡ 気持ちいい♡ あひいいいんっ♡」  
「なんだ、ロリ。ずいぶん積極的だな」

「はいいいつ♡ んあああっ♡ 寂しかったところにオチンポもらえて、オマンコが喜んでるんですう♡」

すつかり膣穴を埋められる心地に夢中になって、ロリは恥ずかしげもなく卑猥な告白をしながら、なおもお尻をバウンドさせて快樂を貪る。

「だ、だからあ……一生懸命ご奉仕させてくださあい♡ 種付けしてもらえよう頑張ります♡」

媚びた態度で宣言をするなり、ロリは唸り声をあげながら腰をブルツと震わせ、下腹部に力を入れ始めた。

「はふうううん♡ あたしのっ、ふうああっ♡ 肉便器のおっ♡ オマンコの肉を  
いっぱい感じてくださあい♡ んんんっ、うううんっ♡」

膣奥の窄まりが波打つような動きで徐々に入口まで移動してきて、根元から亀頭まで  
肉棒が余さず締めあげられる。

「くっ、凄いな……!」

「んはあああっ♡ あひゆうううっ♡ ご主人様あ……気持ちいいですかあ?」

「ああ、気持ちいいぞ」

いつときも休むことなく動き、ペニスを締めあげては解放する膣肉の快感に、腰が細  
かく痙攣して止まらなくなってくる。

「あん、嬉しい♡ 褒めてもらえたあ……♡ ひいん、それに……あたしも……感じ  
ちゃって……あああ♡」

ロリが喘ぎを多く漏らし、甘く熱っぽくなる吐息に官能の色を滲ませる。

「あっ、あっ、あんっ♡ ご主人様あ、もつと気持ちよくなっただひやいっ♡」

「なってるぞ」

「むはああああっ♡ オマンコでオチンポなぞるの気持ちいいれすっ♡ ひああああ  
んっ♡」

快感をはしたなく口にしながら、俺も感じさせようと必死になるロリの熱心な腰振り



「ひゃあああああつ♡ オマンコ感じすぎてえつ♡ ふあつあああつ♡ ああつ、これっ、きひやうう……♡ きひやいひゆううつ♡」

ロリはブルツと全身を震わせ、膣穴をひときわ強く窄らせてきた。

どうやら絶頂に近いようで、膣穴を強く締めてのしごきはかなりの快感を生んでいるようだ。

「イキたいならイツていいぞ!」

「ご主人様あああ♡ あたし、イキますつ♡ オチンポしごいてイツひやいますつ♡」

俺はロリを絶頂に導くべく、ひときわ強く腰を突き上げ、深々と牝穴を貫いた。

「んっふあああああツ♡ 深いツ♡ オチンポおおおツ♡ おひイイイイツ♡ イツ

クっ♡ イクううううツ♡」

「イツちまえ!」

「きやひいひいイイイイン♡」

膣奥への荒々しい一撃が引き金となって、ロリは一気に狂おしい絶頂へと上り詰め、けたたましい嬌声を響かせた。

壮絶なアクメが全身を駆け巡っているようで、腰をくなくささせて淫らに悶え喘ぐ。

「あひいひい♡ イキましたあ♡ 雑魚まんこイツひやいましたあ♡ ひいああああ

あつ♡ 気持ちいいの止まらにやいれすううう♡」



「声を聞けばわかるよ！」

「おほおおおつ♡ もつとオチンポ締めますッ♡ んはああああ♡ アクメオマンコ、オチンポ感じまくってまひゆううつ♡」

ロリの容赦ない締め付けで、腰が抜けそうになるほどの強烈な快感が伝わってきた。

「このまま射精すぞー！」

「あひいつ、中だしいつ♡ 種付けしてもらえろ♡ ひいいいん♡ あひいいいん♡ おおん、ご主人様ああ♡」

度を越えた快楽を味わい、俺は腰の中心に熱が集まるのを感じながら、いつそう激しい突き上げで絶頂中のロリを責め続ける。

「ひはあああッ♡ またイクう♡ 漏らしちゃうう♡ はひいいいつ♡ イキながらオシッコ噴いちゃうひゆううつ♡」

排泄器官を膣肉越しに突いてほじり上げ、さらなる絶頂へと導くための抽送を見舞うと、ロリはかぶりを振って、腰をガクガクと暴れさせる。

ますますうねって締まりを強くする膣穴のもてなしに、ペニスはいっそう激しい快感を与えられ、俺は下腹部から広がる熱い感覚に興奮を高めていく。

「はひいいいんッ♡ あつ、あああんッ♡ オチンポ膨らんでますううッ♡ オマンコの中つ、グイグイ広げてええッ♡」

「ああ、そろそろイキそうだ!」

「あひやあああああ♡ ひいいんっ、ご主人様ああ♡ 出してえっ♡ 熱い精液、たっぷり出してええええ♡」

快感が強まることでより窄まる媚肉に肉棒を絞められ、腰に溜まった射精感が解放を求めて脈を打ち始めた。

「はひいいいいいっ♡ オチンポおっ、刺さってくるう?! これイクうツ♡ イッひやうっ、オシッコ出るう♡ ひあああああ♡ んはあああああ♡」

「よし、射精<sup>で</sup>るぞロリ!」  
「はっひやあああああ♡」

尿がパンパンに溜まった膀胱を亀頭で突かれて、怒涛の勢いで襲いかかる官能と排泄欲に呑み込まれ、ロリは腰を弾ませながら、勢いよく小便を噴いて達した。

ロリのアクメと同時に俺も絶頂に達し、膣内の最奥へ、熱い子種汁をいっぱい叩きつけた。

「はひいいいい♡ んひいいいいいい♡ 子宮にザーメン届いてるウウ♡」  
「キツつきだろ……!」

「あひいいいいんっ♡ オシッコとまりやない♡ んはあああああ♡ 閉じなくなっひやたあ♡ イクうう♡ いくうううう♡」

ロリは膣内射精の快楽に歓喜の声をあげ、さらなる子種汁を求めてグリグリと腰を動かし、膣奥に亀頭を押しつけながら竿の根元を締めてくる。

「あああああああつ♡ 子宮どろどろお♡ この濃さつ、絶対孕んじやいますう♡ んはあああああつ♡」

子宮を満たす精液の感触に牝の本能を剥き出しにし、ロリは派手に腰を痙攣させ、小便をはしたなく四方へ噴き散らかしていく。

「もつと精液くだひゃああい♡ お漏らしもしちゃう雑魚マンコ、妊娠しますからあああッ♡ ご主人様の立派な赤ちゃんッ♡ ぜったいに孕みますからあああつ♡」

「ああ！ これでしつかり孕んじまえ！」  
「おっひいひいひいひいひいっ♡」

最後の一撃をくらわすと、ロリは見るも無残なアへ顔で絶叫した。

「ひはああ……♡ ああん……♡ はあ、はあ、はあ……♡ んふう……♡」

子宮を子種汁で埋めつくほどの射精が終わる頃、ロリもようやく絶頂から抜けたようで、幸せそうにうつとりと吐息した。

「ひああああ……幸せ……幸せえええ♡ ザーメンたくさん……出ひてもらえまひたあ……♡」

アクメと種付けの快楽を同時に味わったロリは、今にも蕩けそうな表情で、膣内に溜

まる精液の感触に嬉々とする。

「こんな小便を漏らすんじや、セックスのたびに掃除が大変だな」

「はうう……… す、すみまへえん………」

ロリはエロチツクな高揚感に染まりきった妖艶な牝顔で、恥ずかしそうに呟いた。

☆☆☆

「んお、お、おおおつ♡ イツグうううう♡ まだイグウウウツウ♡」

ウエコムド  
虚圏に来て3時間が経過した。

俺はいまだに肉便器に成り下がったロリを犯し続けていた。

「おひいいいいん♡ ご主人様あ、イツてますっ！ あたひい、いつてまひやううう♡」

「そんなの知ってるよ！」

「も、もう止めてくださいやいいいいっ！ あたひの雑魚まんこじや、これ以上耐えられましええんっ！」

俺がウエコムド虚圏に来るのは週に一回なので、毎回ロリがギブアップするまで抱いている。

ロリは自ら肉便器に志願したくせに、数時間経つと必ず止めるよう懇願してくる。

「ロリのマンコなら大丈夫だ！ 頑張れ！」

「無理れずう。ううううつ！ 子宮もオマンコも壊れひやいますううううつ！」

ツインテールを手綱のように掴まれ、立ちバックで犯されているロリが絶叫する。

「俺の子供孕みたいんだろ？ だつたら我慢しろ！」

「我慢できないれひひうううつ！ もう限界れずううううつ！」

「今日は何発でも付き合えると言つてただろ！」

「ひぎゅつ！ ひいいいいつ！ ち、調子に乗りましたあああつ！ あたし、調子に

乗っちゃいましたあああつ！」

歯をガチガチと震わせながら嘆くロリ。

バンビエッタなら10発までは付き合ってくれるのに、やはり格の違いだろうか。

「もう許してくだひやいいいいつ！ ひんじやうつ！ ひんじやいますからあああつ

！」

「死んだら生き返らしてやるから安心しろ！」

「そんなあつ!? んあああああ。あ。ツ！ もうダメえつ！ もうダメええええつ

！」

ツインテールから僅かに揺れている乳房に両手を移動させ、さらに快樂を与える。

「お、おっぱいひいいつ！ ひあああああつ！ しぬしぬしぬしぬううううつ！」

「ロリ、頑張れ！ これじゃ肉便器以下だぞ？」

「いいでずううう！ 肉便器以下でいいでずからあつ！ もうやめでえええええつ！」

「おいおい肉便器以下つて認めちゃうのかよ？」

「はひひひいっ！ 認めまずうっ！ ロリ・アイヴアーンは肉便器以下れずうううううっ！」

俺の肉棒のせいでどんどん成り下がっていくロリ。

セックスが終わる頃には、完全に意識を失っており、オナホール同然の状態になっていた。

ちなみに前ロリは最後に気を失っている。

ロリは学習能力がないようで、抱く前は最後まで付き合おうと宣言するが、最後は意識を失うのがお決まりになっている。

結局、今日も気絶したロリを放置して俺は現世に帰った。

俺の浮気に気づいたバンビエツタが虚<sup>ウエコムド</sup>圈に乗り込んでロリを半殺しにしてしまうが、それはまだ先の話である。

# バンビちゃんは孕んでもやりたい 前編

妊娠してからも高校に通っていたバンビエツタだが、いよいよお腹が目立ってきたので退学することになった。滅却師の活動も控えており、基本は自宅でくつろいでいる。たまに運動という名目で虚<sup>ウエコムド</sup>圏に乗り込んで、俺の愛人であるロリをボコボコにしているようで、毎回血まみれで現世に帰ってくる。

ここ最近は以下の流れがお決まりになっている。

- ①バンビエツタとロリが口論する
- ②ロリがバンビエツタに嬲り殺しにされる
- ③バンビエツタが笑顔で俺に報告してくる
- ④俺の能力でロリを全回復させる
- ⑤ロリが号泣しながら俺に愚痴を吐く
- ⑥ロリが懲りずにバンビエツタに喧嘩を売る

原作で片足を千切られたロリだったが、バンビエツタにも全身の骨を折られたり、欠損させられたり、大変悲惨な目にあっている。

俺の能力で回復させることができるので問題ないが、なぜ一思いに殺さないのかバン

ビエツタに問うたことがある。

バンビエツタは笑顔でこう答えた。

「死なせたら苦痛も絶望も味わえなくなるじゃない」

子供を宿して少しは丸くなったと思っただが、残虐な性格は直らないようだ。

そんなバンビエツタだが、ジジたちには復讐するつもりはない。

なぜなら殺されそうになったトラウマで、ジジの名前を出すだけで、涙目で震えてしまうからだ。

自分より弱い相手にしかマウントを取れない俺の嫁が可愛すぎる。

「なんで退学したのに学校に来なくちやならないのよ」

俺とバンビエツタは学校のプールに忍び込んでいた。

「水泳って妊婦にとつていい運動になるみたいだし」

「水泳させるつもりじゃないじゃない。どうせスクール水着のあたしを犯したいだけでしょ？」

お腹を大きくしたバンビエツタだが、俺の要望でスクール水着を着用している。

妊婦のスクール水着姿は、これ以上はないほど卑猥に見えてしまう。

「そうですね。でもバンビエツタ様も久しぶりにプールでエッチしたいって言ってますか」



「そうだけど」

バンビエツタが退学するまでの間、学校で何度も何度も交わりあってきた。

放課後の教室、トイレ、保健室、体育館の倉庫、屋上など様々な場所でバンビエツタを抱いた。

「子供産んでからでもいいじゃない」

「妊婦のバンビエツタ様を学校で犯したいんですよ」

「変態」

「それはバンビエツタ様でしょ。ほら入って入って」

「……わかったわよ」

されるがままに水に浸かるバンビエツタ。

俺はプールサイドに腰を下ろし、足だけ水に浸からせる。

「それでどうすればいいのよ?」

「こうです」

「え? きゃあつ!?!」

バンビエツタの水着の胸部分に穴を開け、いきり立った肉棒を潜り込ませていく。

「ちよつと水着がもつたじゃない!」

「あとで直すから大丈夫ですよ」

バンビエツタも所帯じみてきたもんだ。

「それより……何をすればいいかわかりますよね？」

「わ、わかるわよ。……だから怖い言い方しないでよ……」

少しだけ涙を浮かべたバンビエツタが、乳房で肉竿をむにゅつと包み込む。

「はあ、はふうう……んっ、お汗出てきてる……れろっ、ちゆるうっ」

赤い舌を覗かせ、舌腹を押しつけながら、ペロりと先走り汁を舐め上げる。

肉竿をしつかりと乳肉で挟みながら、俺の股間に上半身を押しつけ、バンビエツタが上目遣いに見つめてくる。

妊娠した今でも、肉棒を見るとバンビエツタは艶めかしい顔になる。

「んちゅっ、ちゅぽっ……レロツ、レロツ」

紅潮した顔を俺に向けたまま、舌の動きを見せつけ、いやらしい音を響かせ愚息を舐め回す。

エラ首に舌が巻きつき、擦ってくる刺激に、乳肉の中で肉竿が跳ねっぱなしになる。

「暴れちゃだめえ♡んくっ、んっ♡」

「うぐっ!？」

自ら乳肉を寄せ合わせ、ギュツと肉胴を圧迫してくるバンビエツタ。

唾液と汗、そして先走り汁が混じり合った胸の谷間は、ヌルヌルと熱く柔らかい感触

を肉幹に伝えてくる。

「ふうっ、はふう……元氣よすぎい……ちゅうっ、れろれろおっ♡」

水着を着たままのバンビエツタにパイズリされるシチュエーションに興奮は増していき、肉竿はいきり立つたままになる。

青筋を押し潰すように、ギュツと乳房を押しつけ、左右の乳房を交互に動かし始めて、又チュ又チュと音を立てながら、快感が肉胴を這いあがってきた。

「ふひゅう……れろっ、ちゅっ♡ ああ、悦んでるう……興奮しまくっへりゅじやない♡」

熱く官能の色を帯びた息が先端に吹きかけられる。

先走り汁を器用に掬い取り、口の中に舌を戻すと、ゴクリと喉を鳴らして飲み下す。先走り汁だけでも発情しているようで、バンビエツタの顔に恍惚の笑みが浮かぶ。

「バンビエツタ様、妊娠してからますますエロくなってますね」

赤ちゃんを孕んでからというもの、バンビエツタはますます妖艶になっていく。

「んちゅっ、くちゅっ♡ あんたが悦んでくれるからあ……いつぱいあんたに悦んでもらいたいからあ……れろおれろお♡」

「俺の為ですか？」

「そうよお……ちゅっ、ぺちやつ♡ んちゅううっ♡」

「うおっ!」

激しく押しつけられるザラザラとした舌の感触に、肉冠が唾液まみれになっていく。「俺も気持ちよくしてあげますね」

バンビエツタに負けじと、その柔乳に手を伸ばし水着の上から指を食い込ませる。

「くひゅうっ!?! ひゃあっ♡ あふうう、あんっ、はああっ♡」

乳肉を強く刺激される快感に、バンビエツタがもどかしそうに身をくねらせた。

「ああ、べろっ♡ ふあ、舐めてるだけじゃ……我慢できないっ! ちゅっ♡ はむっ!

んむううううっ♡」

舌なめずりをした後、バンビエツタが肉傘に軽く口づけをして、そのまま先端を啜え

こんでいく。

先っぽに伝わってくる生温かい頬肉の感触。

ぷっくりとした唇が、カリ首に貼りつき、レロレロと舌先が鈴口をくすぐってくる。

「やばっ、気持ちいいっ!」

悦びの声を上げながら、またギユツと強く乳肉を掴む。

指が喰い込み、歪に形を変える乳房。

「むふうっ、ちゅっ……ちゅふううっ……んくうっ、ちゅぶぶっ♡」

バンビエツタは乳肉を揉みしだかれる快感に眉根を寄せながらも、唇を左右に動か

し、エラ首を擦ってくる。

唇の端から唾液が垂れ落ち、肉胴を伝わって乳肉を濡らしていく。

「ふぶつ、ぐつ、ぢゅぶつ、ずずつ、じゆるるつ、ずりゆりゆつ♡」

カリ首を唇でまくるあげるように激しく上下に顔を揺らし、徹底的に肉傘を刺激してくる。

痺れるような快感に腰が震え、自然と俺の息遣いが荒くなる。

そんな俺の反応を見たバンビエツタが嬉しそうに瞳を濡らすと、カリ首を攻めたまま肉胴を乳肉でしごき上げ始めた。

「くちゅつ、んくつ♡ ふうつ、んふつ♡ じゅぶつ、チュズズツ、じゆるるるつ♡」

亀頭に唾液をまぶしながら、肉竿全体を刺激する。

疼きと快感が肉棒を包み込み、先端に熱い塊が集まり始める。

「悦んでりゆう……チンポお、ビクビクしてつ、んぷつ、ずびゅつ、んぼお♡」

「すごく気持ちいいですから」

「まらまらあ……もつと気持ちよくしゆるからあ♡ ぢゅぶぶうううつ♡」

俺をもつと悦ばせたいと、バンビエツタが容赦なくカリ首を攻め立ててくる。

「それじゃ俺ももつと気持ちよくしてあげますね」

水着越しの柔乳を持ち上げて勃起した乳首へと指を動かしていく。

完全に勃起している二つの突起物を両手で摘まむ。

「くひいいんっ!! ふひゅうううっ、へはあっ♡ くうっ、はひっ!! んひいいんっ♡」  
敏感な場所への刺激に、きゅつと唇を窄めたまま、バンビエッタが嬌声を漏らす。

硬くしこつた乳首を指で挟んだまま、その弾力を確かめるように摘まむ力を強くする。

「くひっ!!? しよんなに強くしひやらっ……潰れひやうっ!!?」

「これくらいじゃ潰れないですよ」

「んむむウツ!!? ちゅぱっ、ずずっ、ちゅむうっ……クチュクチュ……んくっ、ふうっ、くふうウンツ♡」

親指と人差し指の間で、コロコロと乳首を転がし、指の腹を擦り付け、刺激を与えていくにつれ、バンビエッタの震えが増していく。

「はうっ、くうっ……んあ……はううっ……らめえ♡ か、感じすぎひやうううっ♡」  
唾え込んでいた亀頭を吐き出し、嬌声を放ちそうになる。

しかし、快楽に溺れながらも、奉仕の気持ちが強くなっていくようで、亀頭を唾え直し、刺激を強くしていく。

「くふうっ、んんっ♡ い、今はあ……あたひがイカしえる番なんだからあっ……!」  
「イカせられます?」

「あたひが気持ちよくしへえ、絶対チンポイカしえる……ずつ、ぢゅずずずずつ♡」  
溢れ出る先走り汁を吸いたてながら、一心不乱に顔を上下に揺らす。

「乳肉で挟み込んだ肉胴を圧迫し、しごきながら俺を射精へと導こうとするバンビエツタ。」

「れろれろつ……ちゅぱつ、んぶつ、んぶうつ♡ くつ、んふうつ、くふうう♡」

「それじゃどつちが先にイカせるか勝負しましょうか」

「乳首で感じるバンビエツタをイカせるべく、俺もまた指の腹に力を込める。」

「くひインツ!! はっ、はひゅううつ……んぐつ……負けなひい……っ!」

「プールに浸かったままの腰を跳ねさせ、お尻をもどかしそうに振り動かしながら、バンビエツタは舌先を左右に激しく動かす。」

「バシヤバシヤと水音が立つのを聞きながら、喜悦に身を委ねる。」

「プルプルと高速で肉傘を刺激されると、先走り汁に精液が混じり始めていく。」

「んくつ、ずずずつ……ちゆるるうつ♡ ザーメンの味がしてきたあ♡ ずずつ♡ んぢゅつ♡ ちゅくうつ♡」

「射精が近づいてきていることを知ると、止めを刺すように口技が激しくなる。」

「乳肉が燃え立つように熱くなり、その熱に肉竿が震えつばなしになる。」

「くちゅつ、ずぶぶつ♡ あ、あたひが……しゃきにイカしえるうつ!」

「さすがに負けそうですね。ママのオツパイマンコと口マンコ凄いですよ」

「ひゃえっ!? ママって言われひゃあ! くうっ、くひゅウウツ♡」

「だってもうすぐママでしょ?」

「あ、あたひママあっ♡ もうすぐママになりゆうっ♡ だから……パパの搾りたてミルク、ママの口マンコに飲ましえへえ♡」

母親になるのに、こんな破廉恥なことに溺れてしまっている。

その背徳感がたまらないようで、バンビエツタの興奮が最高潮を迎えようとしていた。

ぎゅむつと形を変えるほどに強く乳肉で圧迫しながら、下品な音を立てて亀頭を吸い上げる。

「ジユゾゾツ♡ ずりゆううっ♡ んぐっ♡ れろおっ♡ れろろろおおっ♡」

先端に集まっている熱い塊を吸い上げるような強烈な吸引に、これ以上我慢できなくなる。

「バンビエツタ様、イキますよ!」

「あ、あたひの勝ちっ! さ、先にイカしえひゃあ……!」

「それはどうですかね?」

「あひゆうっ!? ひっ、ふひイイツ♡ へあっ!? はへええっ♡」



キュツと乳首を摘まんだ指に力を込める。

「射精ますっ！」

口内に精液を解き放ちながら、乳首を力強く引つ張り上げる。

「ぐぐぐううううううううううっ♡」

乳肉を持ち上げるように強く乳首を引つ張られる快感に、バンビエッタの意識が突起へと向かつてしまう。

その隙を突くように、口内へと精液の濁流が流れ込む。

「グブブツ!!? ふぐうっ……で、出ひゃあ!? んぐっ! ぐぐううっ!!?」

ビチビチと喉奥を打つ精液に、バンビエッタの腰が何度も水中で跳ねる。

「バンビエッタ様、イキました?」

「イツたあ……♡ ふぐっ、ぐぐううっ、口マンコと乳首れえ……イツひゃあ♡」

強烈な雄臭を放つ精液が口内に溜め込まれていくにつれ、バンビエッタの頬が膨らんでいく。

「むうっ……ふっ、んぐっ、じゆるるっ、くふうっ……くひゅううんっ♡」

押し寄せてくる喜びに溺れてしまうバンビエッタが、唇の端から精液を垂れ流す。

「たっぷりザーメン飲んでくださいね」

「の、飲むう……♡ パパがいつふあい出ひひゃあ、搾りたてチンポ汁うっ♡」

「まだパパって言うてるよ」

「ぐびっ♡ぐびっ♡グビビビビッ♡」

バンビエツタは唇を窄めると、喉を鳴らしながら精液を飲み下し始めた。

食道にへばりつきながら垂れ落ちていく子種汁。

ドロドロの濃厚な精液を貪り飲む快感に、バンビエツタがうっとり顔と顔を綻ばせる。

「おいひい♡ふうっ、ぐっ、ぢゅるるるっ、おいひいひいっ♡」

「まだまだ出ますよ」

飲んでも飲んでも追いつかない程に大量の精液は飛び出し続ける。

硬く勃起した乳首を引っ張り、バンビエツタに喜びを与えながら、口の中を精液タン

クとへ変えていく。

「くひゅウツ!? んぶっ、イクう……乳首れイクうっ♡ザーメン飲みながらイツひや

うううっ♡」

精飲の悦びと乳首を引っ張られる快感に、何度も絶頂するバンビエツタ。

唇でしっかりと挟み込まれたまま震える肉傘が、少しずつ射精の勢いを緩め始める。

「んくっ♡ぐっ、ぢゅるるるっ……くっ、くくんっ♡ふううっ、むふウウウウッ

……♡」

喉を鳴らす音をゆっくりとしたものに変えていくと、バンビエツタが恍惚の瞳で俺を

見つめてきた。

「ングツ、ングツ♡ズズズズツ、じゆるっ、じゆるるるるっ♡」

長い射精が終わったが、まだバンビエツタは亀頭を啜えたまま、離そうとしない。

水面に髪を揺らし、水中に蜜汁を垂らしながら、尿道に残った精液の残滓を吸い上げる。

「ちゅくっ、ずずっ……♡ れんぶう……吸うう♡ れんぶ飲むう……ちゅぶぶぶぶぶうっ♡」

鈴口を舌先でくすぐられる度に、また新たな快感が込み上げてくる。

腰が抜けたような快感に、乳首を引っ張る力を緩めてしまう。

「はふううっ……ちゅぱっ、ちゅぱあ♡ あはあ、チンポ勃っひやままあ……♡」

「そりやこれだけ気持ちよくされたら勃ったままになりますよ」

奉仕を褒められ妖艶な笑みを浮かべるバンビエツタ。

「そろそろ下の口に欲しくなってきましたせん？」

「欲ひい……でも、まららめえ……精液残っへりゆっ♡ じえんぶ吸い取っへからあっ♡」

肉棒を動かすと、バンビエツタが乳肉を寄せ合わせ唇に力を込める。

「れんぶっ、飲みゆうっ♡ ずずう——っ♡」

「おあっ!？」

残りカスまでしつかりと全部飲むとばかりに、バンビエツタが頬をへこませ唇を尖らせる。

「ふうっ、くひゅう……んくっ♡ ヽきゅっ♡ ヽきゅウウウウッ♡」

唾液を精液を混じらせながら、バンビエツタが喉を鳴らしてすべてを飲み下した。

だが俺の肉棒は、バンビエツタの強烈な奉仕により、いきり立ったままだ。

淫乱の化身となった妊婦の牝豚にぶち込みたい。

そんなどす黒い欲望に駆られた俺は――。

## バンビちゃんも孕んでもやりたい 後編

どす黒い欲望に駆られた俺は、プールの中からバンビエツタを引き上げた。  
「ふえっ……っ？」

水着の上半身部分をずらし、確実に成長した乳房を飛び出させる。

「ふひっ!?」へあつ、んふうううつ、はうつ、あひゃああんっ♡」

乳肉をギュツと掴むと同時に、バンビエツタが甘い声をあげる。

「妊娠マンコに入れますよ」

膝立ちになったバンビエツタの背後から、赤く染まった耳元で囁きかける。

「ああ、入れてえ♡ チンポっ……早く突っ込んでえ♡」

自らお尻を突き出しながら、バンビエツタが俺を求めてくる。

熱く潤った膣内へと、肉傘をめり込ませる。

「あああああ……ひっ、んはあっ♡ は、入ってきたあ……っ♡」

悦びの声が、濡れた唇から放たれる。

「妊娠してもキツキツですね」

「ふあつ、んふうううつ、あんたのチンポが大きすぎるのよ♡ ひあつ!? はひいインツ

「もうすぐ全部入りますよ」

「わ、わかるっ……ああ、マンコの中あっ……みっちり埋まるっ♡ くっ、くひいっ♡」

「どうです?」

「はあっ、あっ、あ、当たったあ♡ 赤ちゃん、驚いちやうわよ……♡」

コツツと子宮の壁に亀頭が当たると、その衝撃にブルツとバンビエツタが大きく身体を震わせた。

肉棒がズツポリと根元まで埋め込まれ、深くバンビエツタと繋がる。

肉竿全体を包み込む熱く蕩けた媚肉の感触に、喜悅の汗が亀頭から零れ出る。

「はあっ、はふう……ああ、マンコお……すっかり馴染んでるう……♡」

奥深く突き込まれたまま、動きを止めた肉竿をじっくりと味わうバンビエツタが、蕩けた甘い声で喘ぐ。

「何百回もやりまくりましたからね」

「そうよお♡ マンコおっ、チンポ穴にされちゃうくらいやりまくったあ♡」

「バンビエツタ様の身体のことならなんでも知ってますよ。こうすると気持ちいいですよ。」

膣穴を満たされた悦びに浸るバンビエツタの意識を、乳房に向けるべく、指先に力を

込める。

「ひゃうつ、はあんっ♡ ああ、いいっ……気持ちいいッ♡」

乳房への柔らかな刺激に、バンビエツタが白い肌をくねらせ汗の玉を滴らせる。

乳房を揉みしだかれる快感に反応するように、ピクツ、ピクツと締まってくる膣穴。

「おっぱいも前より大きくなりましたよね」

形良いポリウムたつぷりの乳房を揉みしだきながら、バンビエツタに囁きかける。

「はうつ、うあ……もうすぐ、ママになるからあ……♡ ひつ、んひいいっ♡」

「妊婦になった方がセックス好きになってますよね？」

ガツツリと肉棒を咥え込み喜びを貪るバンビエツタにからかうように声をかける。

「そ、それは……あたしがっ、あんたのチンポ穴だからっ♡ ひつ、いんつ、くひイイツ

♡」

埋め込まれるだけでは我慢できなくなったのか、自らお尻を押しつけながら、バンビエツタが少しずつ喘ぎを大きくしていく。

「んあつ、くひつ、んひい……ああ、チンポっ……突いてえ♡ 入れてるだけじゃ……物

足りない……!」

「エツチな母親ですね」

「あ、あたしを……こんなにさせたの、あんたのせいっ……♡ いいから動いてっ……ま

たあたしをハメ殺してえっ♡」

「わかりましたよー!」

答えると同時に、緩やかに腰を振り動かしていく。

「くひっ?! あっ、はあっ、はうっ……あああっ……あふううっ♡」

乳房と膣穴に同時に与えられる快感に、バンビエツタは悦びに息を荒げ身悶える。

「ふひいつ?! な、なんでえ……母乳、出てりゆうっ?!」

バンビエツタに黙って俺の能力で母乳が出るようにしておいた。

考えればすぐにわかることだが、快樂中毒になっているバンビエツタはそこまで頭が回らないようで、困惑している。

「気持ちよすぎておっぱい出しちゃったんですか?」

「はあっ、ち、違うっ……! あんたがっ、揉むむからあ……あひっ、ふうっ、ひやうううっ♡」

「もっとお出してあげますね」

「いひいつ?! ああっ、らめえっ……!」

垂れ出る母乳に興奮しながら、揉みしだく手の動きに力を込める。

刺激が強くなれば強くなるほど、バンビエツタの悦びの声は大きくなっていく。

「へうっ、くふううっ、ああ、どんどん出ちやう……赤ちゃんのおっぱいなのに♡」



「まだ産まれてないですから俺のモノですよ」

それを教え込むように、指先に力を込めた。

「くひゅウツ!? ああ、今はまだあ……あんたのモノお……♡」

俺の言葉を肯定しながら、バンビエツタがコクコクと何度も頷く。

溢れ出る母乳を指に絡め、乳首へと塗りたくる。

ピンピンに勃起したピンク色の突起をこねまわし、押し潰すように刺激を与えると、お返しとばかりに媚肉で肉傘をしごき上げてきた。

「くっ……!」

「はあっ、ふうっ……あ、あたひも……チンポからミルク出させるうっ♡」

肉壁を蠢かせ圧迫を加えながら、バンビエツタが形良いお尻を突き出してくる。

赤ん坊の眠る子宮の膜を突かれる悦びに、たらたらと母乳を垂らしながら感じまくるバンビエツタ。

「んはあ、ひっ、んにい……ああ、母乳出すのっ、気持ちひいいっ♡ ひっ、ひインツ♡」

「そんな気持ちいいですか?」

「気持ちいいいいっ♡ 母乳出るだけでっ……感じひやうっ♡」

「それじゃもつと出させますよ!」

乳首から垂れ流れる母乳の量をさらに増やすべく、ギユツと乳肉を搾っていく。

「あつ♡ あああつ♡ ま、また出ひやうう……母乳噴くうううつ♡」

悦びの言葉通りに、乳白色の汁は止めどなくなったらたらと溢れ出てくる。

「おっぱい垂らしながらのバンビエツタ様とするのやばいですね」

母親になりつつあるバンビエツタを、淫乱な雌へと変えていく快感。

一度屈服させたバンビエツタを、また改めて屈服させていくような興奮に、膣穴の中で肉棒がこれでもかというほどに暴れている。

「強くつ……もつと揉んでえ♡ はあ、ああつ……おっぱいギュウウツて搾ってえ……♡」

「了解です」

乳肉の中に指をめり込ませる。

「そうっ、そう♡ 搾ってえ♡ もつとミルク、出ひやしえてえ♡ はあつ、あふううんっ♡」

まだ刺激が足りないとばかりに頭を振るバンビエツタ。

「これでどうです?」

「くふううっ!?! はっ、はひイイツ♡ ふうっ、んあつ、はひひイインツ♡」

ズンツと腰を突き出しながら、乱暴に乳肉を搾りたてる。

「そ、それえっ……今のおツ♡ 揉まれながら突かれるの……いいっ♡」

蕩けきった声とともに、隆起した乳首からビュルツ、ビュルツと母乳が飛び出してくる。

「あはあっ♡で、出たあ……ひいっ!? 母乳出たあ……いひいっ♡」

「どんどん突きますよ」

大きく腰をグラインドさせ、媚肉をエラ首でまくり上げるように擦りまくる。

熱く蕩けた膣穴をほぐされていく快感と、母乳を搾り取り取られていく快感。

押し寄せる快樂に身悶えしながら、バンビエツタは溢れださせる母乳の量を増やしていく。

「ふひっ♡くひいっ♡はあ、いいいっ……イツちやうっ♡」

雌の本能を剥き出しにして快樂を貪る身体では、絶頂を堪えることが出来なくなってしまう。ブルルツと上半身を大きく震わせ、バンビエツタが軽く達してしまう。

だが、一度絶頂したくらいではバンビエツタは満足しない。

肉棒に絡みつく膣肉の圧迫は、相変わらずキツキツだ。

「ふんっ!」

リズム良く息を吐き、媚肉に求められるままに腰を律動させ奥を小突き続ける。

「はひっ!? はううっ……し、子宮が震えるう……♡ 赤ちゃん、びつくりしてる……っ

♡」

亀頭に突かれる度に、胎児を保護する卵膜が震えつばなしになる。

その刺激を快感に変え、潤んだ瞳で宙を見つめたまま、身体を硬直させるバンビエツタ。

膣穴が締まり、また達しようとしている。

「イキたいなら好きにだけイッていいですよ！」

ゴツンツとまた卵膜を震わせる衝撃を与える。

「はへえええっ♡ えひっ?!? おっ、おひいいいっ♡」

歓喜の声を上げながら、バンビエツタが軽く達した。

「あひっ、くうっ……き、気持ちいいっ♡ でもお……中出しされながら、イキたいっ♡」

「いいですけど、赤ちゃんがいますよ？」

お腹が大きくなってからは、中出しは控えていた。

もちろん能力でどうにかなるが、少なからず罪悪感を覚えてしまう。

「だ、大丈夫、はあ、あんたとあたしの赤ちゃんだったらっ……うあっ、だ、大丈夫……

！」

「そうですかね？」

「そうよお！ それにあんたの能力もあるじゃない……だからあ！」

雌と化した顔に、一瞬だけ母性を滲ませたバンビエツタが膨らんだ自分のお腹を撫で

る。

「んくっ、ああ……イクツ♡ あたひっ……またイツちやうからあ……今度はあんたもイツてっ♡ 妊娠マンコに中出ししてええっ♡」

溢れ出るヌルリとした母乳で乳房も、俺の指もヌルヌルになっている。

一緒にイクことを求め、強く膣穴を絞めつけてくるバンビエツタ。

「わかりました！ このまま出しますー！」

中出しすることをバンビエツタに告げ、ラストスパートをかけて腰を振りまくる。

それと同時にミルクを塗りたくりながら、乳房を撫でまわし乳首をこねる。

「ひっ!? くひいつ、はあっ、くるっ♡ くるうっ♡ イクツ♡ イグのおおっ♡」

「俺もそろそろ……!」

「一緒にイクのおっ♡ イツてえ、チンポお、ビュツて出して♡ イツてえええええええ

えっ♡」

「射精るっ……!」

「あひやあああああああッ♡」

最深部まで肉棒をねじ込み、そこで亀頭を跳ねさせる。

大量の精液が妊婦の膣穴へと注ぎ込まれる。

「こ、これっ……最高おっ♡ ザーメン出されながら、イツでりゆううううっ♡

んおっ、おほおっ♡」

もうすぐ母親になるというのに、獣のように喘ぐバンビエツタ。

顔がだらしなく蕩け、開きっぱなしの口から涎を垂らしながら、快楽を貪っていく。

射精音とは、また違う音が聞こえたかと思うと、母乳が勢いよく噴出している。

「ふひいつ!?! んっ、ふひいいんっ♡ ミルク出てりゆう♡ 噴いぢやってりゆううっ♡」

「母乳出しながらイクの気持ちいいんですね」

亀頭で子宮壁を突くと同時に、乳肉をぎゅむつと搾り上げる。

「いひいつ♡ ひっ、んはあっ♡ くヒインッ♡ あっ、ああっ、はふううううっ♡」

搾れば搾った分だけ、勢いよく母乳が噴き出し、バンビエツタは絶頂してしまう。

「気持ちいいっ♡ おっぱい出しながらイグのクセになっひやうううっ♡」

「エロい母親ですねバンビエツタ様は!」

「エロくてもいいっ♡ 気持ちいいの止められにやいつ♡ 母乳噴くのも止められな

ひひひいつ♡」

イキ続けることで、母乳は飛び出し続けるのか、乳肉を汁まみれにしながら、バンビ

エツタは上半身をくねらせる。

「こっちでもイキましようか」

精液の溜まりと化した膣穴の中で肉棒を振り動かす。

「はウツ!? ふっ、ひいいんっ……おっぱいとお、オマンコレえっ、イグううううううっ♡」

押し寄せてきた強烈な快感にお腹を突き出しながら背を仰げ反らせると、バンビエツタはそのままピクピクと痙攣したまま動かなくなってしまう。

「あ、あっ♡ あ、あっ♡ だ、ダメ……おっぱいだけじゃ、い……。ああっ、あああっ♡」

「どうしました?」

「い、イキすぎてえ……身体に、力……入らにやいいっ……」

イキすぎて意識朦朧となったバンビエツタが、ジヨロジヨロと水音を立てる。

「ふひいいっ……へああああっ!? 出ひやったあ♡」

下腹部を見ると、黄金水が弧を描きながら噴き出している。

「母乳噴いてオシッコ漏らすなんて、下品すぎますよ?」

「ふひっ♡ んひいいっ……ら、らっつてえ……イツぢやう、へああああっ♡ オシッコ漏らすの见られるだけで……イツぢやう♡」

イキながら失禁する恥ずかしい姿を見られる快感に、バンビエツタはイクのを止められなくなっているようだった。

そんなバンビエツタを見ると、俺も欲情に歯止めがきかなくなる。

気づけば子宮内はいっぱいになって、大量の精液が溢れ出ていた。

「ひいつ、ひいつ……気持ちいい♡ 妊娠セックス♡ 気持ちいい♡」

ちよろちよろと放尿の勢いを緩めながらも、まだ小刻みにイキ続けるバンビエツタ。たつぷりと精液を出し終えた肉棒を、緩やかに膣肉が擦ってくる。

「もつとしてえ♡ 精液欲ひいい♡ あへえ、もつとイカしえてえええ♡」

媚肉をうねらせながら、交わり続けることを求めてくる。

「……わかりました！」

肉棒を勃起させたまま、バンビエツタの正面へと回り込む。

「はううっ!? くっ、ひいん……はあ、はあ、あふううっ……」

精液と蜜汁にまみれた膣穴へと、躊躇なく男根を突き入れる。

柔らかくほぐれた媚肉を、再び荒々しく擦られていく悦びに、バンビエツタが喜びの声を放つ。

そそり立つ乳首からたらたらと垂れ流しっぱなしになっている母乳。

吸い付いて欲しそうにプルプルと震えていた。

「喉乾いたのでいただきますね」

「んひいい♡ へあつ、はへえつ、へふうウンツ♡」



コリコリと硬くしこった乳首を唇でついばむと、それだけで膣肉が激しくうねり、締め付けを強めてきた。

プールサイドの壁に背を預け、俺の肩に両足を乗せたまま貫かれていくバンビエツタ。

グツ、グツと腰を突き出していくと、膨らんだお腹を圧迫しそうになる。

「んちゅっ、ちゅっ……お腹気をつけないと」

「あひゅっ♡ だ、大丈夫う……お腹、平気だからあつ！」

膣奥まで肉棒を突き入れてほしい。

バンビエツタが、潤んだ瞳で、そう俺に訴えかけてくる。

「チンポおつ、マンコの奥までっ♡ はあつ、おおつ……突っ込んでほしいのお♡ 赤

ちゃん、大丈夫だからあつ！ あんっ、あふうんっ♡」

喜悦に顔を染めてはいるが、僅かながらも母性は垣間見える。

「ダメな時はあつ、ダメって言うからっ！ だから……入れてえ♡ 孕んだマンコに突っ込んでええええっ♡」

「それじゃ容赦しないですよ……っ！」

喜悦を求めるバンビエツタに応えるため、隆起した乳首を唇で挟んだまま、体重を乗せていく。

「んひイイツ!? はっ、ひうっ ♡ くひゅウウツ ♡ へああっ!? あへえええっ ♡」

肉棒が埋め込まれていくにつれ、膨らんだお腹が圧迫されへしやいでいく。

「ぐううっ……ひいつ!? きたあっ ♡ チンポ奥きたアツ ♡ おっ!? おふウウウツ

♡」

額に汗を滲ませながらも、俺と密着していく悦びに顔が蕩けていくのがわかる。

「んっ、ちゅううっ!」

乳房に指を喰い込ませ、乳首から母乳を吸いたてながら、口内へとドロドロの汁を溜めていく。

「ひいあっ!? はあ、あああ……の、飲まれてりゅうっ ♡ 母乳、もつと飲んでえっ……

♡」

バンビエツタに見られながら、口の中に溜まった母乳を飲み下す。

「ふうっ、ひっ、ひいんっ……気持ちいい ♡ ああああ、おっぱい飲まれるの気持ち

ちいいいっ ♡」

「ごきゅっ、んぢゅっ」

「たくさん飲んでえっ ♡ いっぱい出りゆかひやあっ ♡」

もつと飲んでほしいと、バンビエツタがボリユームたつぷりの乳房を突き出してくる。

乳首にむしゃぶりついたまま、もう片方の手で突起をこね回す。

「ひうつ!?」 はあつ、はひいいつ♡ ひあつ!? ああ……出ひやううつ♡」

もともと感度のよかつた乳首が、母乳を垂れ流してからは、さらに敏感になっているようだった。

感じまくっていることを俺に伝えるように、肉傘に絡みつく膣肉が、何度もビクツと痙攣している。

足の指先を丸め、軽く達しながらも、お腹の圧迫に堪えるバンビエツタ。

そのバンビエツタの興奮を煽りたてるように、乳首を吸い上げる音を激しくする。

「へうつ!?」 ふつ、へああつ♡ 音もおつ……しゅごいつ♡ 興奮して感じすぎひやううつ♡」

俺と密着することが、この上無く嬉しいのか、顔を仰け反らせ白い喉を見せつけながら、嬌声を放ち続ける。

「イイイツ♡」 き、気持ちイイツ♡ 母乳吸われながらつ、ふひいつ、あひいいつ♡ んひイインツ♡」

飲んでも飲んで、次から次に溢れ出てくる母乳。

乳首を摘まみこね回す指は、母乳でヌルヌルだ。

「ふひいんつ♡」 お、お願いつ……乳首い……一緒に吸つてえ……♡」

両乳首から、母乳を吸い出して欲しい。

切なげに眉根を寄せながら、バンビエツタが上擦った声でおねだりしてくる。

「後でしてあげますよ。まずはこっちの乳首から」

「くひゅウウウっ!? いっ、いひひひひひひひひっ♡」

口に含んでいた乳首に歯を立てる。

その衝撃に、眼を見開きながら嬌声を放つバンビエツタ。

乳首を軽く噛んでいくにつれ、溢れ出る母乳の量が増えてくる。

「か、噛んじゃ……らめえ! 乳首い、壊れりゅう! ふひっ!? くひひひひひひひひっ♡」

腔肉を擦られながら乳首を噛まれる強烈な快感に、バンビエツタは密着した肌を震わ

せながら絶頂してしまう。

「乳首噛まれたらくれえ……イツちゃうう♡ イツちゃうううううっ♡」

イクのを止められなくなった身体は、ビクビクと跳ねまくり、整った可愛らしい顔を

だらしなく崩していく。

「噛んだら母乳、余計に出ひやうっ♡ おっ、おっ、おひイイイツ♡」

悦楽の叫びがプールサイドに響き、その自分の声の大きさにバンビエツタが頬を赤ら

める。

だが、飛び出す声を抑えることも、小さくすることも出来なくなってしまうているほ

どに、身体は喜悦を貪っていた。

「ずっ、ぢゅずずっ、もう何回イキました?」

乳首に吸い付いたまま視線を上げ、蕩けた顔のバンビエツタを見る。

「わかんやい……♡ 何回イツひやかなんかあ……頭おかひくなつてりゆからあつ♡」

「覚えてないんですか?」

「らつてえ、母乳出まくりでえ……♡ あ、あたひよりい、あんたあ……! まだあ……

チンポおつ、イツへないいいっ!」

「そうですね。イカせてくれます?」

グツとまた膨らんだお腹に圧迫を加えながら、腰を突き出しバンビエツタと密着する。

「イカせ……へうううッ!! へあっ♡ お、おおっ♡ おひいいいいっ♡」

圧迫される苦しみと奥を貫かれる悦び。

獣のように吼え立てながら、バンビエツタがまた絶頂を迎える。

「ひいいっ、へあっ♡ おおおっ……イツぢやううっ♡」

「んちゅっ、ずっ、ずずずずっ!」

「ひぐっ!? ふえええ……ほ、欲しい♡ イツてえ♡ ザーメン、妊娠マンコに流し込



「イクううっ♡ ああ、両方吸ってええ♡ 二つとも射乳するから吸い取ってええっ♡」  
 蕩けたバンビエツタの瞳が、指で摘ままれコネコネされているもう片方の乳首へと向  
 けられる。

「両方とも吸う約束う♡ あひいんっ♡ 両方のミルク飲んれええええええっ♡」  
 「出すときに吸いますから……!」

「チンポミルク出しへええ♡ あたひも……イクッ♡ イクう♡ また母乳噴きながら  
 イグうううう♡」

乳首を口に含んだまま、もう片方の乳房をぐっつと持ち上げる。

膣肉にこねまわされ圧迫される快感に肉竿を震わせながら、射精ぎりぎりまで耐え続  
 ける。

「いきゅっ♡ いきゅうう♡ イクのお……♡ ザーメン出しへええええっ♡」  
 「いきますよっ……!」

「んっあっあ あああ——っ♡」  
 バンビエツタの喘ぎを聞きながら、射精に負けない勢いで、隆起した両乳首を吸い上  
 げる。

「ズズズズッ!」

吸えば吸うほどに噴き出してくる母乳。

「乳首でもイツひやうつ♡ 乳首チュウチュウされて……イツぢやうううつ♡」

孕んだお腹をぐっと押し付け、バンビエツタが俺と密着しようとする。

その拍子に、ズブリツとまた子宮壁を窄る肉傘。

「くはあっ?! はひっ……いいっ♡ ふひいいっ……イツ……ぐううううううつ♡」

乳肉を寄せ合わせ、二つの乳首で引つ張りあげていくと、乳肉が柔らかく形を変えていく。

欲情を煽るいやらしい乳房を見ながら、怒涛の勢いで精液を流し込む。

「乳首しゆわれでえ……精液出しやれるのも、気持ちいい、いいっ♡」

「そんなにイキまくって赤ちゃん大丈夫ですかね?」

からかうようにバンビエツタに問いかける。

「ふへええええッ♡ ら、らいじようぶううつ♡」

「本当ですか?」

「本だからあ♡ もっと出しへえ♡ 出産間近のマンコにザーメン叩き込んだれえ

えええっ♡」

肉壁をうねらせ、さらなる射精を求めるバンビエツタ。

「あんた専用の妊娠マンコにいつ、もっとザーメン飲ませへえええっ♡」

「いいですよ……っ!」



すでに孕んだバンビエッタに、さらに種付けする勢いで、膣奥でザーメンをぶつ放す。  
「あひやああああつ♡ まひや、ザーメンきひやああああつ♡ んおおおおおつ♡」

意識を朦朧とさせながらも、本能のままにイキ続けるバンビエッタ。

イキ続け、意識を飛ばしそうになっても、俺に乳首を嘯まれると、ビクンツと身体を跳ねさせ、また絶頂を迎えてしまう。

意識を失うことが許されない絶頂地獄がバンビエッタを襲い続けた。

「ふえええ……へあ……あへえ……♡ ひつ、ふひいつ……いひ、いひつ……♡」  
だらしなく蕩けた顔と半開きの濡れた唇。

薄気味悪い笑みを浮かべ、バンビエッタは絶頂の余韻に浸っている。

「うあ……気持ちいい……もつとしゆるう……セックスう……しゆるのお……♡」

うわ言のように、まだ俺を求めてくるバンビエッタ。

「家に帰ったらしましょうね」

「うへえ……う、ん……するう……あふえ……♡」

だがバンビエッタの願いは叶わなかった。

出産間近であるバンビエッタの体力は著しく低下しており、帰宅しても熟睡したままだった。

その日の晩。俺は久しぶりに夢を見た。

俺とバンビエツタが正座させられ、黒髪の美少女に説教されている夢だ。  
バンビエツタに話してみると、彼女も同じ夢を見ていた。  
もしかしたらその幼女は――。

# バンビちゃんはストレスが溜まっている

バンビエツタはストレスが溜まっていた。

今までに感じたことがないほどイラついている。

バンビーズの面々からかわれたときも、粕村左陣に敗北したときも、こんなにストレスを感じることはなかった。

バンビエツタのストレスの原因。

それは——育児である。

バンビエツタは3ヶ月前に女の子を出産していた。

もともと子供好きだった彼女は、いいお母さんになろうと努めた。

夫婦そろってまだ18歳の若輩だったが、俺の収入がそれなりにあるので、自身は専業主婦として子育てに専念が出来る。

だから楽勝だと思っていた。

だが現実には甘かった。

おむつを替えても、母乳やミルクをあげても、ベビー服を着替えさせても、泣きやまない。

寝てほしいときに寝てくれないので、自分の時間がまったくない。

夜泣きが酷くて、熟睡することが出来ない。

授乳すると体力が異常に消費してしまう。

なにより俺とセックスする回数が大幅に減ってしまった。

バンビエッタの育児疲れによる性欲の低下、常に子供を気にしなければならない状態なので、身体を重ねる機会が減ってしまったのだ。

もともとストレスをセックスで解消していたバンビエッタ。

たまにセックスをしてストレスを解消しても、翌日にはストレス値がもとに戻ってしまいう日々が続いた。

これで旦那の俺に八つ当たりすれば少しはましになると思うのだが、バンビちゃんは自分より上の存在に、強くものを言えないビビりちゃんだ。

さらに俺たちの子供も、霊力が凄まじく、霊力だけならバンビエッタを上回るほどだ。バンビエッタはもう限界だった。

そんな可哀そうなバンビちゃんだが、俺の休みに一人で出かけるようになってからは、以前よりマシな状態になった。

特に帰宅直後はすっきりとした顔になっている。

理由はすぐにわかった。

とある少女がバンビエッタの、ストレスの捌け口になっているのだ。

DMであるが、Sな部分も併せ持つバンビエッタはその少女に、非人道的な行為を行い、ストレスを解消させていた。

少女の名は——ロリ・アイヴァーン。

俺の肉便器ちゃんだ。

独占欲が強いバンビエッタは、ロリの存在が気に入らないのだ。

子供が生まれる前から二人の仲は険悪だった。

ロリは学習能力がないので、勝てないとわかっているのに、バンビエッタが虚<sup>ウエコムンド</sup>圏<sup>ウエコムンド</sup>に来るたびに喧嘩を売っていた。まあ、バンビエッタもロリをボコすのが目的で虚<sup>ウエコムンド</sup>圏<sup>ウエコムンド</sup>に行っていたのだが……。

俺はロリが怪我をするたびに、彼女を能力で治しているのだが、最近になってロリの負傷が酷くなっている。

前までは欠損するくらいだったのに、子供が生まれてからは死んでもおかしくないほど酷い状態になっている。

今日もロリは瀕死寸前の状態だ。

「ち、ちくしょう……。絶対に殺してやるっ……」

両足を失ったロリが泣きながら恨み節を吐く。

「うぐっ……ひっぐ……うう……」

よほど自分が惨めに思えているのか、涙と鼻水が止まらないロリ。

「ロリ」

「ご、ご主人様っ……!?!」

「すぐに治してあげるからな」

俺は決して大丈夫か、などロリに言ったりはしない。

欠損している時点で大丈夫なわけがないからだ。

「ご主人様あ……」

俺が来たことがよほど嬉しいのか、ロリは這いつくばり、俺のもとに近づこうとする。

「無理しなくていいぞ。ほれ」

「あっ」

俺が手をかざすと、一瞬でロリの身体が五体満足に戻った。

潰れていた鼻も、ありえない方向に曲がっていた両腕も、切り傷だらけだったお腹も、

すべて元通りだ。

「ありがとうございますご主人様」

土下座をして感謝の言葉を述べるロリ。

「顔をあげていいぞ。うちの妻が悪かったな」

「いえ。次こそは倒してみせます！」

やはりロリは学習能力がない。

むしろ原作より酷くなっているような気さえする。

「あの、すぐに部屋に行きますか……？」

「そうだな」

「かしこまりました」

俺がそう言うのと、ロリは嬉しそうに鼻歌を歌いながら、建物に入っていく。

「やっぱりご主人様の力は凄いです」

「そうか」

「はい。あのクソビッチに破壊されたオマンコも元通りになってます」

あそこも壊されていたのか……。バンビエツタも容赦ないな。

「だから今日も可愛がってください♡」

「もちろんだ」

☆☆☆

「あふああああ……♡　もうこんなに……♡　れろお、ちゅぱ、ぴちやつ♡」

部屋に入るなりロリが奉仕させてほしいとお願いをしてきた。

断る理由もないので、ベッドに腰を下ろすと、ロリは丁寧に俺のズボンとパンツを下ろし、期待に膨らんだ勃起した肉棒を目にするなり、うっとりとした顔つきで、片手で竿を支えて亀頭を舐め始めた。

「そんなにフェラしたかったのか？」

「ふむああつ♡ はいっ、ご主人様ああ♡ はぶうっ、ぺろおっ♡ ちゅぶうう♡」

ロリは久しぶりの肉棒に興奮しているようで、色っぽい吐息を漏らし、亀頭を舐め回す。

「チンポ好きな顔してるなあ」

「じゅるっ♡ はあっ、ああっ……♡ 好き♡ オチンポ好きですう♡ ちゅむっ、んむあっ♡」

ロリのフェラチオは本当に上手くなった。

愛おしいものをうっとり見つめるような、この蕩けきった表情もそえられる。

「れろっ、ちゅぱあつ♡ それでは、そろそろお……んむはああ……♡ ああああん……♡」

ロリは大きく口を開けようとする。



このまま勃起男根にむしゃぶりつくようだ。

「ロリ、待て。おしゃぶりは、俺が許可するまでなし」

「そんな……そんなああ……」

見る見るうちにロリの表情が曇っていき、情けなく意気消沈した声を漏らしだす。

「れろおつ、ペろつ、ううう……ご主人様あ……ぴちやつ、れろおつ」

ペニスを加えたいと、潤んだ瞳で俺を見つめて慈悲を求め、もの欲しそうにちろちろと舌で亀頭を舐め続ける。

「そんな媚びた目で見てもだめだぞ」

「ううう……あんまりですう、ご主人様あ……ピチャツ、じゆるるつ、ペろおお」

俺の命令にロリは寂しそうに唸りながらも、亀頭を啜えたい衝動を抑えて、舌で舐めるに留めている。

「ちゆるつ、れろお……オチンポお、啜えたいですう……おしゃぶりさせてください……」

「ペろつ、ちゆぶつ」

「ロリには我慢も覚えてもらおうと思つてな」

ロリもバンビエツタに劣らず性欲に素直だ。

これで我慢を覚えれば、バンビエツタにやられる回数が減るかもしれない。

「んろおつ、ちゆる、ちゆるつ……オチンポお……れろつ、ペろつ……」

嘆きを漏らしながらもロリは決して奉仕の手を緩めることなく、舌で亀頭をたつぷり舐め回して快感を与えてくる。

「あのお、ご主人様あ……♡ 舌で舐めるのはいいんですよね……？」

何か妙案が浮かんだようで、ロリは表情を明るくして問うてくる。

「ああ、それならいいぞ」

「あはっ♡ それではあっ……んむあああっ♡」

ロリは大きく口を開けるとはしたなく舌を伸ばし、亀頭にべつたりと密着させて舐め始めた。

広範囲にわたってんめりのある柔らかな感触が伝わり、思わむ刺激の強さに腰が跳ねそうになる。

「ふはああっ♡ これならセーフですよ？ んろおお、ペろっ♡ はむっ、じゅろろおっ♡」

「ああ、問題ないぞ」

「じゆるむうっ♡ はぶううんっ♡ それじゃ、これでオチンポを味わいますう♡  
じゅぶるるるっ、むぢゅううう♡」

自分に許された範囲を見極めて、淫らな汁音をこぼし、品性の欠片もない卑猥な奉仕を嬉々として行ってくる。

「ずいぶんとドスケベなフェラをしてくるな。そんなにチンポが味わいたかったのか？」

「むはあアア♡　じゆるるっ、れろおお♡　は、はい、味わいたいです♡　じゆるおっ♡」  
 ロリは嬉しそうに首を振って肯定し、舌を亀頭にスタンプのように押しつけると、下品極まりないフェラで肉棒へ奉仕する。

「ご主人様のオチンポを味わないと頭おかしくなっちゃうんです♡　じゅぶ、んろおおお♡　ふはあ、美味しいです♡」

柔らかい舌で亀頭を包むように撫でられると、淫らな刺激がペニスを走り、肉竿が歓喜するように震えてくる。

腰が熱く重たくなっていくような感覚が芽生え、情熱的な口淫に俺の興奮は確実に高まっていく。

「ご主人様のオチンポ大好きれすう♡　れろおおっ♡」  
 「そんなにか？」

「はあい、ご主人様のオチンポの匂いを嗅ぐと、身体がじわじわって熱くなってきましたえ……んりゅっ♡　すごくエッチな気分になるんですう♡」

「ほかには？」

「舌で味わっていると頭がポーツとしてきてえ♡　はふうっ、れるるっ♡　お酒を飲んだ

みたいに酔ってきちやいますう♡」

ロリはうつとりと目を細めて媚び切った表情で俺を見つめ、下品な奉仕をしながら、肉棒への思いを打ち明けた。

「この汁も好きか?」

「ふあああつ、好きですう♡ ちゅろっ、ぴちやあ♡ 滲んでくるカウパーも美味しいですう♡ ああんっ、ヌルヌルしてえ、舌に絡んじやいますう♡」

鈴口から漏れ出てきた先走り汁をしつかり舐め取ると、咀嚼するように口内でくちやくちやと鳴らして味わう。

「でもお、ザーメンをお口に出してただけたらあ♡ ふひやあつ♡ もっと身体がゾクゾク震えて、とつてもいやらしい気持ちにんらえるんですう♡」

「そうなのか?」

「はあい♡ ご主人様のザーメンはとつても濃厚でえ、頭が蕩げちやいますからああ♡」  
「ザーメンも好きなんだ?」

「はいっ♡ お口でも、オマンコでも、ずっと味わいたくなりますう♡」

ロリは嬉々として亀頭にねっとり舌を押し付け、その美貌を惜しげもなく不格好にさせたまま、肉棒に心から酔いしれている様子を見せる。

吐息はより熱くなり、表情も官能に染まりきっている。

肉棒に対する卑猥な賞賛が影響して、かなり高ぶっているようだ。

「むはあああ♡ おしやぶりしたいですう♡ れろっ♡ オチンポ啞えさせてください♡ さあいつ♡ ベろおおおっ、れろっ♡ ぴじゅるっ♡」

「ははっ、そんなにしやぶりたいか？」

腕時計を見ると、開始から10分ほど経っていた。

そろそろ許可を出してもいいだろう。

「よし、もう啞えてもいいぞ」

「ふあああむっ、はむうううんっ♡ んぶううっ♡ ちゅばああああ♡」

「うおっ……!?!」

許しを得るや否や、ロリは食らいつくようにペニスを啞え込み、舌で亀頭をねぶり回してきた。

途端にペニスへの刺激が強くなり、腰の中心に重たい快感の一撃を受けた俺は、思わず声を漏らしてしまう。

「んじゅるるるう♡ やつとしやぶれたあ♡ ぢゅぶうう、じゅるるるるっ♡ ご主人様のオチンポお♡ んじゅううううう♡」

尻尾を振って餌に飛びつく犬のように、ロリは喜びを露わにし、卑しい音が出るのも構わずに、濃厚なフェラを繰り出して来る。

ぶるんと弾力のある唇で亀頭を挟み込んでしごいては、柔らかな舌で裏筋をねつとりと擦ってきて、熱烈な奉仕でペニスの興奮をみるみるうちに高めていく。

「じゅるっ、んむううううウウ♡ はぷっ、むはああ♡ ご主人様あ、気持ちいいですかあ？ ぢゅぷううう♡」

「おおお、これはすごいな……！」

「ふああああ♡ カウパー、いっぱい出てきましたあ♡ これも好きですよ♡ んぢゅウウ♡ あふううんっ、じゅるるるるるッ♡」

ロリの卑猥すぎるフェラに、獣欲が荒れ狂うほど煽られ、俺はさらなる刺激が欲しくなってしまう。

「ロリ、もっと激しくしてみろ」

「ふあああい、かしこまりましたあ……♡ んぶうっ、じゅぷう♡ もつとご奉仕させていただきます♡」

「ああ」

「むじゅるるるるっ♡ じゅぶるっ、ぢゅぷうウウッ♡ はむうっ♡ あふっ、んぢゅるるるッ♡ ずずずっ、じゅろおおお♡」

次の瞬間、ロリはフェラをさらに激しくさせてきた。

吸引は先走り汗をすべて吸いつくしそうな勢いで、舌は熱烈に這いまわって亀頭を

隅々まで磨き上げていく。

「むはあああんツ♡ あたしも興奮しちゃいますう♡ あむううっ、じゅぞぞぞぞッ  
んぱああっ♡ オチンポしゃぶってオマンコ濡れちゃいますう♡」

強くなる口奉仕はロリ自身の性欲も高めているようだ。

漏れる息は次第に荒さを増し、腰をくねらせる姿もいつそう淫らになってくる。

「じゆるるウウツ♡ 凄いですう、先走り汁どんどん出てますう♡ はむっ、ちゆるうう  
♡ むじゆるるっ、んじゅぶウウウウ♡」

予想以上に熱烈な口奉仕に、射精感が一気に高まってしまふ。

「よし、それじゃイクぞ……!! たっぷり出すからこぼさずに飲むんだぞ!!」

「はいっ、わかりましたあ♡ んぢゆっ、むううう♡ じゅむううううっ♡」

絶頂を告げると、ロリは口内射精への期待感からか、亀頭への吸引をより強めてきた。

「ぢゅぶおおおおっ♡ あむう、んずううううう♡ むじゆるッ♡」

「射精すぞ……!!」

「んむぶぶうううううううっ♡」

口内に勢いよく精液を放たれ、ロリは表情をますます喜悅に染めながら、身体をビク  
リと跳ねさせた。

「んむぶううう♡ んくっ、ごくんっ♡ むはあっ♡ ぎゅっ、んんっ♡」

「まだまだ出るからな」

「んぶう♡ むはっ、んぶううう♡ あぶっ、ゴクンッ♡」

ロリは吐き出された精液を実に美味しそうに、ごくごくと喉を鳴らして飲み下している。

「はむぢゅっ、ぢゅううっ♡ んはああんっ♡ んくっ、んぐっ♡ おげえっ♡」

「よし、これで打ち止めだ!」

「おつぶうううううううううっ♡」

残りの精液を一気に放出すると、ロリの頬が膨らんだ。

口内に収まりきらないようで、鼻の穴から黄色が混じった精液が溢れだす。

「むふう……♡ んくっ、んんっ♡ ぶふうあ……♡ んぐっ、げふっ♡ はむう♡」

「ロリ、よかったぞ」

射精を終わらせた俺は、腰に残る余韻に愉悦を覚えながら、ロリを褒めた。

ロリは大量に吐き出された精液をなんとか受け止めきり、うつとりとした表情で飲み続けている。

鼻から精液が溢れ出たことにも気づいたようで、右手で鼻の横を押し潰して、放出された精液も口に移動させた。

「うわあ」



その底なしの淫欲に少々面喰いつつも、俺はいつそう愉快的気分になった。

「はぷうつ♡ ご主人様あ、どうですかあ?」

「なにがだ?」

「雑魚まんこなあたしですけど♡ お口は雑魚じゃなくなりましたかあ?」

「雑魚まんこを自称するロリは自分を卑しめるのが好きだが、今回は俺に褒められたいらしい。」

「そうだな」

「あああ……♡ ありがとうございませう♡」

「嬉しそうだな」

「はあいつ♡ 次はあたしの雑魚まんこを鍛えてくださいあい♡」

「もちろんだ」

「あ、ちよつと待っててもらえますか?」

「わかった」

ロリは何かを思い出したように、紙袋を持って、脱衣所に移動した。

「ご主人様あ、お待たせしましたあ♡」

戻ってきたロリ犬の格好をしていた。

イヌ耳のカチューシャ、首輪、尻尾のアナルパールを身に着け、文字通り雌犬になっ

ている。

「これらはすべて俺がプレゼントしたものだ。

「犬のコスプレ気になってるのか？」

「もちろんですよ♡ ご主人様がプレゼントしてくださったものですからあ♡」

「それだけか？」

「あ、あと……あたしはご主人様の雌犬でもありますからあ♡」

「肉便器じゃなかったか？」

「肉便器もですけど、雌犬でもありますう♡」

イヌ耳を触り、尻尾を振りながら、媚びた目で見つめてくるロリ。

「そっか。でも犬とはセックス出来ないなあ」

「そ、そんなあ……」

「……冗談だよ。準備が出来たならやるぞ」

「はいっ♡」

興奮するロリを壁に追いやり、右足を上げさせる。

「はうううっ……♡ ご主人様あ♡ もうオマンコ準備できてますからあ、さっそくオ

チンポ入れてください♡」

「フェラしただけで、そんなにマンコ濡らしたのか？」

「はいっ♡ 雑魚まんこですかっ♡」

「よし、それじゃ挿入するぞ」

「ふあああああああんっ♡」

ペニスが膣洞に進入していくと、ロリは待ちかねたかのように嬌声をあげて、歓喜に全身を震わせる。

ロリの膣内は愛液で満ちており、結合部からいやらしい音を立てながら、蜜汁が溢れてくる。

「ひゃああああんっ♡ ああ、ご主人様ああ♡ オチンポいただけで嬉しいですよ♡

あひいっ♡ 一番奥まできたあ♡」

ロリの膣穴は男根を埋めた瞬間から締めり始め、ピストンへの期待感を募らせているのがわかる。

「ロリ、今日はどんな風にしてもらいたい?」

「ふああああ♡ いいんですかあ? あはあ……♡ でしたらあ、うんと強くオマンコの穴をほじつてくださあい♡」

「強くほじればいいのか?」

「はあい♡ オマンコの肉がめくれちゃうぐらい、乱暴に犯してほしいんですう♡

あたしの雑魚まんこを虐めてくださあい♡」

すっかり淫欲に取り込まれたロリは恥ずかしいおねだりすら平然と口にする。

「いいぞ。でも途中でギブアップするんだろ?」

「が、頑張りますからあ……:」

「わかったよ。……ほらっ!」

「きやひイーンっ♡ ふはっ、あああああつ♡ オチンポ突き刺さってますうう♡ あ

ひやああああ♡」

ロリの望みに応えるべく、最初から荒々しく牝穴を蹂躪してやる。

膨張した肉棒を膣奥深くへ突き刺すと、ロリはたまらず歓喜の声を爆発させる。

「あああああつ♡ これええ♡ この強いのがいいですう♡ きやあああんつ♡ あ

ひいいいんツ♡ 感じちやいますううツ♡」

「これでいいんだろ?」

「はひいいいっ♡ ズンズンっ、頭で響くう♡ おまんこ感じてますう♡ ひやああ

ああんツ♡」

遠慮も手加減もない抽送に喜びを表すロリの淫らさに、俺はいい気分に浸りながら、勢いよく腰を前後させていく。

「ひあああああつ♡ きやあああんつ♡ オチンポお、いっぱいオマンコ擦れてええ♡ い

いれずうっ♡ あひいいいんツ♡」

「派手によりがり声をあげてるな」

「ふひやああ♡ さつき口に出していただいた精液の匂いと味が残つててえ、エツチな気分盛り上がってるんです♡」

「まだ残つてたのかよ」

「はひいいつ♡ 精液、オチンポお♡ 一緒に味わうと蕩けちゃいます♡ きやあああ♡、んはああ♡」

ロリの息がいつそう荒くなり、喘ぎ声もより品のないものになっていく。

「ロリ、もつと喜ばせてやるぞ」

俺はペニスを突き込む角度に変化をつけ、亀頭で膣壁を引つ掻くように抽送する。

「きひいん♡ カリ食い込んできてますうう♡ ああん♡、きやふうう♡」

オチンポ乱暴ですう♡ これ気持ちよすぎるうう♡」

「マン汁がたくさん出てくるな」

「ひいん♡ ああ♡、グジュグジュいつでりゆう♡ きやはああ♡ もつとしてください♡ もつとオチンポお♡」

責めれば責めるほどロリの反応は淫らになり、艶めかしい声をあげ続け、身体をくねらせる媚態に、誘われるように俺の情欲も強くなつていく。

媚肉は刺激に合わせてリズムよく収縮し、ペニスの先端から根元まで締め付け、竿に

快感を味わせてくる。

「きやあんツ♡ あひいいんつ♡ 突いてええ♡ オチンポ突いてくださあいっ♡  
きやひいいんツ♡」

「ん？」

「はあうんつ♡ きやあんつ♡ セックス気持ちいいれずう、ご主人様あ♡ あんつ、  
きやああんつ♡」

ロリの喘ぎに、犬の鳴き声みたいなものが混じっている。

犬のコスプレをしているからか、やけに奇妙な喘ぎが似合っているように見える。

「ロリ、その犬みたいなのがり声はわざとか？」

「わ、わざとじゃないれずう♡ あんつ、きやひいいんつ♡ あたしは雌犬ですからあ  
♡」

「そうか。ならもつと鳴かせてやる！」

「あんつ、はあうんつ♡ きやんつ♡ もつと雌犬まんこ気持ちよくしてくだひやいつ  
♡ ひやううんつ♡」

子宮を容赦なく突くと、ロリは犬の鳴き声に似た喘ぎを、はしたなく放つ。

どんだん乱れていやらしい様をさらしていくロリの姿に、俺は愉悦を覚えて淫欲が強  
く沸いてくる。

「キャヒイイいん♡ きやう♡ あんつ、掻き回されてますうう♡ わふうつ  
 きやふふううんつ♡」

荒々しいピストンで膣穴を思いつき掻き回されると、ロリはよけいに雌犬じみた喘  
 ぎ声を跳ね上げて、淫らにより狂う。

「これはリードもプレゼントしたほうがよかったかもな」

「あんつ、きやあんつ♡ キャヒイインツ♡ あふううううつ♡」

乱暴に責めれば責めるほど、ロリの痲態からはどんどん品も感じられなくな  
 り、獣と見紛うほどのはしたなさを見せてくる。

俺は興奮に任せ、ピストンを緩めることなく、快楽を食るように膣穴を責め続ける。

「あひいいつ♡ 雌犬セックス気持ちいいれじゆうう♡ おひつ、んひやひいいつ♡」

だんだんと呼吸のペースを乱れだし、腰の辺りをブルブルと震えさせ始めた。

どうやら絶頂が近いようだ。

「イカせてやるからな」

「嬉しいっ♡ 嬉しいですつ、ご主人様あつ♡ オマンコアクメツ、したいですつ♡

オチンポでイカせてくださあいつ♡」

「ああ、思いつきりイけ！」

俺はロリをアクメに突き抜けさせるべく、激しく肉棒を抽送させて、膣襞をえぐりた





絶頂に達している最中の媚肉を肉棒で掻きむしられ、暴力的な刺激を受けたロリは悲鳴に似た喘ぎをあげる。

「きやひいいいんっ、ひいんっ♡ 気持ちいいのすごいいいっ♡ あんっ、きやいいいんっ♡」

膣肉超しに膀胱にも刺激が伝わるように抽送を始めると、ロリはいつそう激化した快感により、身体を跳ね躍らせながら下品な喘ぎ声をまき散らす。

「きやんっ、ひやああっ♡ オシッコ出ひやうっ♡ これしゅごいアクメになっちゃいまひゆううっ♡ んおおっ、きやいいいんっ♡」

次の絶頂に向かって膣が締めりを強め、ペニスと媚肉の摩擦が過激になることで、俺の方も高ぶっていつてしまう。

「あはああああっ♡ イッてるのにつ、もっとイッひやううう♡ はひイインッ♡」  
さらなる絶頂が近づき、ロリの腰が小刻みに痙攣し、肉褰のうねりが騒がしくなってきた。

「やあああああんっ♡ もうイクうッ♡ きやいいいんっ♡ イクっ、イクイクイクう♡」  
「そらイツちまえ!」

「ひきやあああああああああああんっ♡」

アクメの最中、さらに一段階上の激裂な絶頂に達し、口のは身体は大きく震え、凄ま

じい放尿音を立てて小便をまき散らす。

「きひいいいいんっ♡ オシッコ出ちやいましたああつ♡ 恥ずかしいのに感じちやうう♡ たまらないでしゆうっ♡ ひいいいいイン♡」

大量の尿を噴き散らし、大きく尻をよじらせて快感に浸るロリ。

「小便まで漏らして本当に雌犬だな！」

「そうなんれずうっ♡ あたしは嬉しくてオシッコしちやう雌犬なんでしゆううっ♡ おひいいいいっ♡」

白目を剥き始め、隠語を連発するロリ。

「むひやああつ♡ きやひいい♡ イクつううう♡ オチンポで飛んじやいまひゆうう♡ イクううう♡ きやんっ、あふうううんっ♡」

「くっ、俺もそろそろ限界だ」

とうとう俺も射精感が限界に達し始めた。

「あひやんっ♡ ああつ、中にい♡ 種付けしてもらえう♡ きやひインツ♡ 雑魚まんこにザーメン来ひやうっ♡」

牝穴に精液が流れ込む快楽を思い出し、ロリはいつそう激しく身悶えて狂乱する。

「よしっ、射精すぞ！」

「んひやああああアアアアアアアッ♡」

勢いよく吐き出された精液が豪快に子宮を叩き、膣穴は瞬く間に白濁液だらけになる。

ロリは獣のようなよがり声を室内に轟かせた。

「ひゃひひひひひひッ♡ 出てりゅううううッ♡ あっついザーメンッ♡ ふあああ♡ 子宮にいっぱい入ってくりゅううううッ♡」

「たつくさん出すから、全部受け入れろよ……!」

「ひゃひひひ♡ ありがとう♡ ぎゃひひひひひッ♡」

ロリは再び絶頂したようで、身体の痙攣と下品な失禁は一向に止まる気配を見せない。

尿道口から恥水をびちゃびちゃと漏れ出させながら、華奢な背筋をわななかせて、快楽に染まった悲鳴をあげ続ける。

「はっひゃアアアアアッ♡ オシッコいっぱい♡ ザーメンと一緒にっ、いっぱい飛んじやってまひゅううッ♡ いひひひん♡ 気持ちいいイッ♡」

受精と放尿を同時に行い、絶頂し続ける。

「ぎゃひひひん♡ ご主人様♡ ザーメンもっ注いでください♡ 精液欲しいのおお♡」

「ああ、もっ注いでやる!」

無様なロリのアへ顔で興奮を覚えながら、俺はペニスを脈打たせて精液を吐き続ける。

「あひひひいッ♡ お漏らし雑魚まんこイキつばなしですうっ♡ 子宮もたぶたぶになつてますうっ♡ あはあああッ♡」

「これが最後の一発だ……!」

俺は亀頭を子宮口に密着させ、ひと際大きくペニスを震わせ、残りの精液をまとめてぶちまけた。

「あひひひあああああああッ♡」

直後に、あまりの絶頂に興奮したロリは後頭部を壁にぶつけてしまう。

だが快感に支配されたからか、ロリは痛みを感じていないようで、下品な喘ぎを放ち続ける。

「むひひい……♡ ひふっ♡ あはああ……♡ んああ……んふう……♡」

長かった射精が終わると、ロリも絶頂から解放されたようで、蕩けた表情で快樂の余韻に浸っていた。

「あひひい……♡ 今日のセックスもお、よかったですう……♡」

「そうか、そいつは何よりだ」

「はあいつ♡ もっと虐めてくださいねえ……♡」

「もちろんだ」

そういうえば何か忘れてるような気がする。

「あ、思い出した」

「はひい……?」

「これ抜くぞ」

「ふえ……んほおおおおおおおおおおおつ!」

俺は一気に尻尾のアナルパールを引き抜いた。

刹那。不意打ちの衝撃にロリが獣のような悲鳴をあげる。

「お、おひりい……♡ いきなりは、卑怯れしゆう……♡ んおお……♡」

ロリはそう言うと、再び尿を漏らし始めた。

どうやらアナルを刺激されて絶頂したようだ。

「ロリ、おしっこ漏らしすぎだぞ」

「す、すみませえん……♡ 尿道も、オマンコと一緒に雑魚なんでひゆう……♡」

「ならこれで尿道も鍛えてみるか?」

アナルパールを見せつけ、尿道口に宛がう。

「あ、ああつ……だめですつ! そんなの入りませんつ!」

先ほどまで蕩けた表情を一変させ、必死にアナルパールを拒むロリ。

「おいおい、ご主人様の命令に逆らうのか？」

もちろん尿道口に異物を入れるつもりはないが、ロリをいじめたくなかったので、演技を続けることにした。

「い、いえっ……あたし、そんなつもりは……」

ロリは俺の肉便器であり、雌犬だ。

主の俺に逆らうのはご法度だと、ロリが一番理解している。

「ご主人様、お願いします……。尿道口だけは勘弁してください……」

とうとう号泣して懇願し始めてしまった。

よほど尿道口にトラウマがあるのだろうか。

「……わかったよ。勘弁してやる」

「あっ……ありがとうございますっ！ ありがとうございますっ！ ご主人様あっ！」

帰宅後。ロリがあれだけ尿道口責めを拒否した理由がわかった。

バンビエツタが剣でぶっ刺したらしい。

ロリが自身のマンコが俺専用だと言い放ったことに、怒りの沸点が限界突破したバンビエツタが、剣でまんこと尿道をぐちゃぐちゃにしたとのことだった。

やはり女の争いは怖い。